

SAPPORO  
AGRICULTURAL  
COLLEGE.

增補第三版

札幌農學校

全壹册

SHŌKWABŌ,

ODENMASHIO-CHO, NIHONBASHI-KU.

TOKYO, JAPAN.

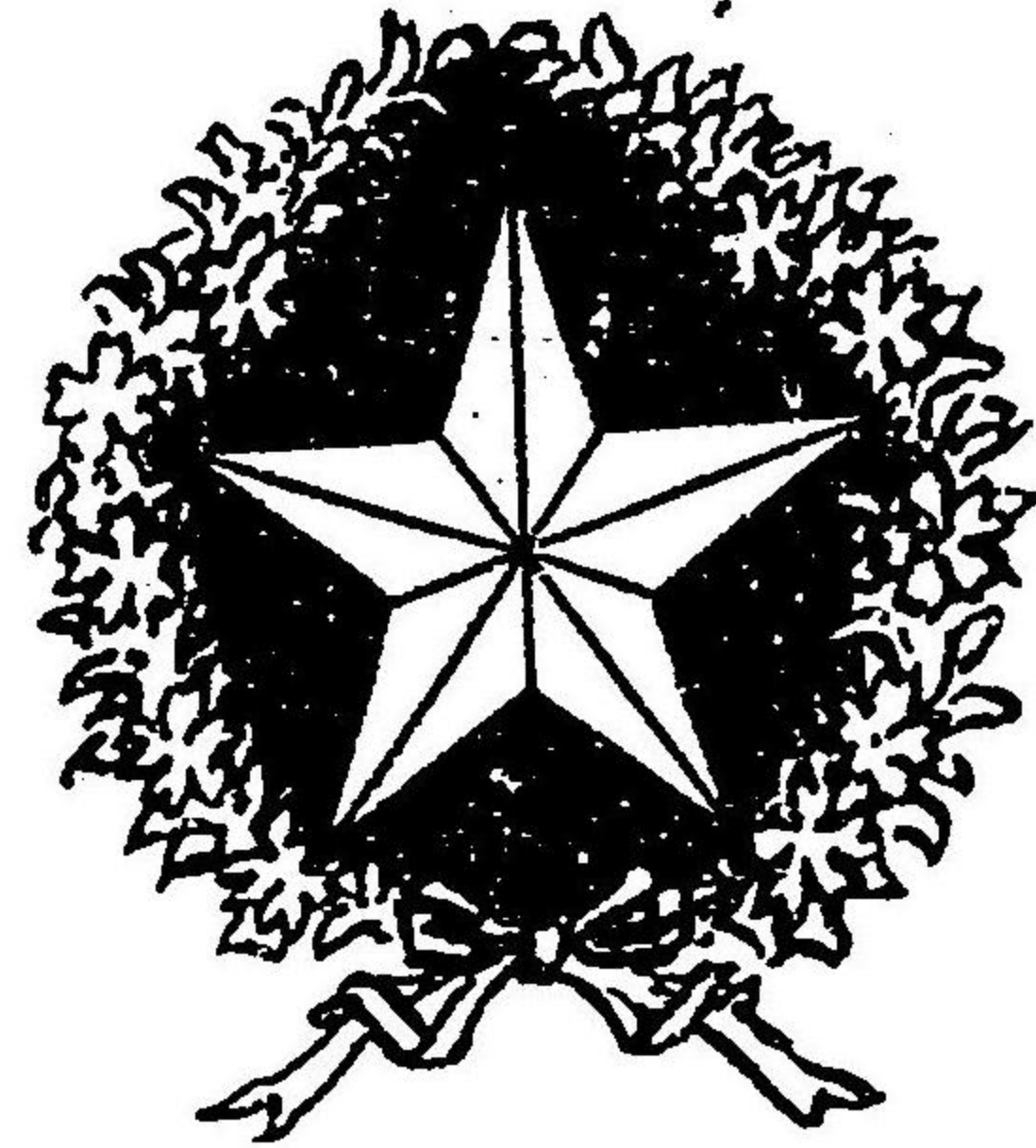
札幌農學校





1  
2  
3  
4





SAPPORO  
AGRICULTURAL  
COLLEGE.

增補第三版

札幌農學校

全壹册

SHŌKWABŌ,

ŌDENMASHIO-CHO, NIHONBASHI-KU.

TOKYO, JAPAN.



FB 22  
123

### 第三版の辭

曩に本書を編纂刊行して以て廣く我校の真相を世に紹介せり。然るに版を重ねて今や第三版を促さるるに至るあらんとは。洵に意外の成功なりと謂ふべし。顧ふに是れ世は北邊の聖地に立てる。我校の特色を知り。來て校門に入るもの歳を追ふて倍加し。本書の増刊を求むると切なるによらずんばならず。而して此間に於ける我校は。多大の發達と擴張とを致し。曰く學科課程の改正。曰く新築校舎の竣功。曰く創立二十五年紀念祭。曰く大學問題。曰く何々と。形勢全く一變せんとするものあり。乃ち冗を省き缺を補ひ。最新の事實に據り。削訂補正して第三版を成し。以て世に示す。採否固より一に讀者の權内にあり。

第三版の辭

一



向  
言  
之  
館

855169



終に臨み本版改訂に就て、芳賀鋏五郎、川口順次郎、大竹溫孝、東郷實、石澤雄右衛門、河内完治、諸君の勞を多とし、一言茲に謝す。

明治三十五年四月

學藝會

### 黒田清隆君開校式辭

王政維新ノ始首トシテ蝦夷開拓ノ策ヲ 御垂問アリ尋テ舊  
 稱ヲ改メ北海道トシ國郡ヲ分チ經界ヲ畫シ本使ヲ置キ之ヲ  
 管理セシム爾來茲ニ八年黽勉經營物ヲ開キ務ヲ成スノ方漸  
 次緒ニ就ク而シテ農業ハ拓地殖民ノ道ニ於テ將サニ專務ト  
 スヘキヲ以テ尤モ本使ノ意ヲ注ク所ナリ顧フニ我邦ノ農業  
 タルヤ多クバ之レヲ老農老圃ノ實驗ニ得法ノ取ル可キ無キ  
 ニ非ラズト雖匠徒ニ慣習ニ因仍シ格致ノ學ヲ講ジテ以テ之  
 レヲ闡明推廣スル能ハザルヲ以テ終ニ其進步ノ効ヲ見ズ故  
 ニ今農學校ヲ設ケ教師ヲ海外ニ聘シ英ヲ育シ蒙ヲ啓キ以テ  
 農學ノ面目ヲ一新セント欲ス果シテ能ク斯ノ目的ヲ達スル



# ADDRESS

OF

## PRESIDENT W. S. CLARK.

AUGUST 14, 1876.

Your Excellency, Mr. Director, Officers and Students of Sapporo Agricultural College, and Gentlemen ;

It is with mingled emotions of pride and pleasure that I participate in the ceremony of formally opening this, the first, Agricultural College in the Land of the Rising Sun.

It is less than ten years since Massachusetts, celebrated as she is for her progress in educational affairs, could boast that she possessed a similar institution. To-day it is my high privilege to stand here the first president of the Sapporo Agricultural College, and also president of the Massachusetts Agricultural College, which is located many thousand miles away on the opposite side of the great round world on which we dwell. I was much gratified to learn upon my arrival here that the three grand model and experimental farms of the Kaitakushi were each under the direction of a Japanese gentleman who had received instruction at the Massachusetts College. Now I am here, with two graduates of the College, to lay the foundations of a similar institution, which I trust will in years to come powerfully aid in improving the agriculture and developing the great producing industries of Hekkaido.

The establishment and maintenance of schools and universities are justly regarded as among the most imperative duties of every enlightened government, but it is very remarkable that while institutions for the promotion of education in agriculture and the mechanic arts have only recently received due consideration in Europe and America, His Excellency Governor Kuroda has founded first of all in Hokkaido a college of agriculture. May its eminent success demonstrate the wisdom of his policy.

We who have been called to constitute the first board of institution here will zealously do our part in our noble and inspiring vocation.

開校式辭

ニ於テハ豈獨リ一道ニ功アルノミナランヤ將ニ以テ全國ニ  
普及セントス教員生徒其レ各斯意ヲ體認シ夙夜懈ルニ匪ス  
成立スル所アリ以テ本使ノ偉業ヲ贊ケ朝廷ノ盛意ニ副セヨ  
山ヲ爲ル九仞功一簣ニ虧ク夫レ一簣ノ功既ニ今日ニ始マル  
亦願クハ其他日ニ虧クル無ランコト是予ノ深ク本校ニ望ム  
所ナリ

于時明治九年八月十四日

陸軍中將兼參議開拓長官正四位 黑田清隆



We will by our example and our teachings endeavor to develop in the young men who may become our pupils those qualities of mind and heart which will best fit them for usefulness in life. I am informed by His Excellency, who has already achieved for himself by patriotic devotion to his country's service a competent fortune, enduring fame and offices of the highest honor and responsibility, that there is nothing in the present policy of the imperial government to prevent any member of the College from imitating his illustrious example and by the exercise of similar virtues attaining to like distinction. This wonderful emancipation from the tyranny of caste and custom, which in ages past has enveloped like a dark cloud the nations of the East, should awaken a lofty ambition in the breast of every student to whom an education is offered. Let every one of you, young gentlemen, strive to prepare himself for the highest positions of labor and trust and consequent honor in your native land which greatly needs your most faithful and efficient service. Preserve your health and control your appetites and passions, cultivate habits of obedience and diligence, and acquire all possible knowledge and skill in the various sciences which you may have an opportunity to study. Thus you will prepare yourselves for important positions, which are always in waiting for honest, intelligent, and energetic men, of whom the supply is uniformly less than the demand in this as in every other country.

In conclusion, I will only say that the circumstances of this interesting occasion seem most auspicious, and that if the Sapporo Agricultural College can but enjoy the fostering care of His Excellency during the first few years of its infancy, I am confident it will both deserve and command the respect and support of the people not only of Hokkaido, but of the whole empire of Japan.

例言三則

一 本會は吾が札幌の地を以て、異日帝國に於ける學問中心の一都市たるべきを信ずると共に、特殊の歴史を以て、此地に設立せられたる、札幌農學校の沿革程度校風等を記述して、一卷となし、之を普ねく、江湖に頒ち、一は以て此地に遊學せんとする青年諸子の伴侶となし、一は以て札幌農學校の真相を世人に紹介せんとするの微意、竟に本書の刊行を見るに臻りたるものとす。

二 本書は今四月に稿を起し、五月に了る、日數僅に三十加ふるに、會員諸子、學業の餘暇を節して、執筆せるものなれば、字句錯雜、意義自ら重複せるのみならず、加ふるに文體の整一を



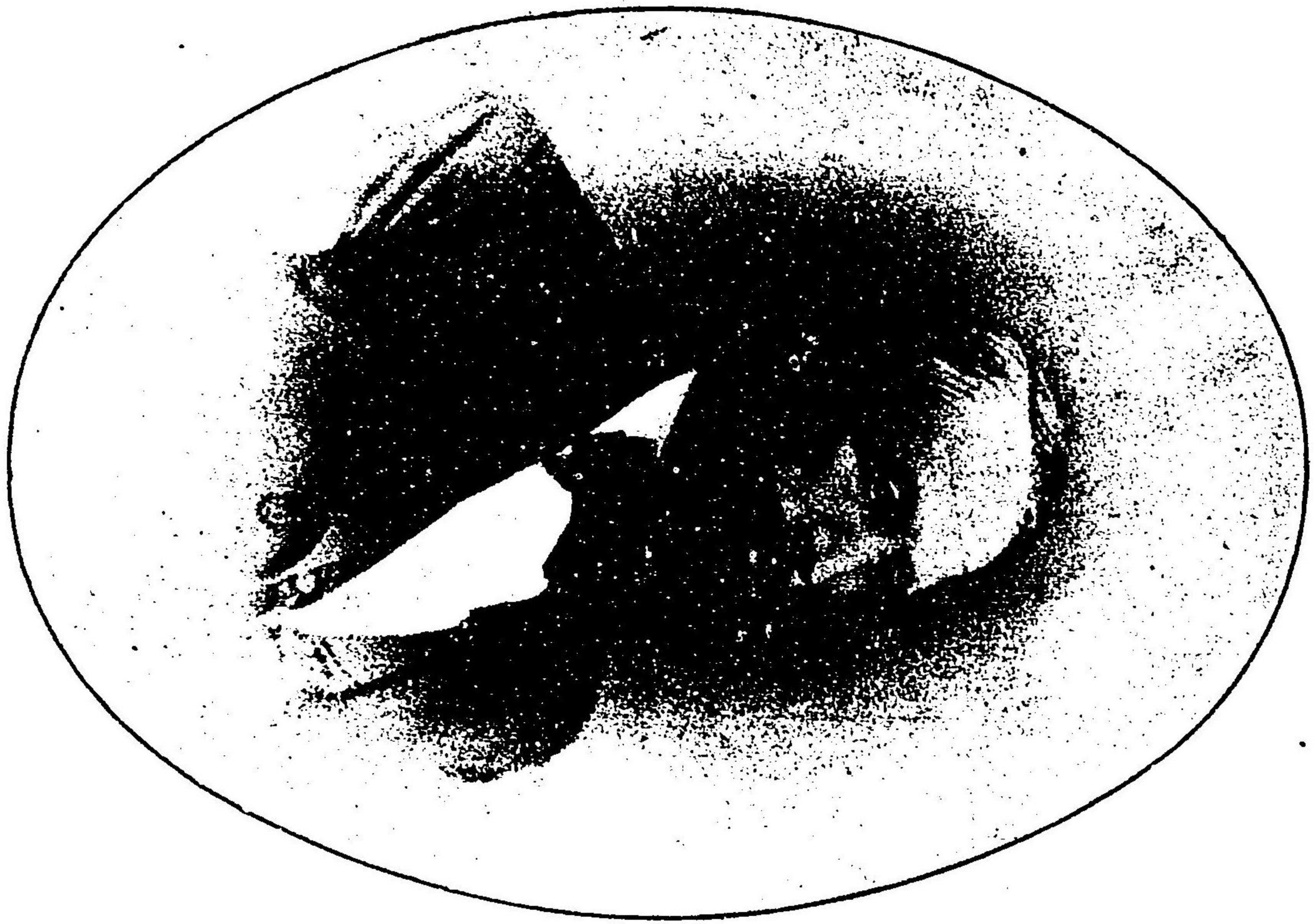
例言三則

缺くものあり、是れ本會の觀官諸賢に對し、深く謝する所なり。

三 本書刊行に際し、宮部金吾、大島金太郎、高岡熊雄、永田方正の  
四 君は、親しく校正の勞を取られ、又明峯正夫、安東義喬、岩谷  
讓吉、菅菊太郎、草場榮喜、森廣の諸氏は、専ら編輯の任に當り  
て、各熱心に從事せられ、其他蠣崎知二郎、伊東祐夫の二君も、  
各其勞を頒たれたるの功勞は、本會の永く存して、忘れざる  
所とす。

明治三十一年五月下浣

札幌農學校學藝會

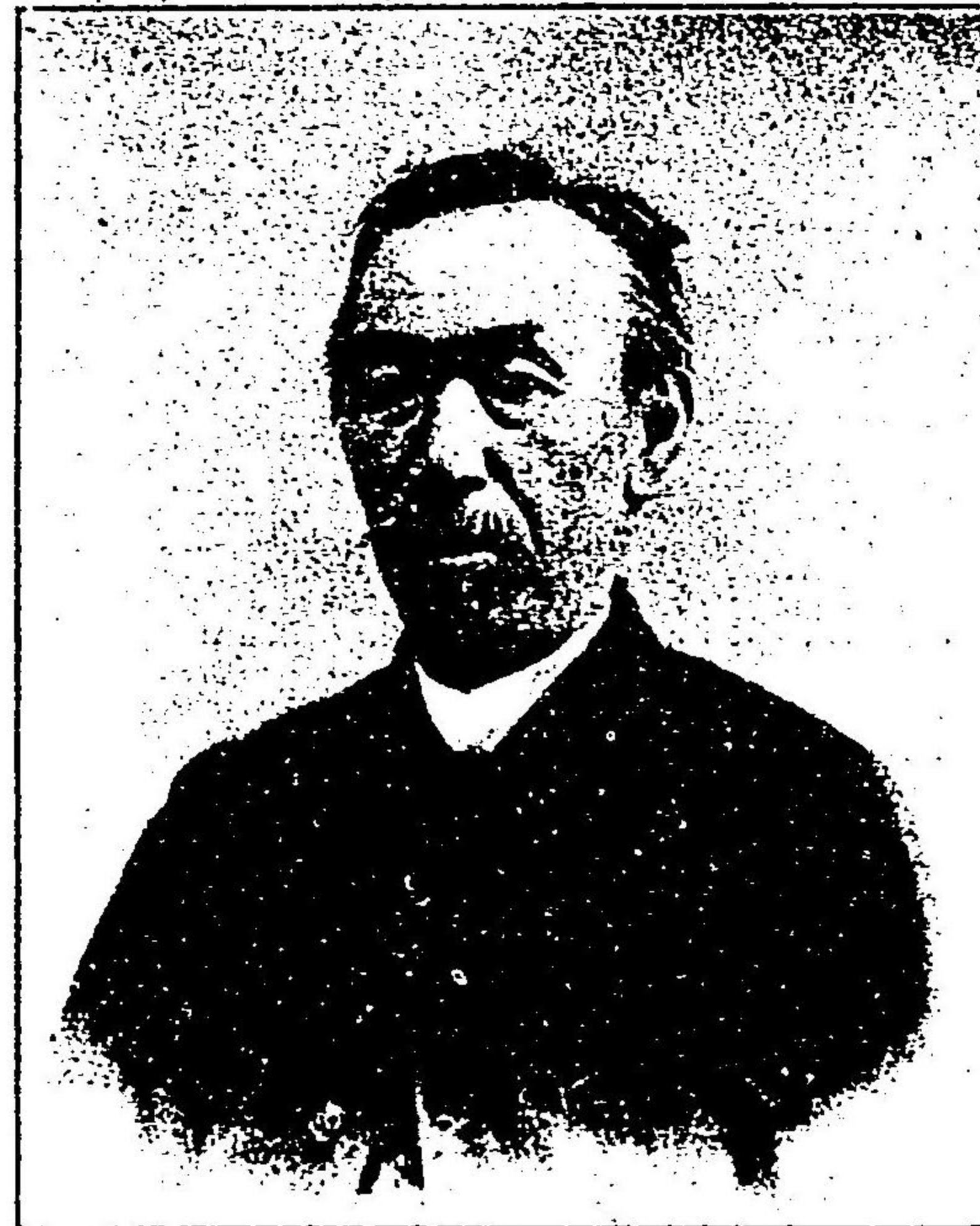


像 守 氏 ヲ ー ラ ヲ 故



像 守 伯 隆 清 田 黒 故





氏三源 森長校前



氏丈廣所調長校前



氏介晶藤佐長校現



氏藏文口橋長校前





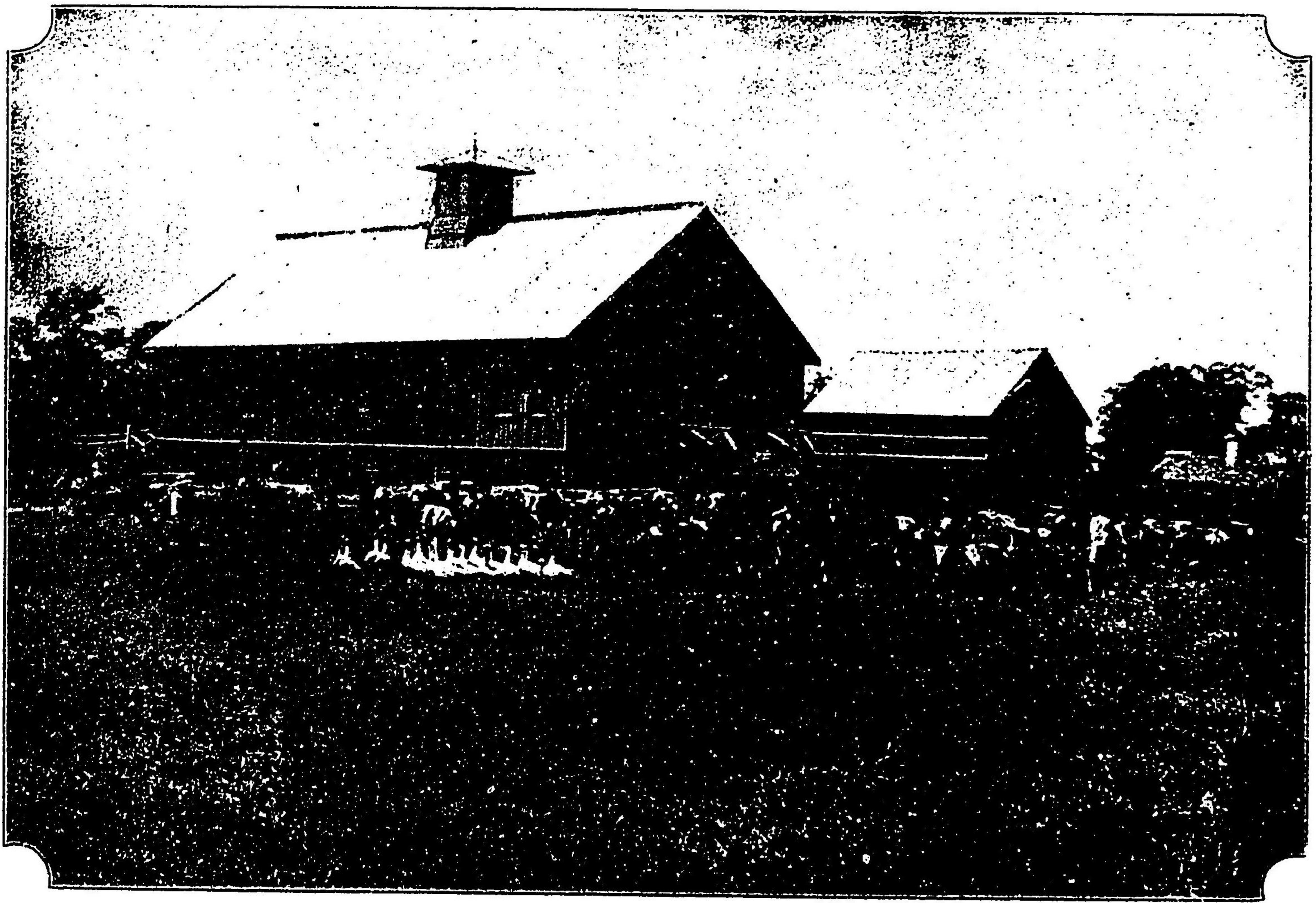
堂 講 北 七 及 堂 講 央 中





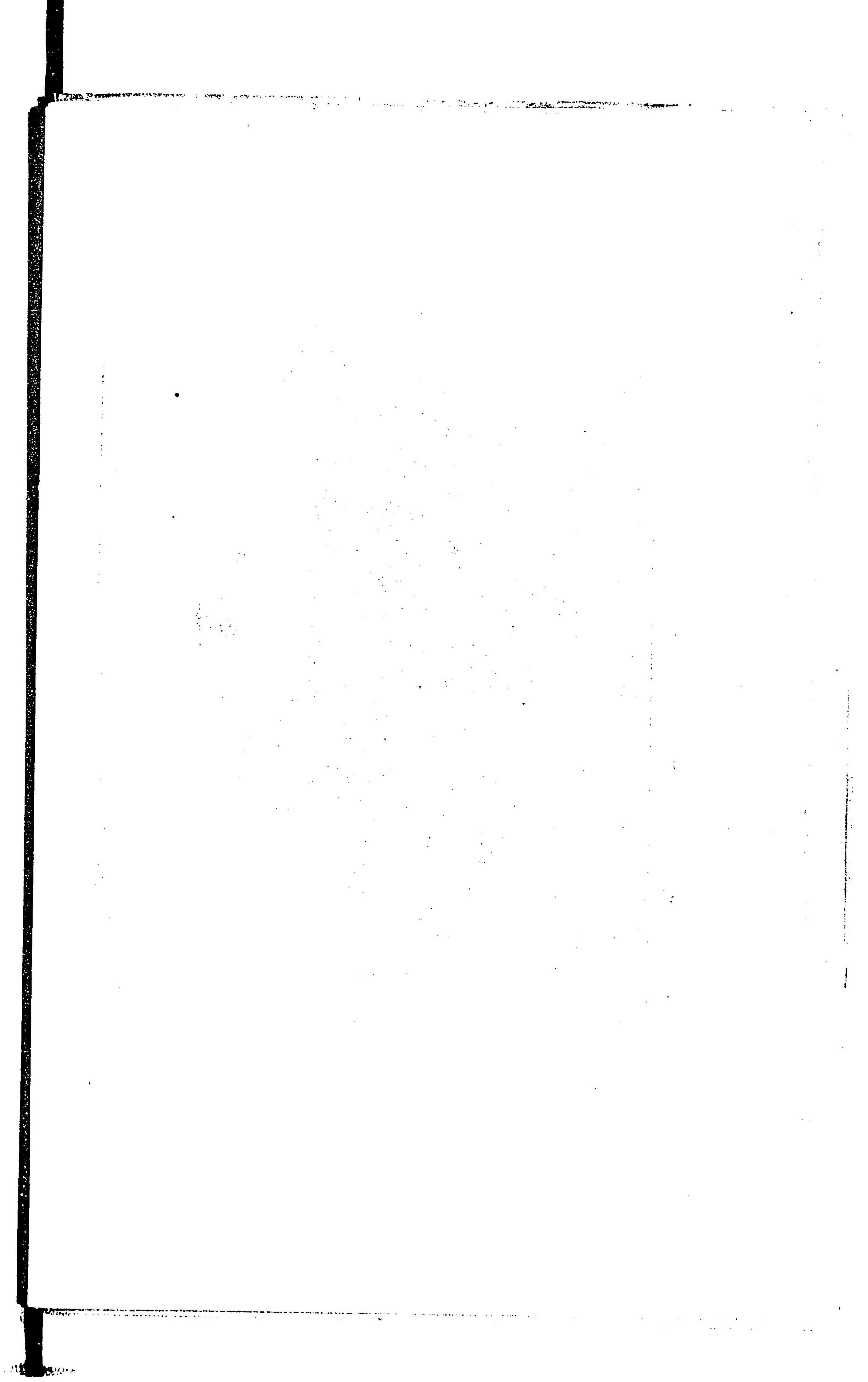
第一農場事務所





家 畜 房







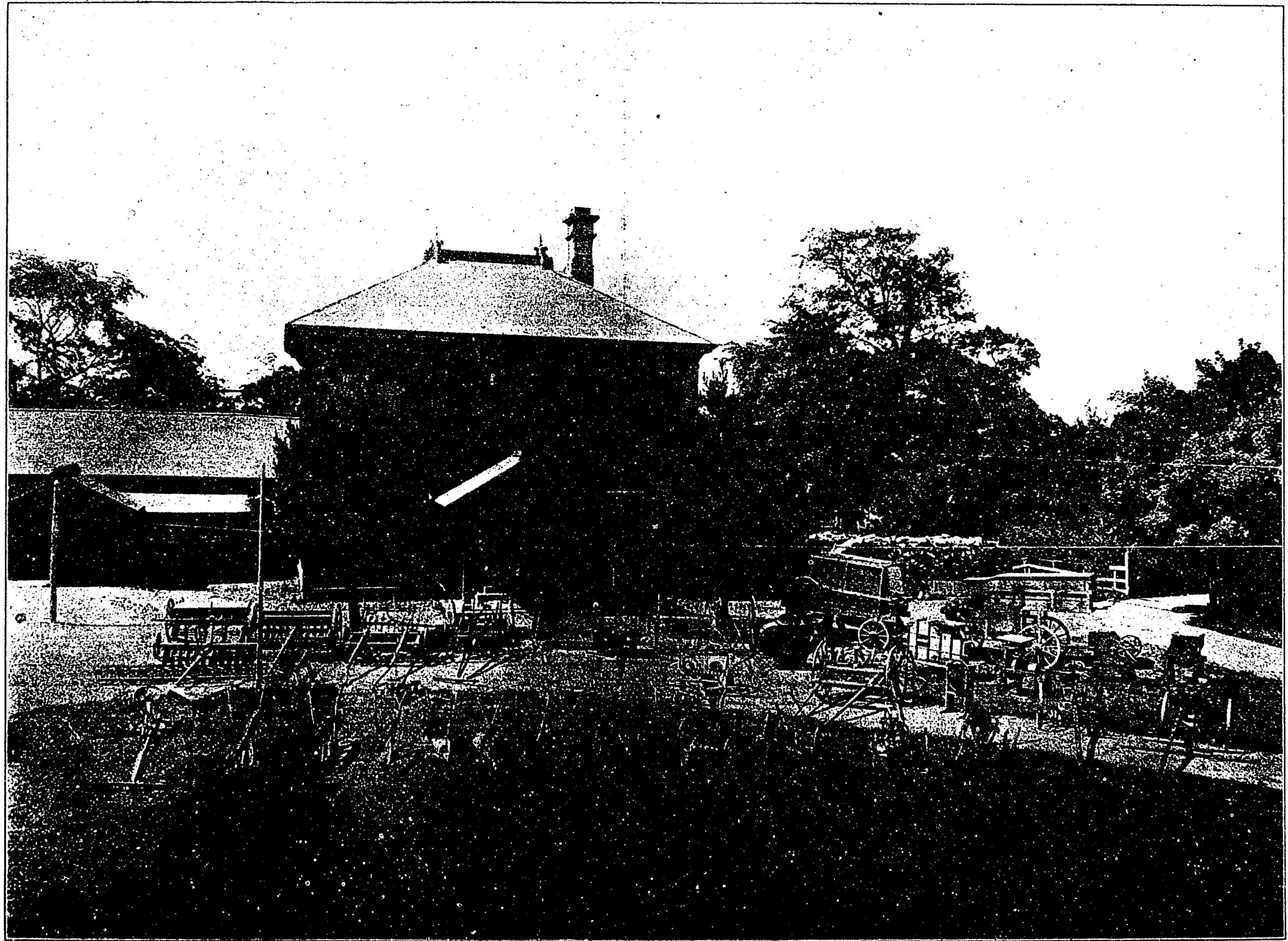
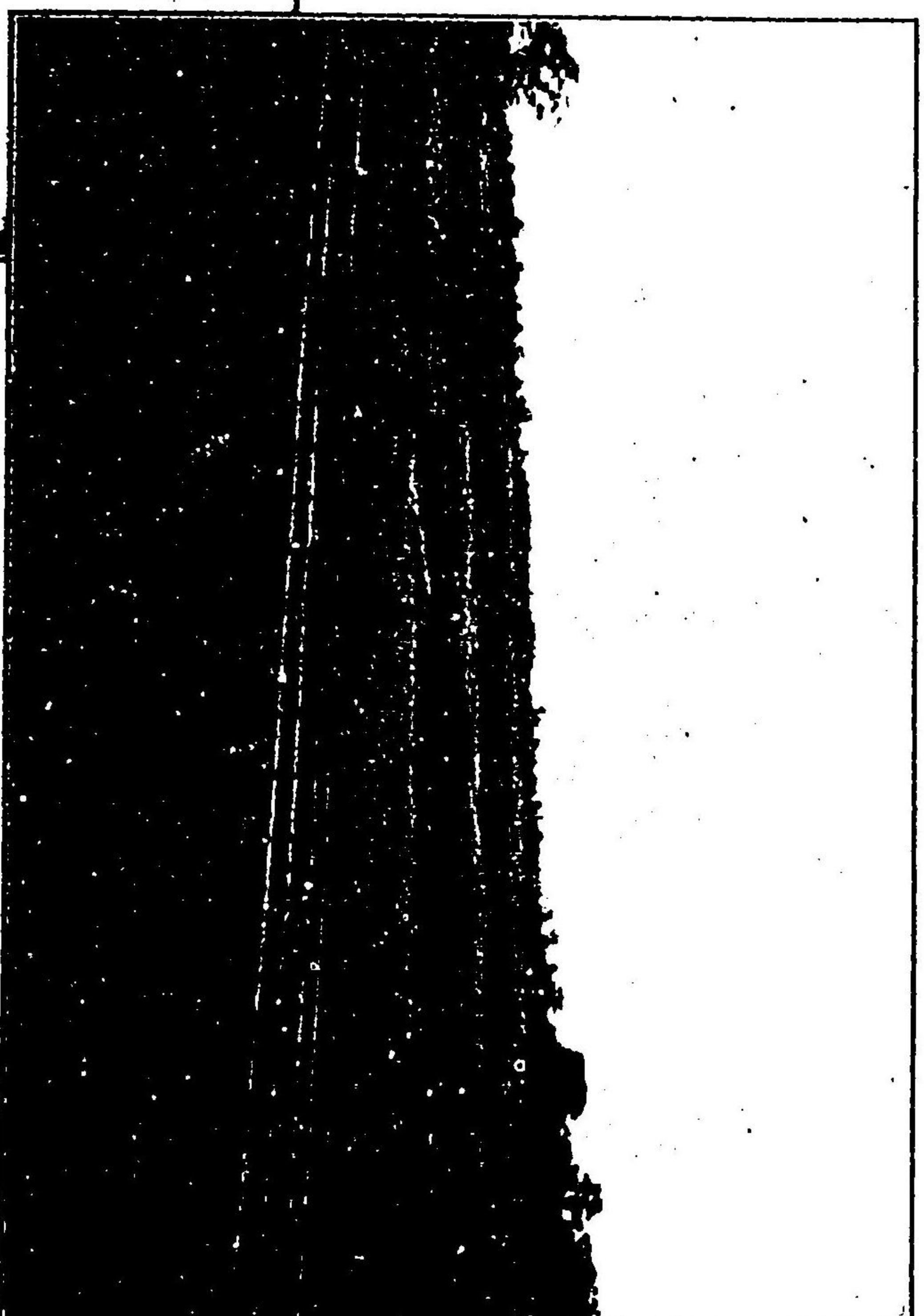
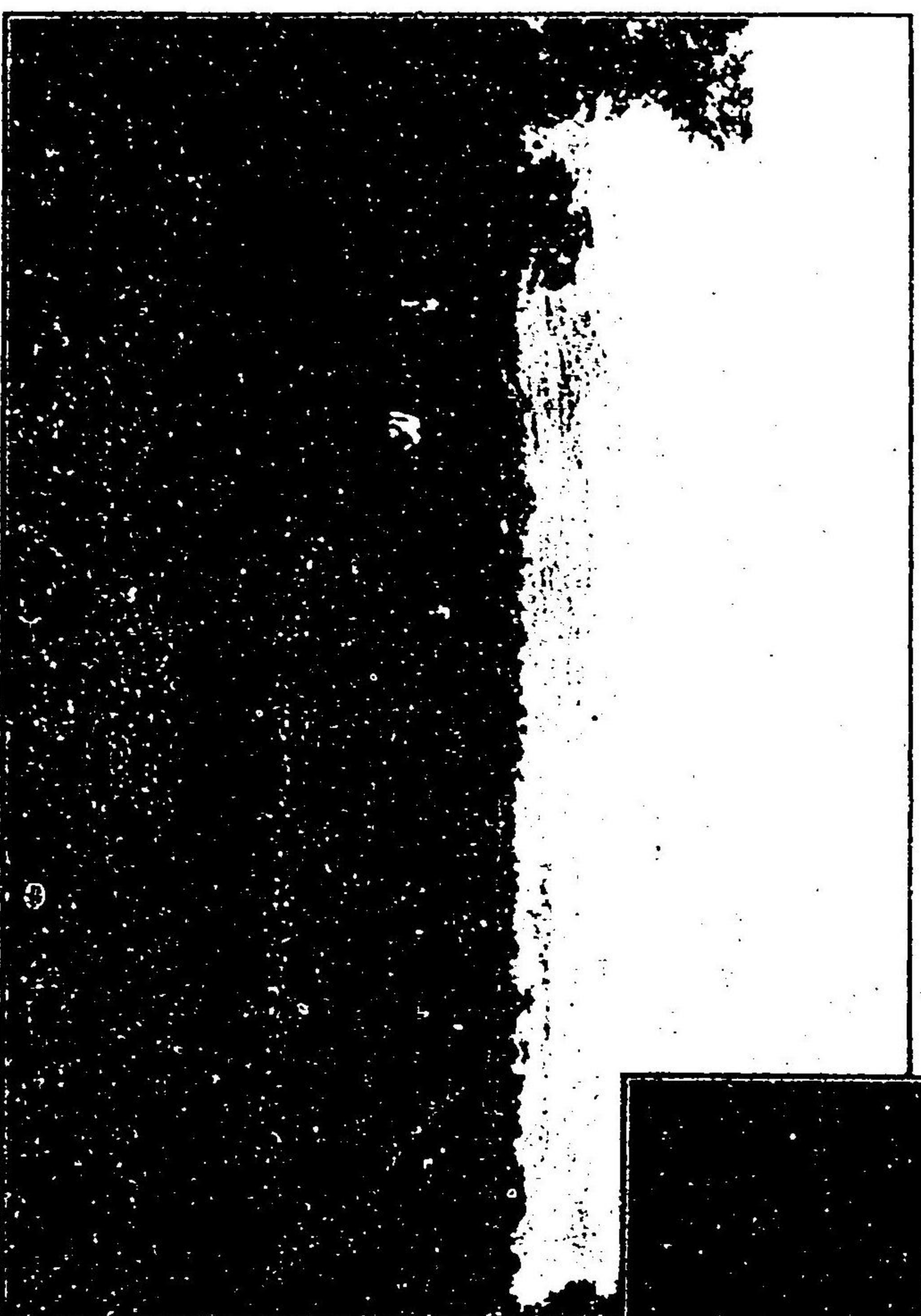


圖 具 農 七 及 部 本 農 場 農 一 第





(一其) 地 作 試



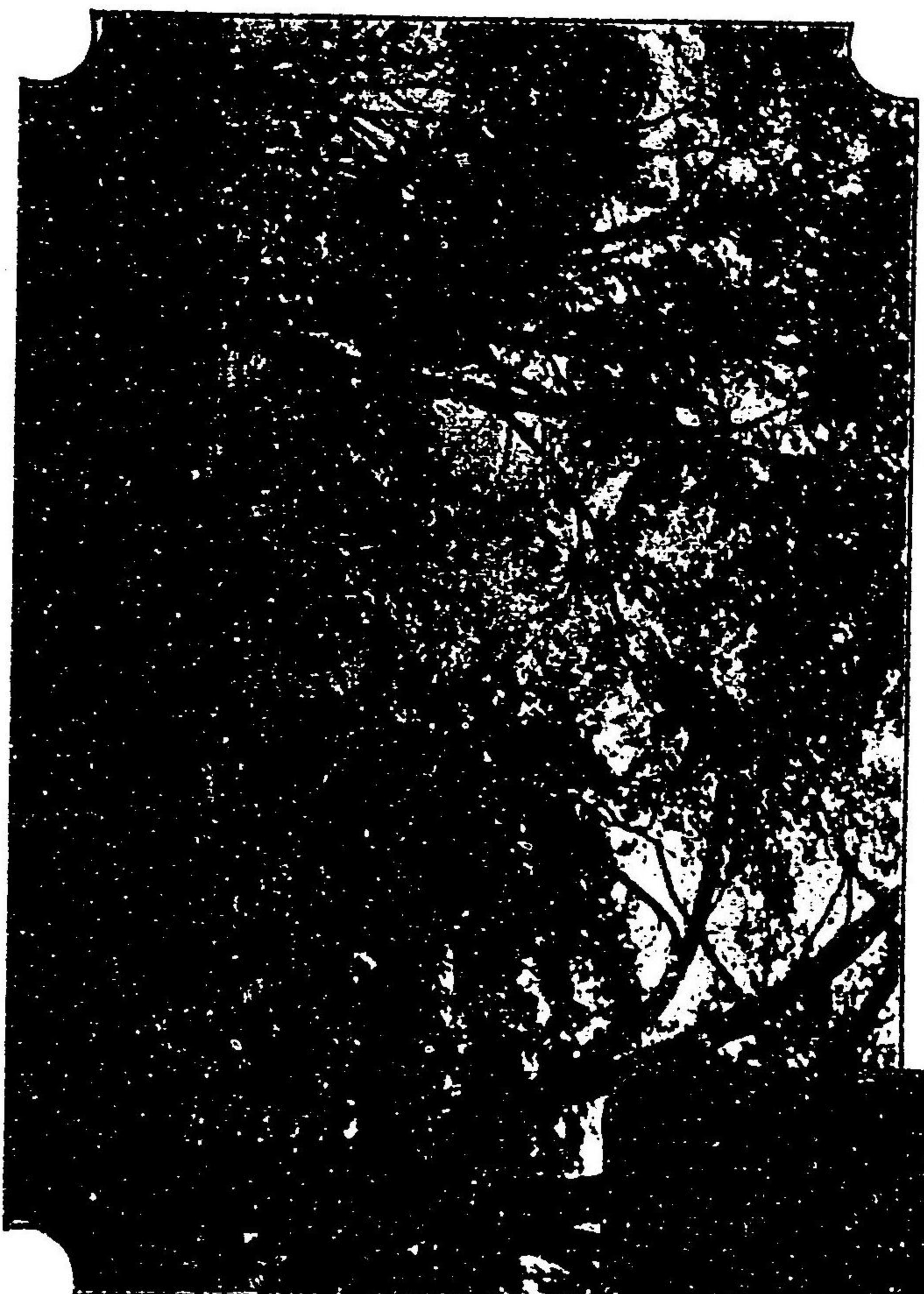
(二其) 地 作 試



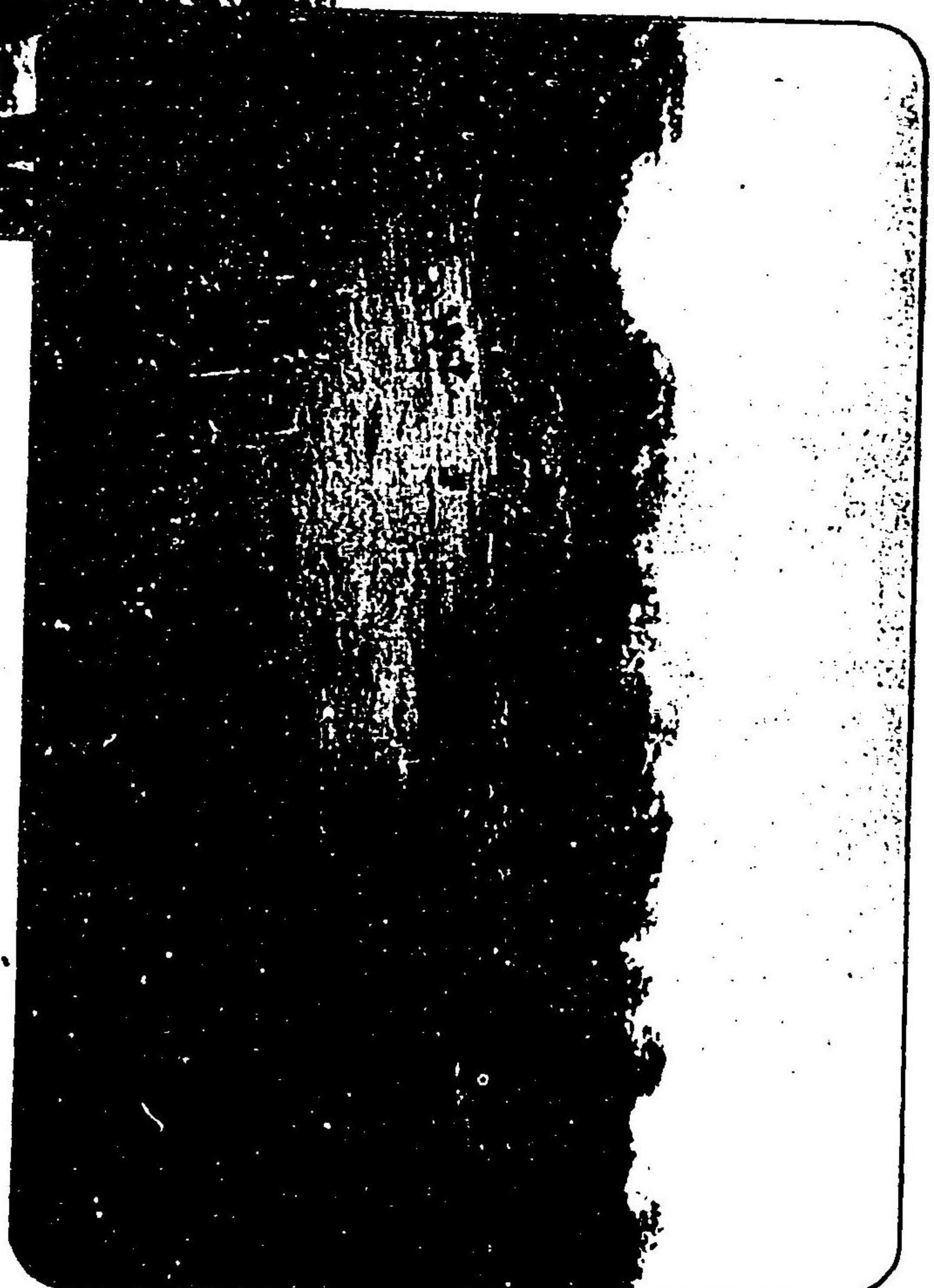


地 田 水 橋 農 一 第





地 牧 放



■ 樹 果



獲 取 草 牧





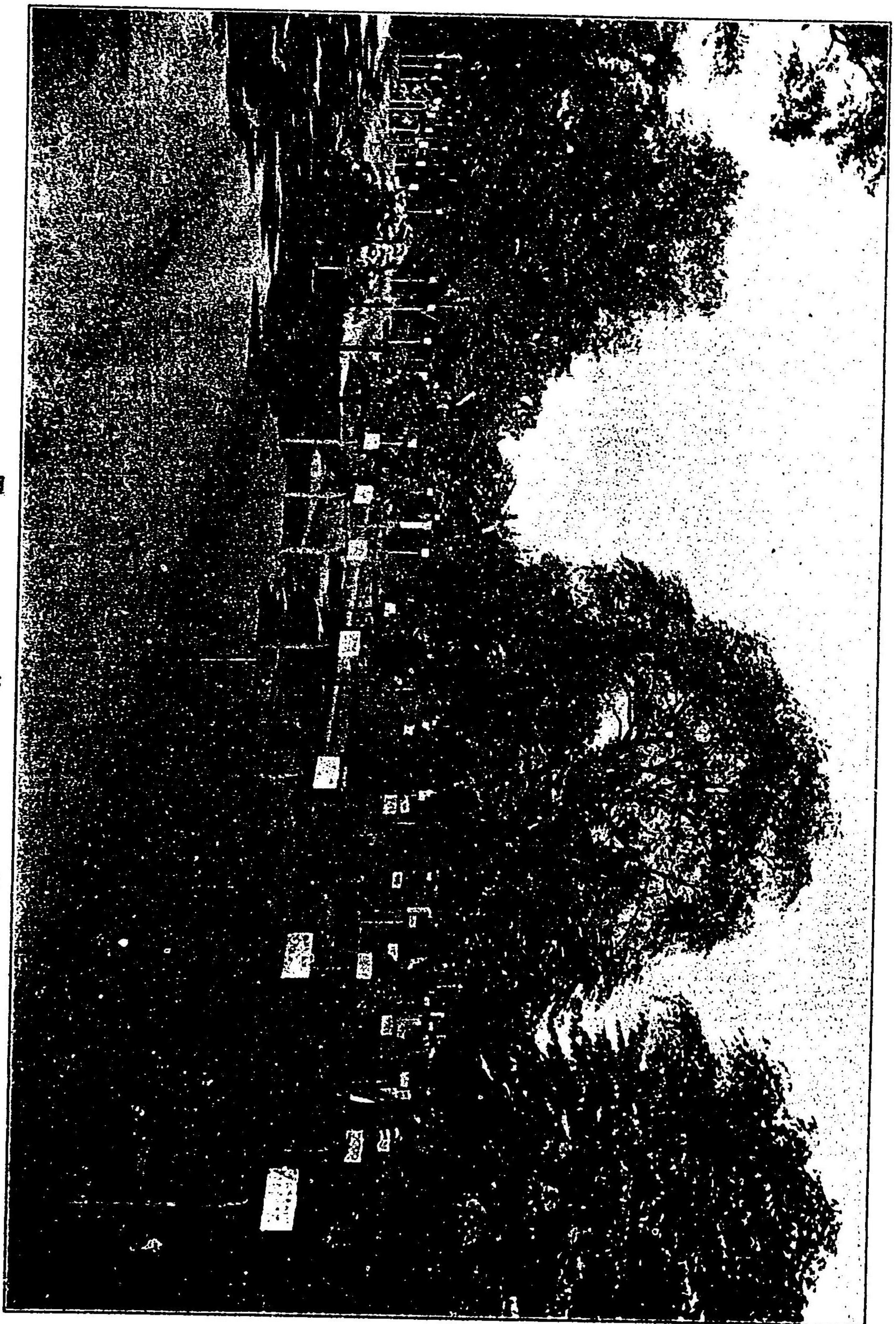
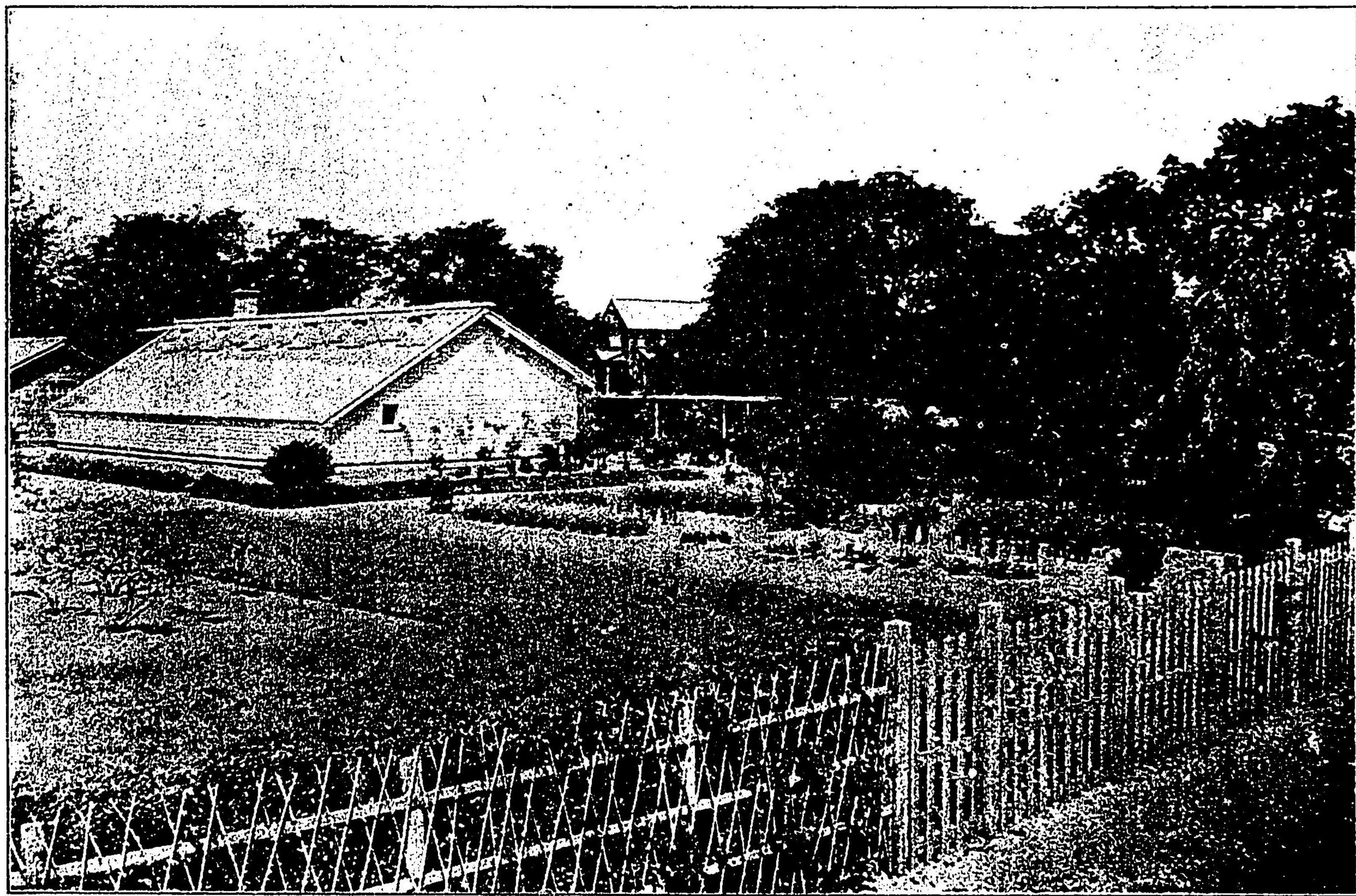


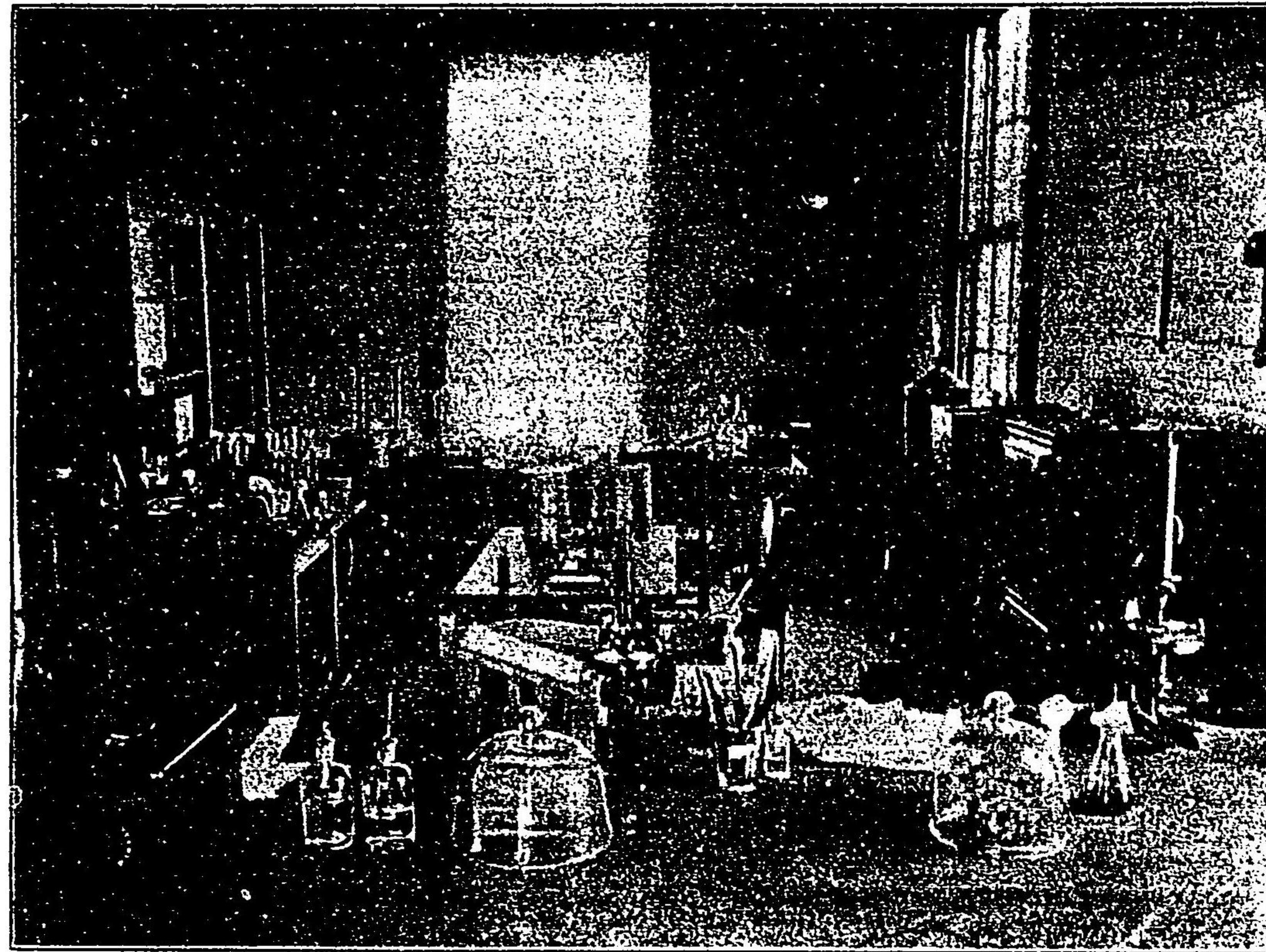
圖 物 植





室 温 園 物 植





室 驗 實 學 理 病 物 植



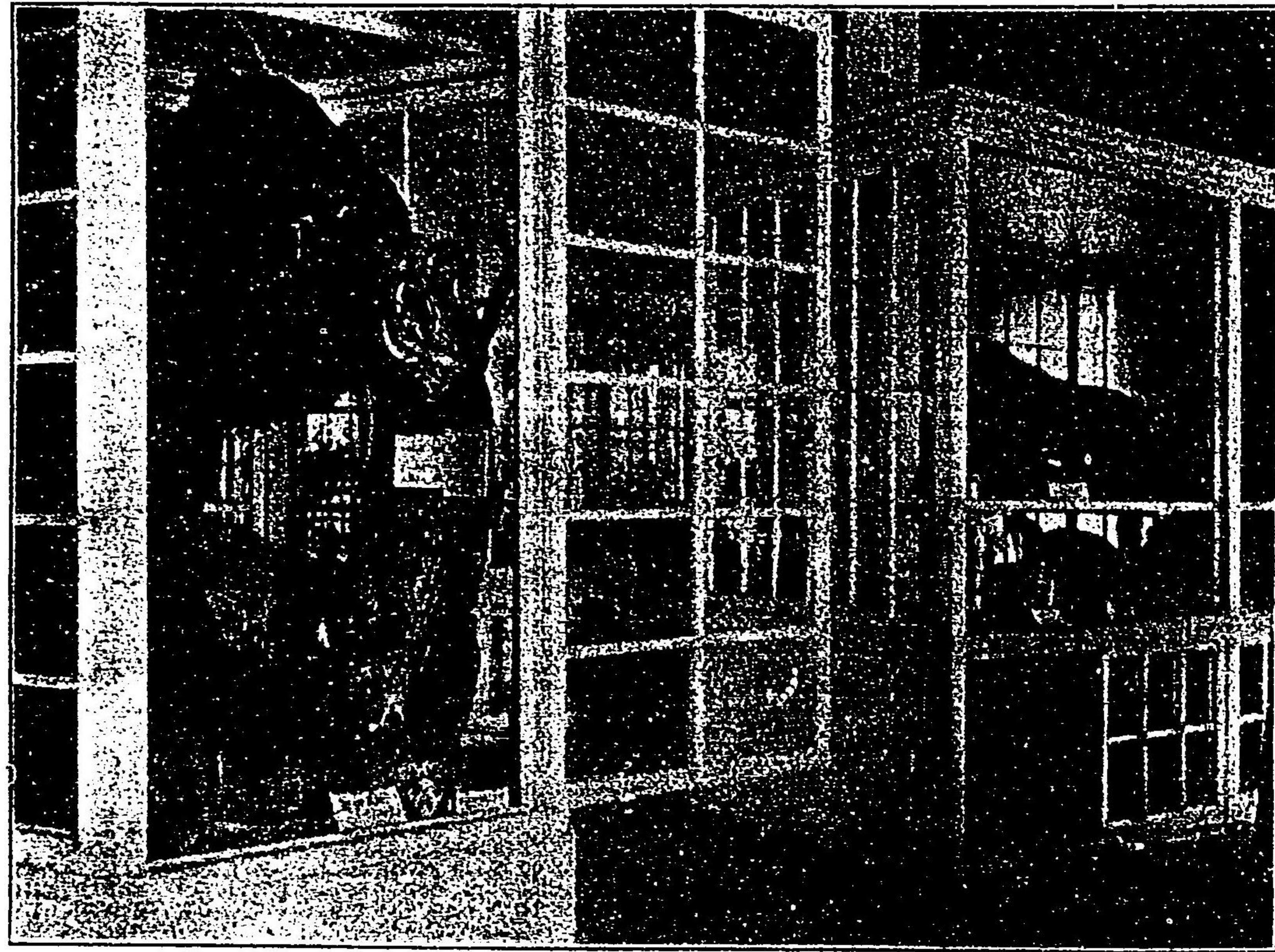
室 驗 實 學 化 醫 農



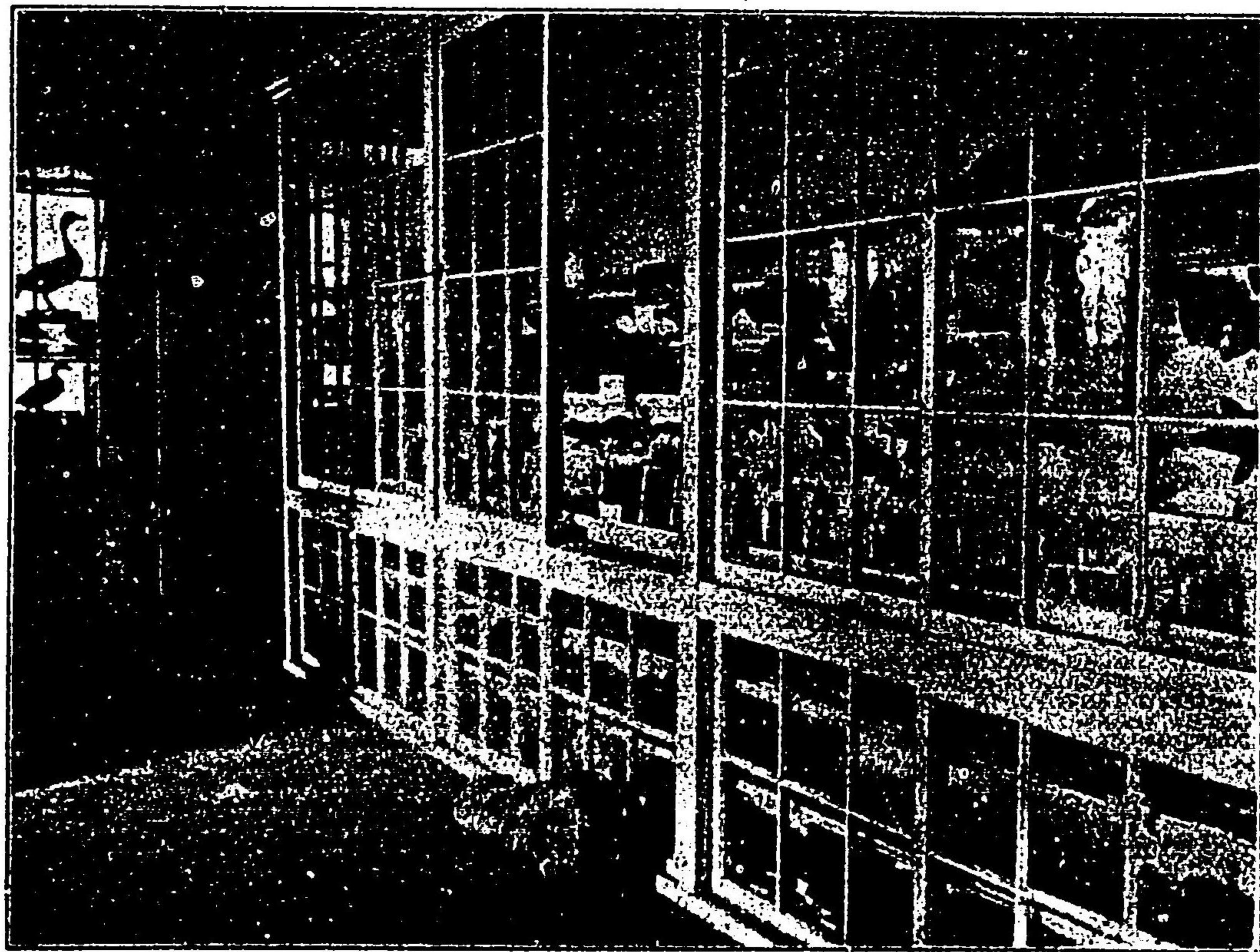


館 物 博



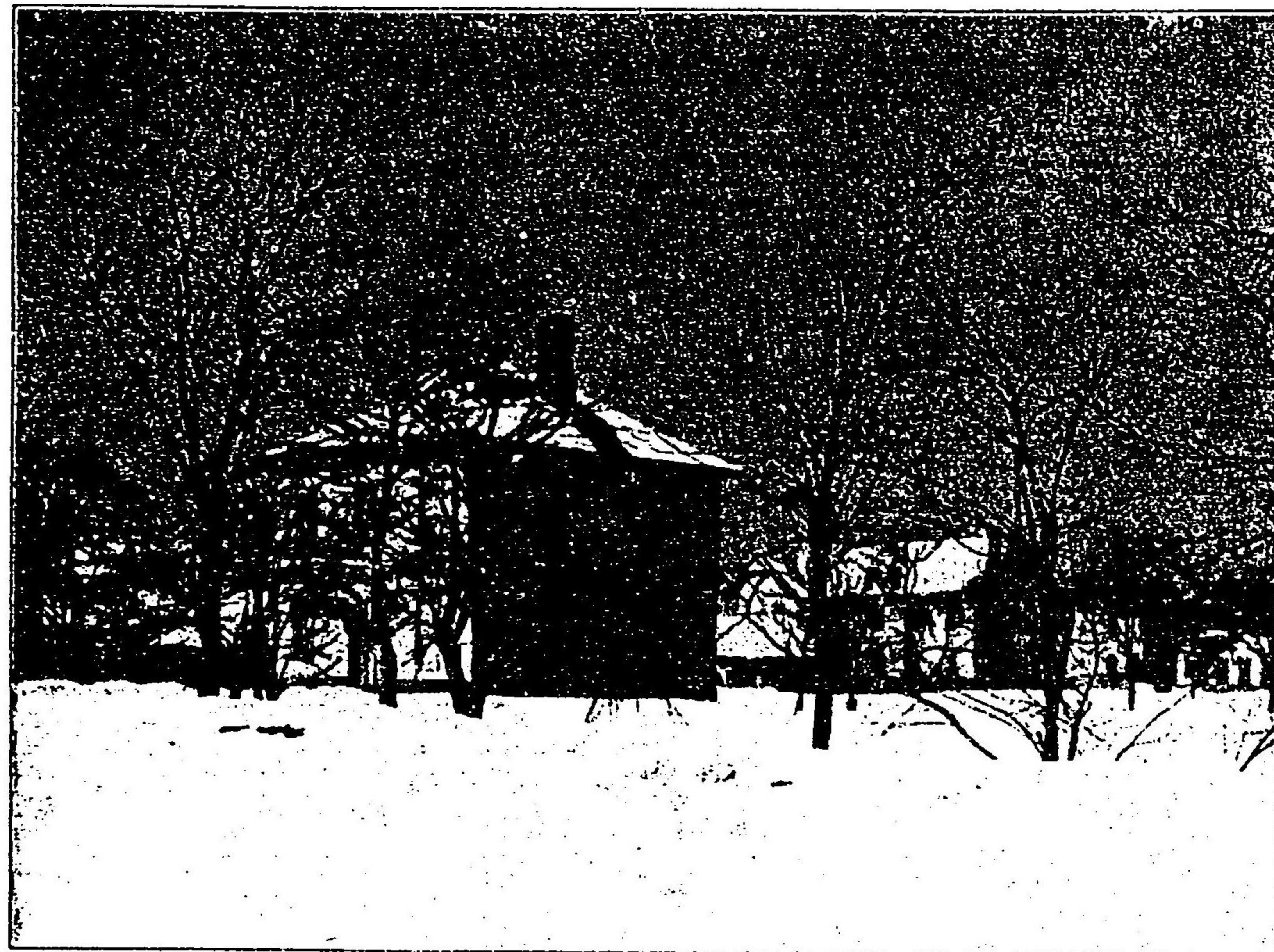


(一其) 部 内 箱 物 博



(二其) 部 内 箱 物 博



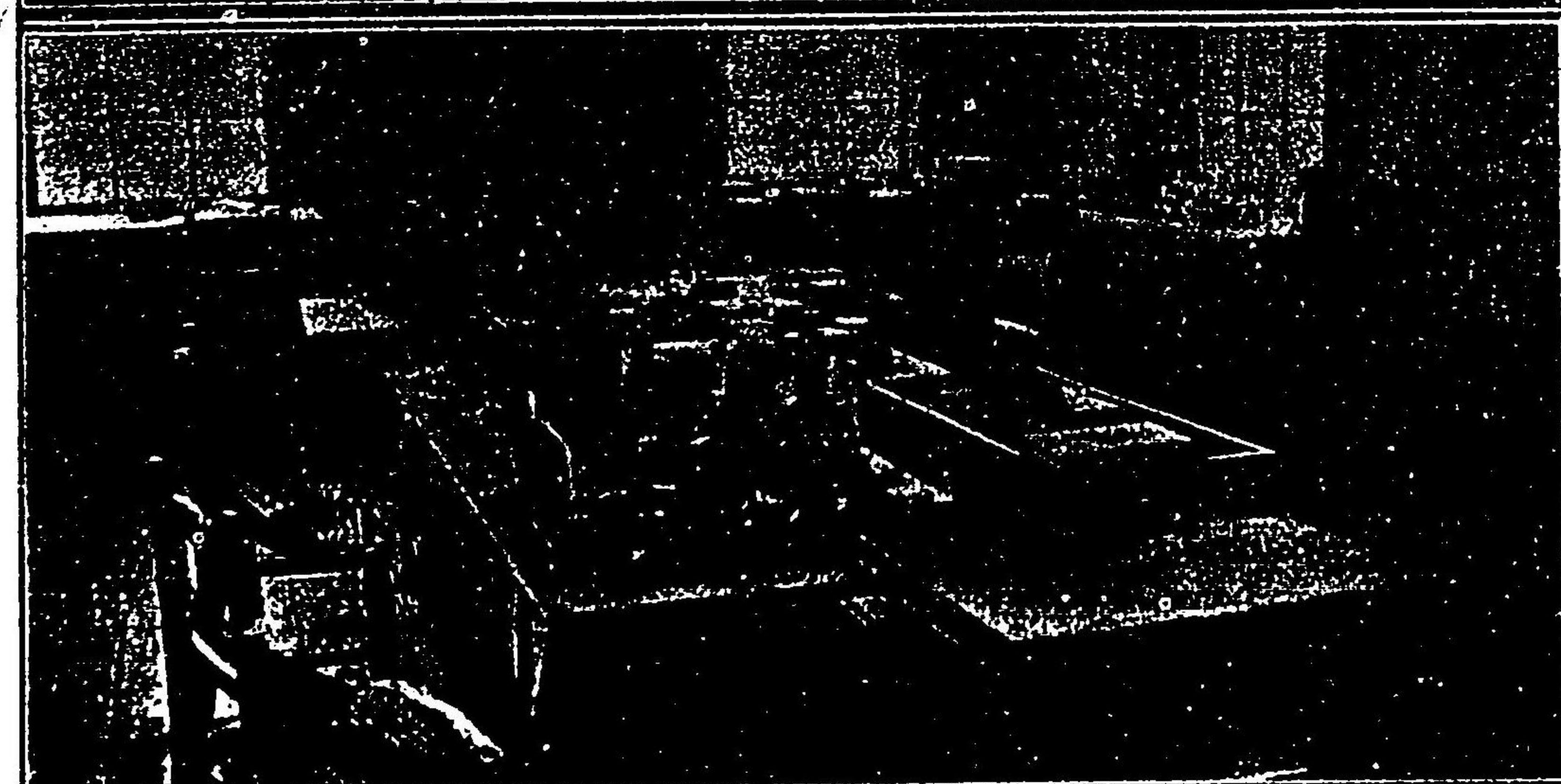
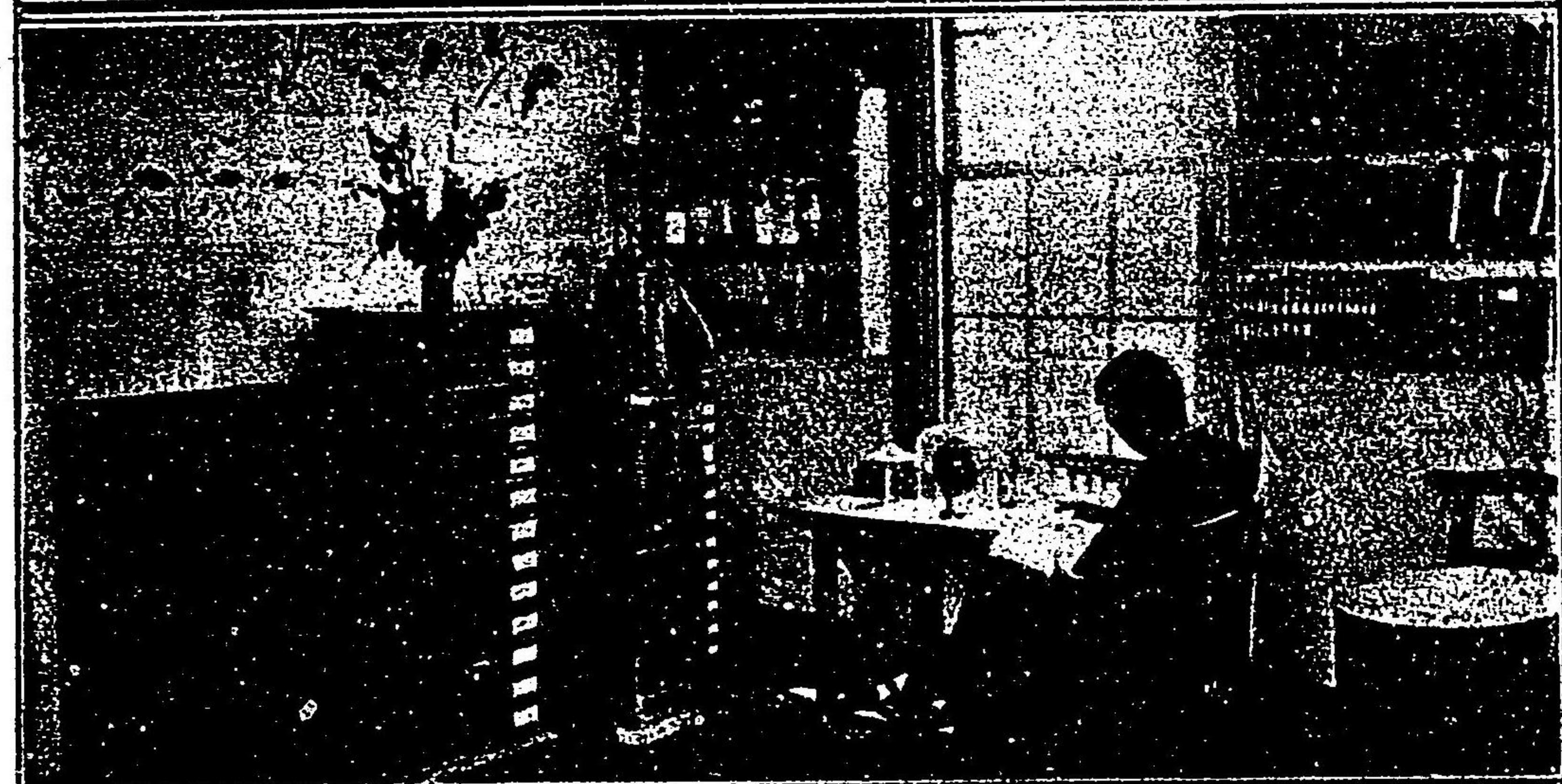
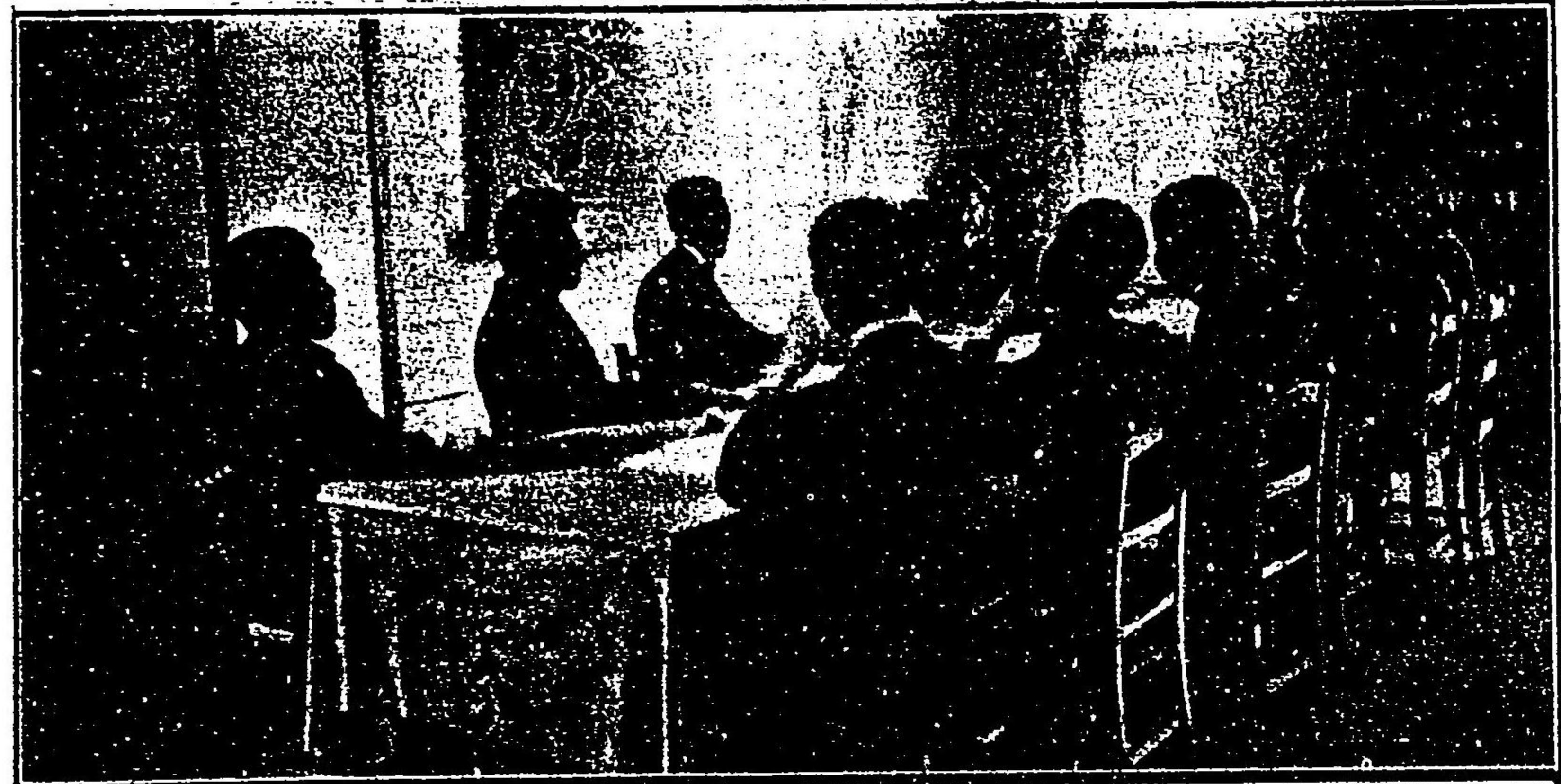


化學講堂



學生宿舍





室習實學濟經業農七及政農(上)  
室驗實學物動(下) 室驗實學蟲昆(中)

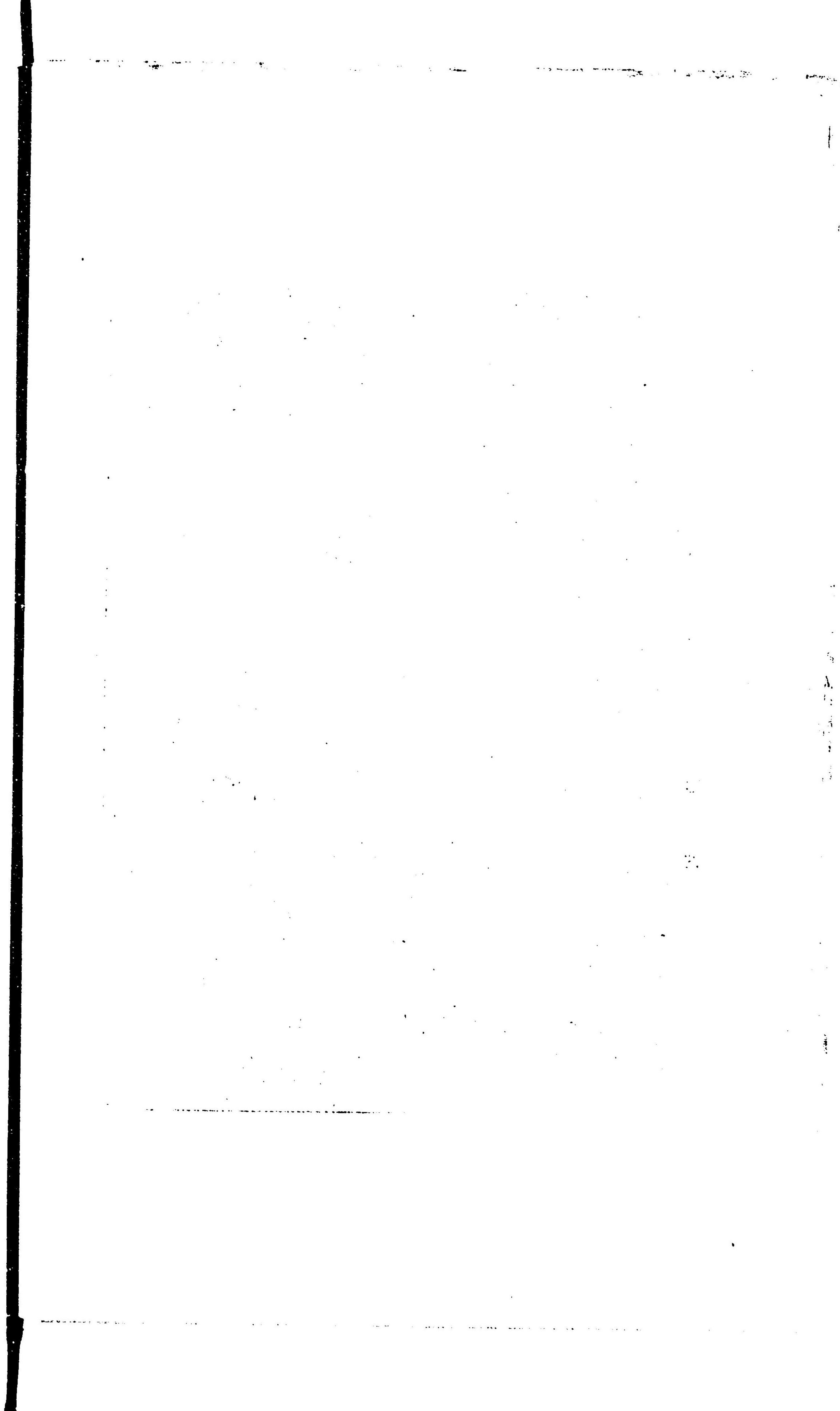
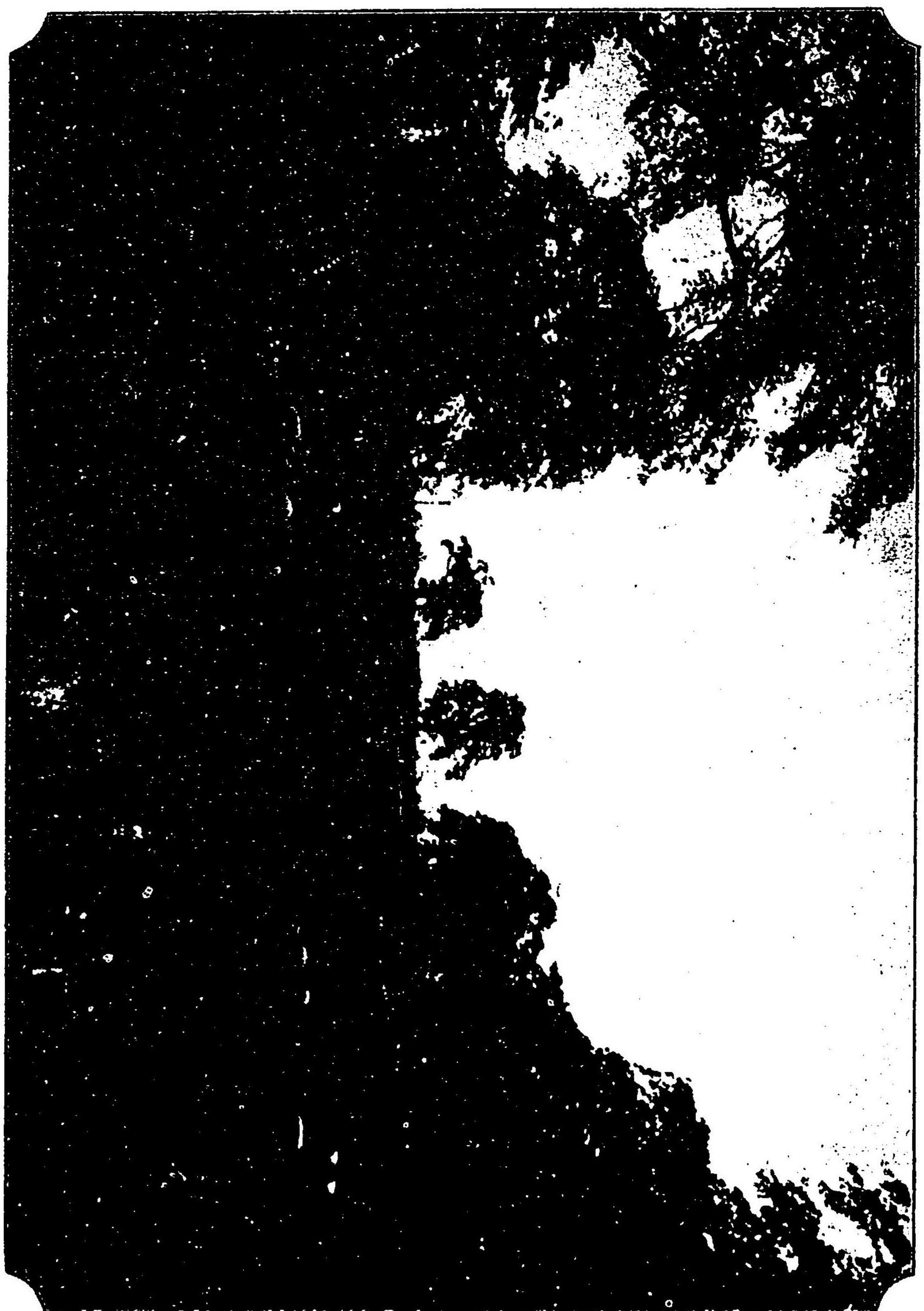


遊 戲 會 閉 場

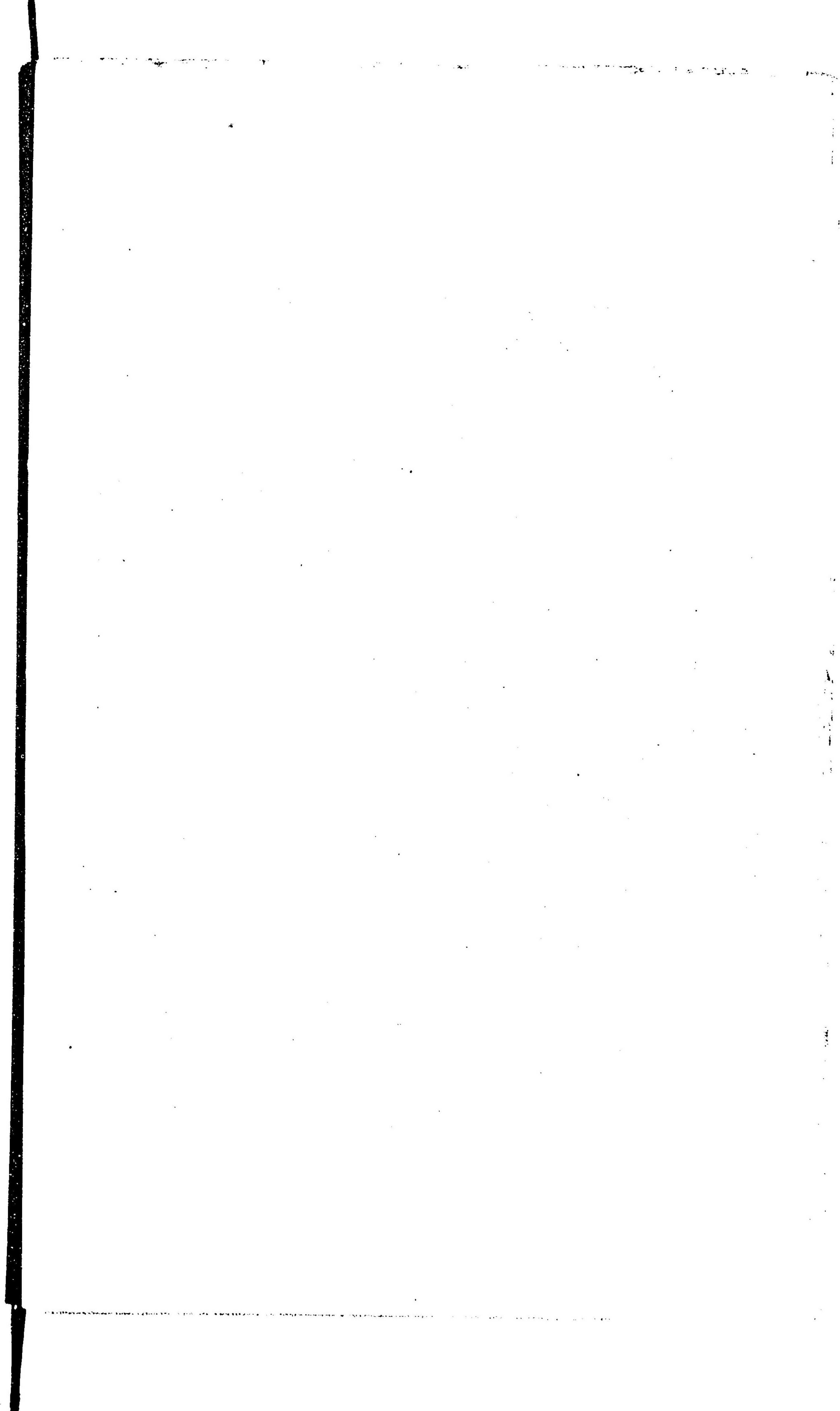




新 築 校 舍 歌 地









農業  
經濟  
及  
農  
政  
學  
教  
室

大講堂

動物植物  
教學室

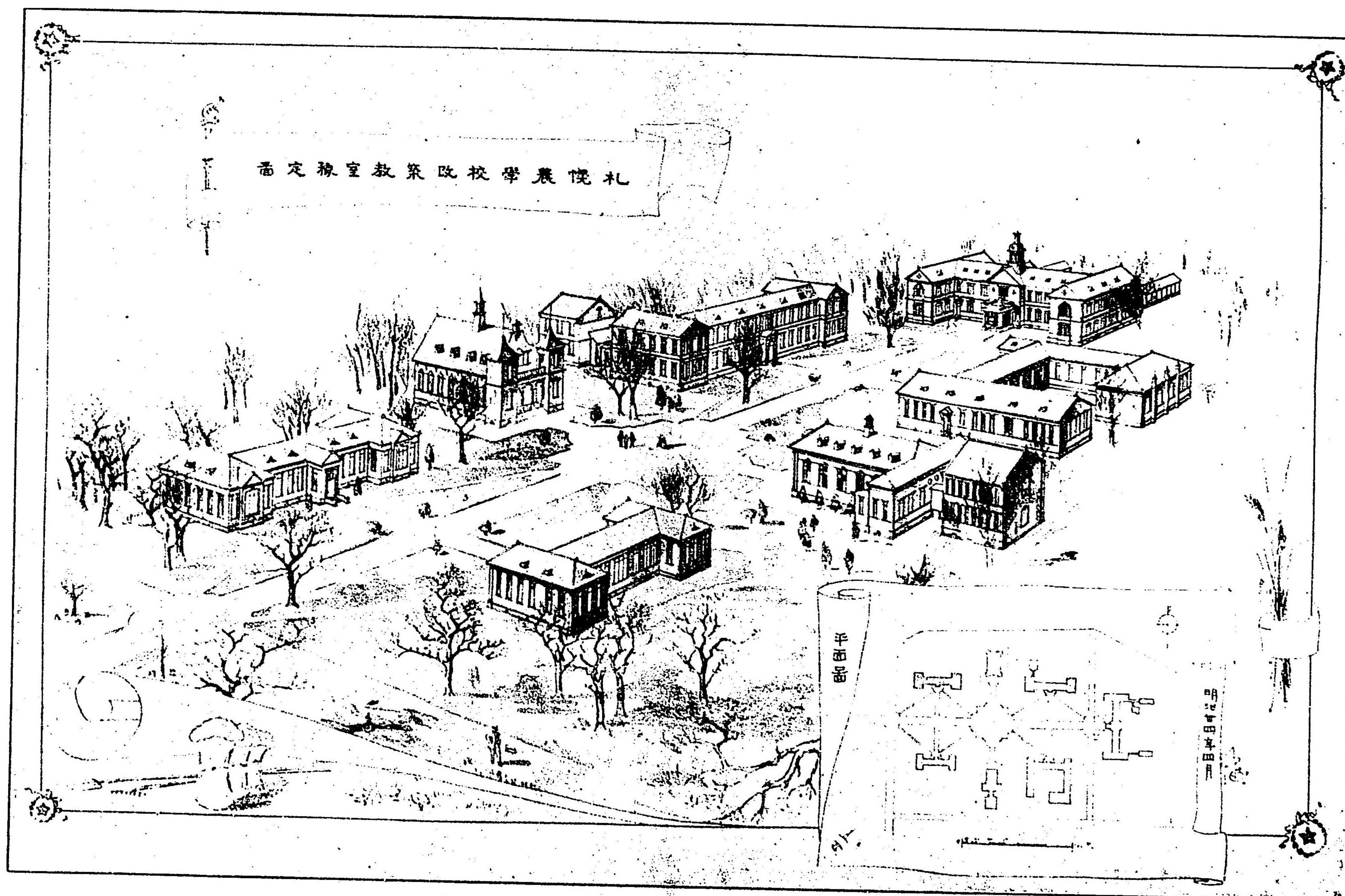
昆  
蟲  
及  
養  
蠶  
學  
教  
室

農  
學  
教  
室

農  
藝  
化  
學  
教  
室

圖  
書  
館

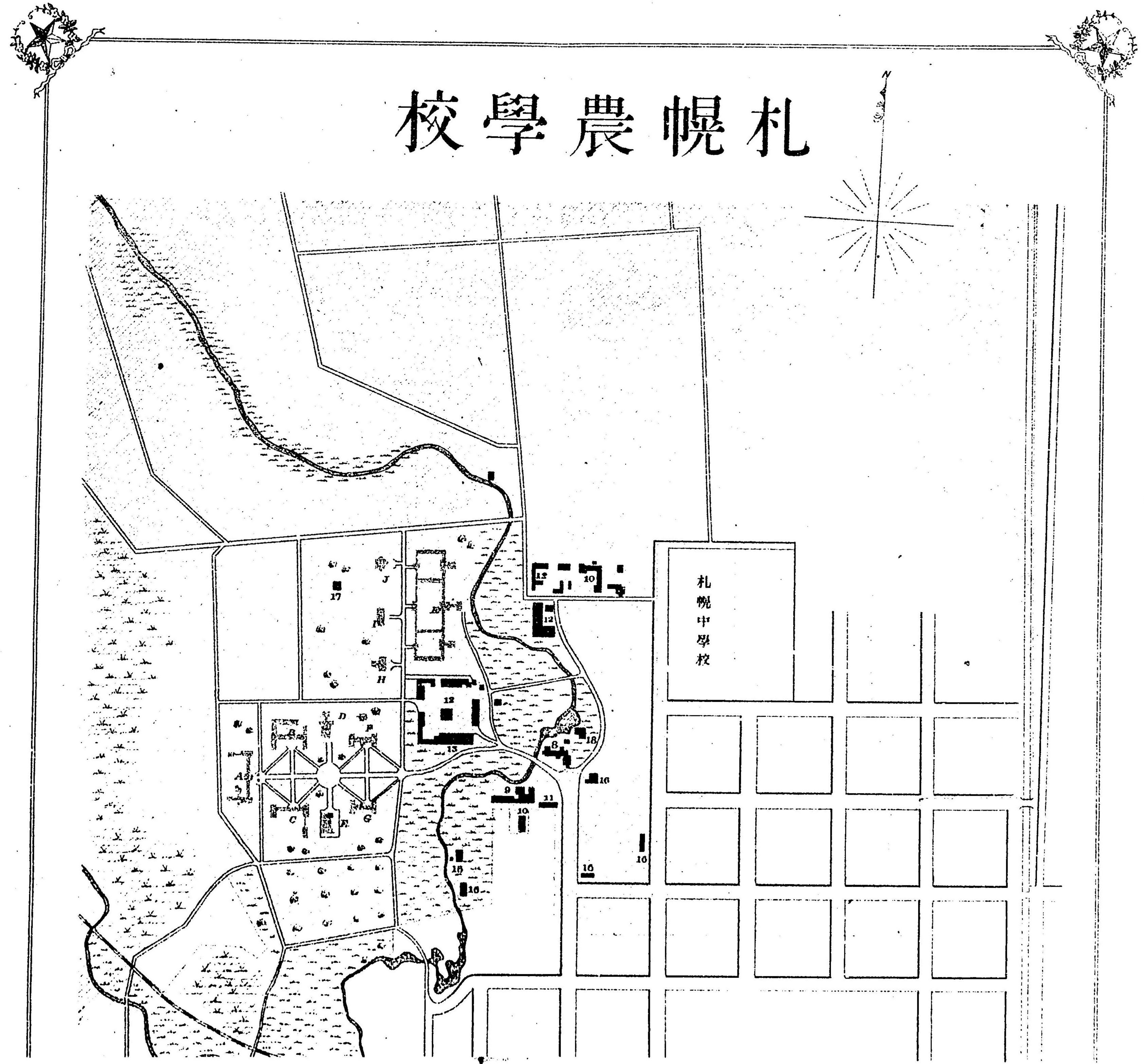




新築教室室樣定圖



# 札幌農學校

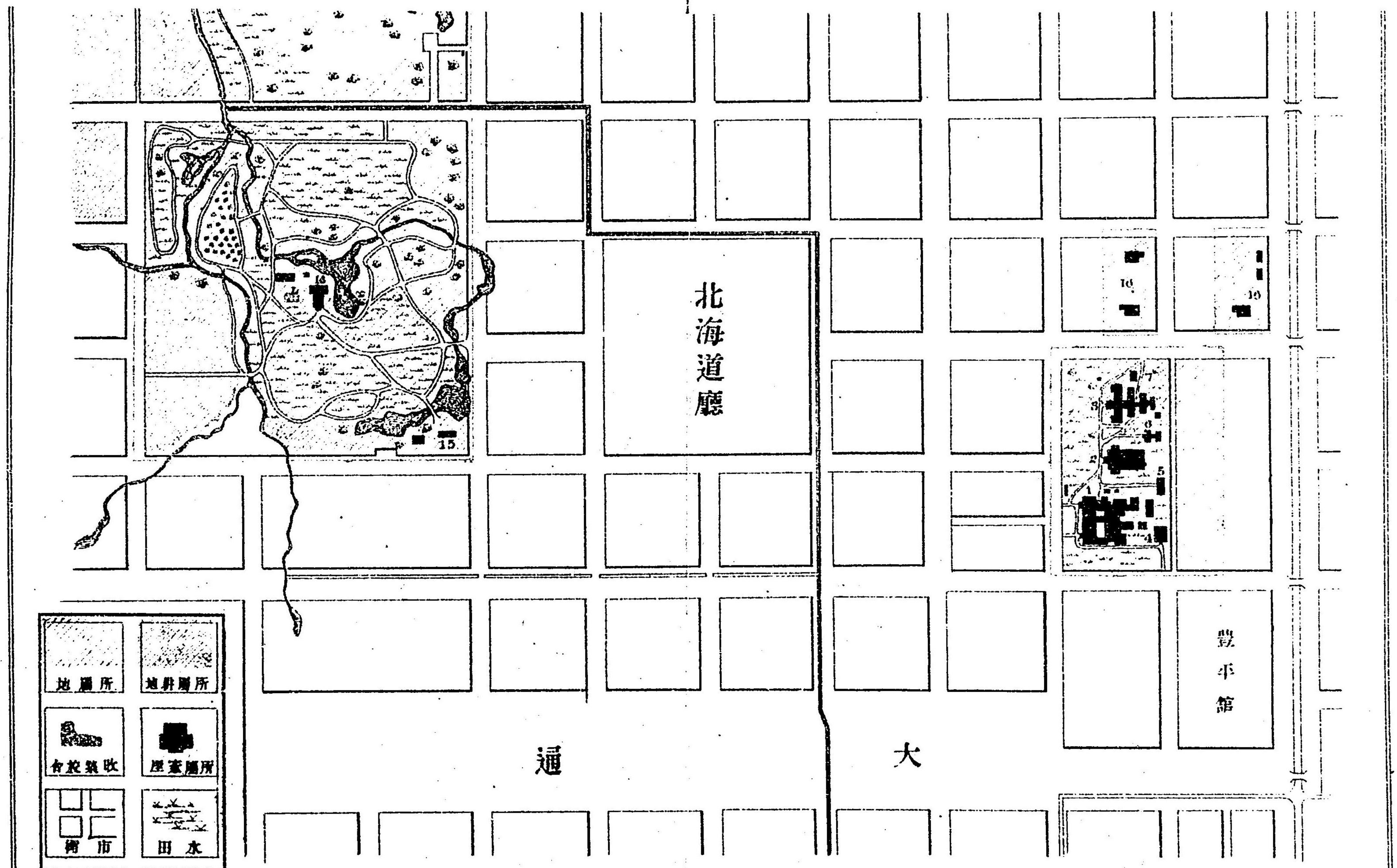




欠

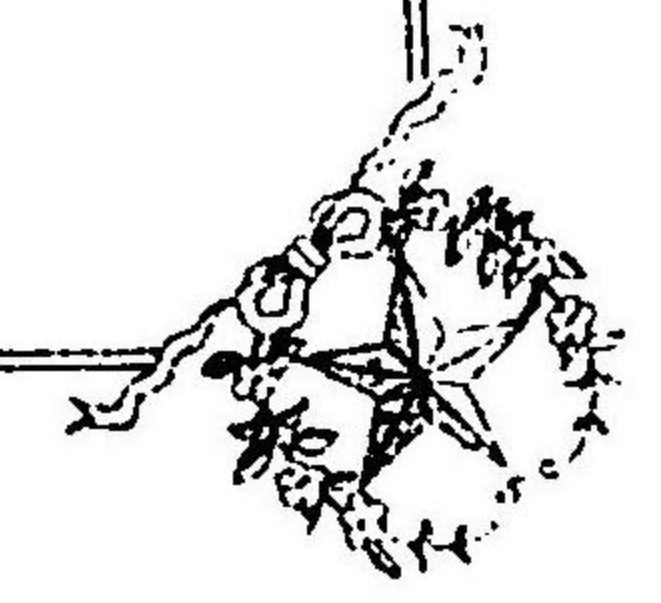
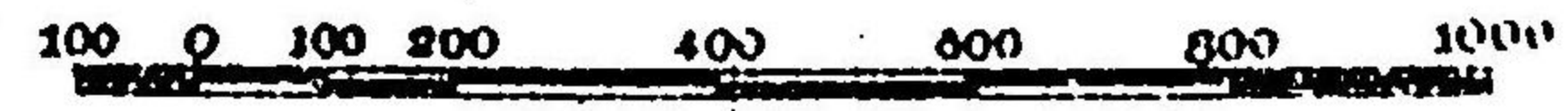
MISSING



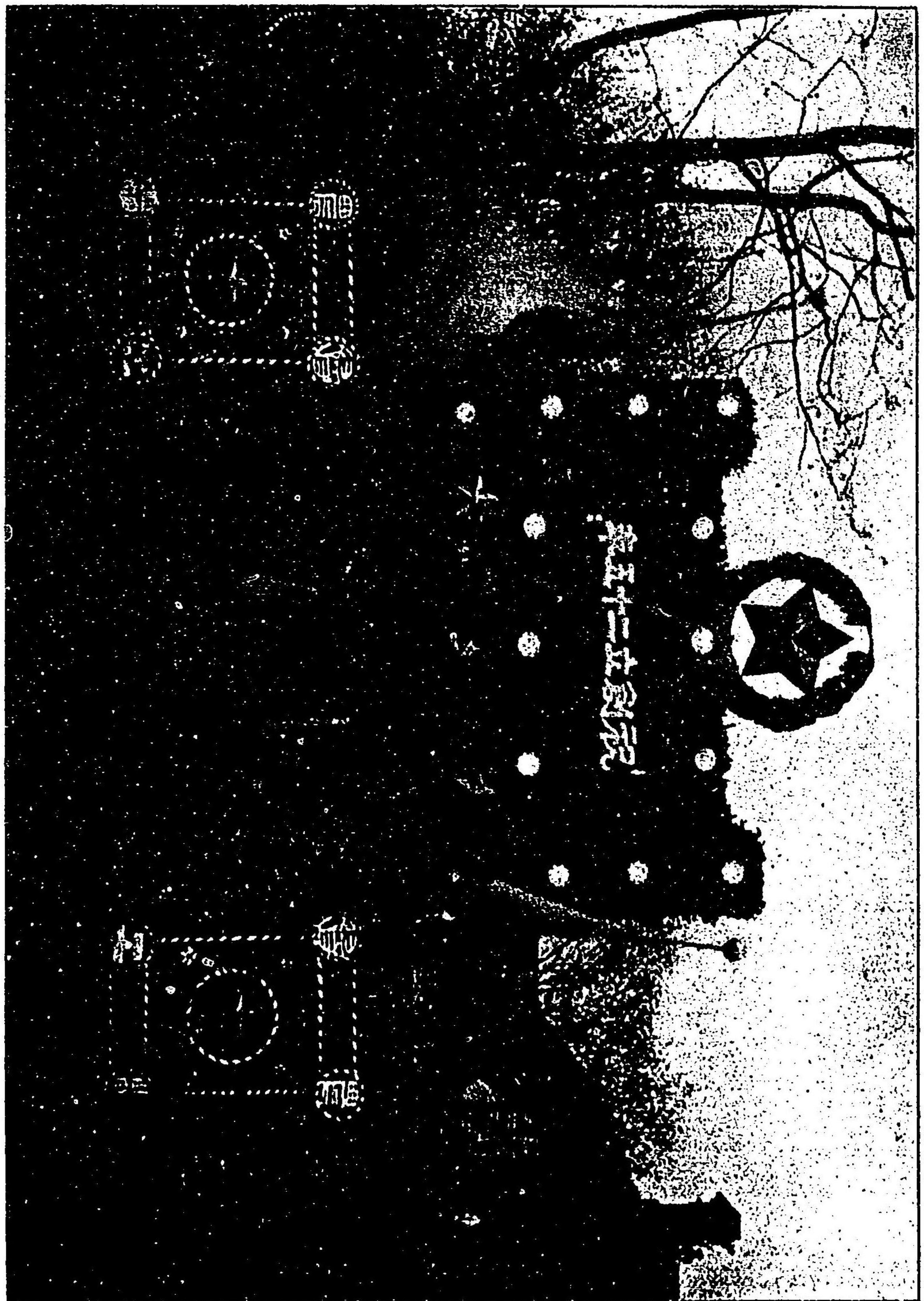


地 屋 所	地 野 所
倉 貯 集 取	煙 臺 集 所
市 場	田 水
河 川 及 路 道	水 草

一 之 分 千 六 尺 縮

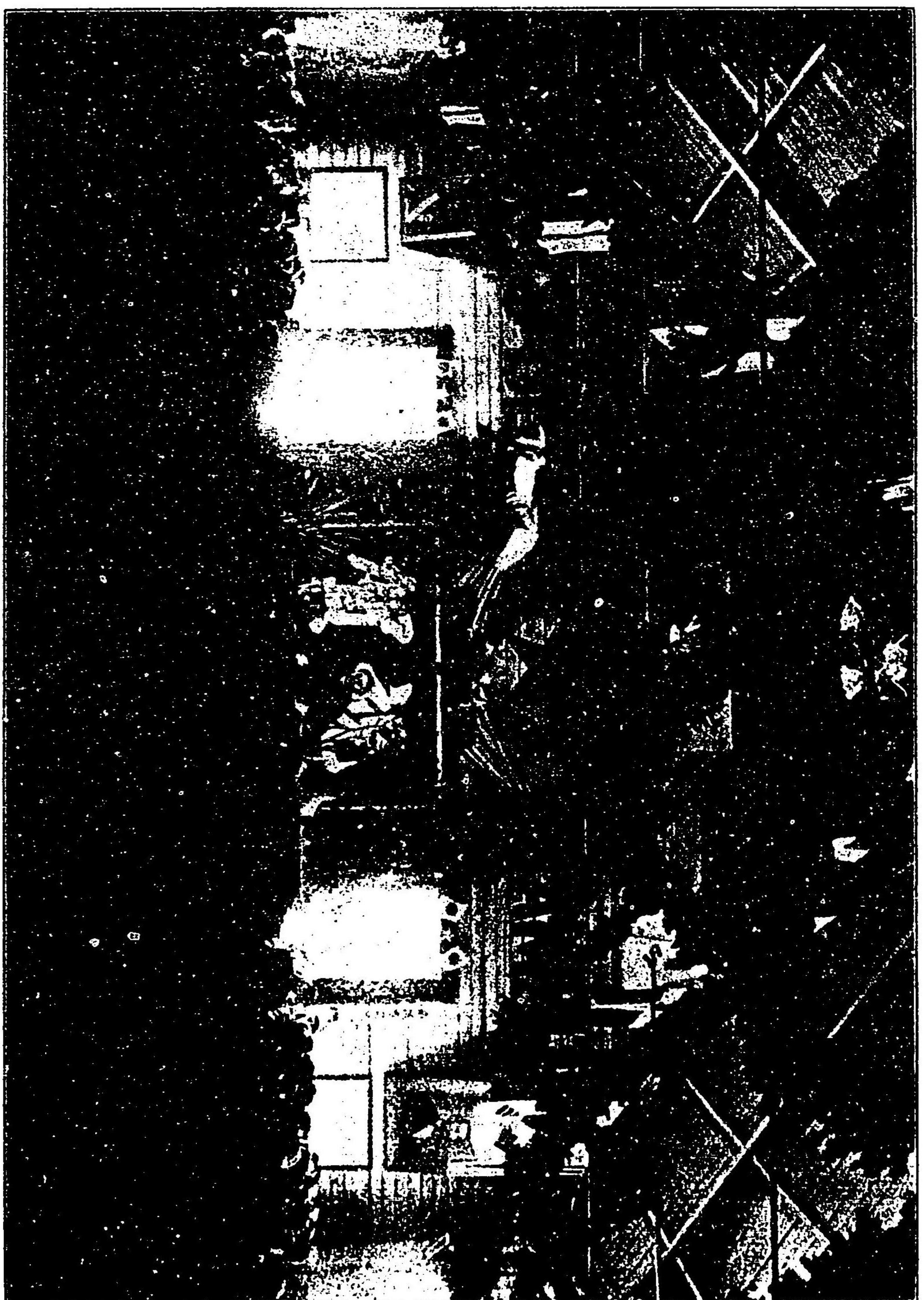






第五十二號聖誕樹





二 十 五 年 觀 覽 會 式 場





札幌農學校 目次

第一章 札幌と學問

第一節	緒論……………	一頁
第二節	札幌の氣候と學問……………	四
第三節	札幌の風物と學問……………	八
第四節	札幌の人士と學問……………	三
第五節	結論……………	六

第二章 札幌農學校の過去

第一節	明治維新と北海道の開拓……………	一〇
第二節	札幌農學校の萌芽時代……………	三
第三節	札幌農學校の成立……………	六
第四節	札幌農學校教養の方針……………	六
第五節	札幌農學校職員の變動……………	三
第六節	札幌農學校過去時代の學課……………	六
第七節	札幌農學校過去時代の學生と其學風……………	五
第八節	札幌農學校各科の小歴史……………	五

目次



第九節 札幌農學校創立廿五年紀念祝賀會……………五七

第三章 札幌農學校の現今……………

第一節 校則(摘要)……………六六

第二節 商議委員職員及學生生徒……………六八

第三節 校堂……………六九

第四節 學生と四季……………七〇

第五節 諸入費……………七二

第六節 本校に於ける諸會……………七三

第七節 札幌農學校々有財産……………七五

第四章 結 論……………

附 録

北海道帝國大學設立の必要を論ず……………一三三

札幌農學校入學志願者の榮……………一

自東京至札幌旅行案内……………二

札幌農學校目次終

三增  
版補  
札幌農學校

札幌農學校學藝會編纂

第一章 札幌と學問

第一節 緒 論

自然と人間との關係は保姆と嬰孩との關係なり、嬰孩や素と安危を辨識せず、成敗を考察せず、手の動く所即ち捉へ足の動く所即ち進むのみ、唯保姆あり之を養ふと厚く、之を育すると懇にして始めて能く桃の天々たるを見るなり、蓋し人の自然に待つ、自然の人に與ふるある、洵に此の如きのみ。

人や營々として走り、孜々として勉む、而かも四時の變景象の異、是れ彼等が見て而して視ると能はざるものなり、彼等の之を見る、唯無意義の實在として見るのみ、其實在する所以の意義に至つては、邈焉として關はるべからざるなり、彼等は太陽を見るなり、然れども太陽を視ると能はざるなり、彼等は地體を見るなり、然れども地



球を視ると能はざるなり、其見る所は即ち形體のみ、其視ざる所は即ち生命なり、然り人や多くのプロバヒリチーに於て自然の盲觀者なり、即ち自然の盲觀者なりと雖ども、而かも自然は能く之が爲めに其力を賦するに躊躇せざるなり、自然は力に富めり、靈偉なる能力の源泉なり、其力や其極を盡すべからずして其源泉や竟に涸竭する能はざるなり、此至妙なる力の下に在て、彼等は能く生存し能く發達するなり、余輩乃ち以爲らく、保姆と自然と其洪偉にして而かも覺られざるの力を及ぼし、之をして能く闇冥を破つて光明を見せしむるに於て、同一轍なりと。

然りと雖ども、保姆と自然と其嬰孩の爲めに與へ、人間の爲めに施すときに於て、常に必ずしも同一様なりとすべきに非ざるなり、保姆は必ずしも天來の愛を以て、其兒に對すべきを期すべからずして、往々にして陰險邪疾、反て其兒を害ふものなきを保せず、自然や又其大なる力の中常に必ずしも愛の盃を捧ぐ可きに非ず、自然は多様なり、多面なり、其人に對するの態度、元より妍醜薰蕕を一にせず、是れ古往今來異なる自然の下に異なる人間の形成を來せし所以の理にして、明々白々歴史の中にあり、然れども余輩の云ふ所は即ち自然の不知覺の力に就て云ふのみ、若し夫れ

刮眼一過、深く其深底を衝きエマソンEmersonの所謂内感と外感と相融同し、自然の人に於ける恰も其日晡の一たるに至らば、則ち既に妍と醜となきのみ、薰たると蕪たると初めより擇ぶなからんのみ。

然らば則ち自然とは何ぞ是れ豈に解し易きとならんや、之を形と云ふ既に不可なり之を理と云ふ更に不可なり、之を哲學的に考察して宇宙を分つて、自然と靈との二とする、蓋し或は可なりとせん、唯余輩は此自然なるものをして、吾人の眼球に映し來る無意義の形とするに満足する能はざるなり、然れども余輩は今自然の何似たるやを講究すべきに非ず、即ち余輩をして死せる思想家と共に吾ならぬ、總ての包圍を以て自然を説明せしめよ。

人と云ふ意義又既に汎し、道の上に立てるの人あり、智の上に立てるの人あり、學の上に立てるの人あり、技の上に立てるの人あり、若し其種別を求めば僕を換ふるも、猶暇なからんとす、即ち其種別や多しと雖ども、其懸々裡に自然と神契默約し其至妙なる神韻と同化する所あるや一なり、偉人や自然の中に胎生し、自然の爲めに哺育せらる、自然の力に浴せずして未だ曾て偉人の出づるを知らざるなり、而して札



幌の自然や、其表徴する所の如何に特殊の恩寵を以て、充たさるゝかを見ずや、蓋し造化精を茲に蒐め、華を茲に致し、以て偉人を青養せんとするものに似たり、憾むらくは余輩は茲に札幌の自然と人とを叙するを得ずして、唯其學の上に立てるの如何に相照同する所あるやを究むるを以て満足せざるを得ず、若し夫れ明察深探能く之を推して、以て他に及ぼさば、庶幾くは札幌精華の由て以て存する所以の理を悟るを得ん。

## 第二節 札幌の氣候と學問

氣候と偉人との關係、氣候と文明との關係、是を知らんと欲せば、一帙の文明史之を説明し得て餘あり、太初、原祖元として亞細亞の一角に顯現せしより以來、文明の曉鐘喧しく、鳴り響く今日に至る迄、星霜の變知らず、幾許ぞ、而かも其間文明と氣候とは常に斷えざる連鎖を以て繋がれつゝ、來れり、誰か極北、沍寒の地、其人や其草木と共に萎縮し去るを疑はんや、誰か瘴熱強梁の地、文明の氣、其水と共に蒸發し去るを疑ふものぞ、學問の振興と畏縮とを論ずるものは、竟に氣候を忘る可らざるなり。

夫れ學を爲すものは、先づ冷靜なる頭腦を有するを要す、冷靜なる頭腦は、是れ文明の舍る處なり、冷靜ならざれば、組織的ならず、組織的なるに非ずして、如何ぞ能く幽を啓き、微を明にし、隠れたる眞理を紹介し、世界の文明に貢獻するを得べきぞ、乃ち札幌の氣候を説かんかな。

蓋し札幌の氣候は、最も學問の進捗に好適するもの、茲に學ぶものは、恒に冷靜快明の頭腦を樂むとを得べきなり、之を夏間に見んか、太陽地平線より現はれ、地平線下に没する迄、斷て酷熱の人を蒸殺するなく、綠陰の下、清榻の上、其樂や寔に熙々たり、之を南方の夏に比せんか、彼れや炎暑源熱甌中に坐するの想あり、此れや清風楚々常に腋下に生ずるの樂あり、人あり南方より來らけ、誰か此清鮮の大氣に長嘯するを欲せざらん、又人あり去て、南方に至らんか、誰か其蒸熱の益々たるに呻吟せざらんや、知らず此清風裏に學び、彼の蒸熱裏に學ぶもの、其享受する所に於て、何似の徑庭ありとするか、問ふを休めよ、熱し熱して、膨脹に膨脹を重ねたる腦中、如何ぞ能く冷靜の力を蓄ふるとを得べき、冷靜は斷じて涼清と伴はざる可らず。

八月は、是れ札幌に於ける氣溫の最高なるとき、而かも之を十年間の平均統計に徴



第二節 札幌の氣候と學問

するに、其溫度二〇、九度攝氏に過ぎず、而して此月に於ける、最高溫度は其十一日にして、二二、七度なりとす、更に八月に於ける朝夕の溫度を檢するに、午前七時には一九、八二度にして、午後には一九、九一度なり、試に東京に於ける八月の平均溫度二五、三度に對較し來らば、如何に我札幌が學問の爲めに寄進するの厚くして、少なくとも長を海内に唱ふるに足るものあるを知るに於て餘りあるべし。

更に冬間の氣候の何似なるやを見ん乎、是れ世人の最も恐るゝ所に於て、往々にして、荒唐なる空想の胚胎する所なり、或は其酷烈なる寒威は其軀軀を萎縮せしむると同時に、其腦漿を凍結するを憂ふるものありとせん、然れども是れ洵に江を見ずして、先づ之を濟るを怖るゝの輩のみ、余輩は確信す、札幌の冬間は最も學問修練の好期なりと、人或は其冬間の長さを憂ふ、然れども余輩は之を學問の上より見て、竟に其短きを憾むものなり、蓋し冬間は思想の集中を來し、考察の濃密を致す學問の進歩此時を以て最も可なりとす、何ぞ妄りに其永きを是れ憂ふるを須るんや、況んや、其氣溫の低下や、必ずしも他に比して激甚ならざるに於て、或は彼の札幌を以て人の腦漿を凍結せしむべしと云ふもの、試に世界に於ける學問の淵藪か何の位置

を占むるやを見れば思半ばに過ぐるものあらん。

ポ レン	北緯	五〇、四四	オックスフォールド	北緯	五一、四六
ハ レン	同	五一、三〇	バルチモア	同	三九、二二
ベ レン	同	五二、三〇	フキラデルフヤ	同	四二、二八
ゲ ン	同	五一、三五	札幌	同	四三、四〇
ラ イ	同	五一、二〇			

緯度を以て必ずしも其氣溫の高低を卜すべからずとするも、又以て如何に學問か氣候と相聯關するとの深きやを示し、併せて札幌の氣候か如何に學問の爲めに貢獻する所多きを示すに足らん。

試に札幌と東京の平均溫度を示し、對較の資に供せんか。

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
札幌	六、七、一	五、三、三	一、五、一	四、八、六	一〇、四、〇	一四、六、二	一七、七、七	二〇、〇、六	一六、五、一	九、九、九	四、八、三	二、七、八
東京	二、五、二	三、三、三	六、五、五	一〇、三、二	一六、六、六	二〇、〇、〇	二二、七、三	二五、三、三	二二、七、三	一五、五、五	九、五、五	五、八、八

之を要するに、札幌の氣候は、之を夏間に見るも、之を冬間に見るも、共に學問の振刷を助長すべきものあり、されば是にあるの學者は、常に冷靜なる頭腦を以て、天然の



第三節 札幌の風物と學問  
秘藏を啓發するに最適するものに非ずや。

### 第三節 札幌の風物と學問

大なる哉、石狩の原、浩々乎として、矚目限りなく、渺として、人烟を絶つ、障害なき千里の風は、榆樹に音づれて、崇高の曲を奏するものかみさびたり、武藏野に草より出でて、草に入りし月も、今は軒より出で、軒にこそ入れと、詠はるれど、此のみは春月も、秋月も、夏月も、冬月も、同じく木の間を出て、木の中に隠れ、悠たる原頭の清影、美は賤の伏屋の軒に舍れり。

美なる哉、石狩の水、洋々として流れ、悠々として走る、砥の如きの平原を紆回し、蹙らず亂れず、豊沃なる沖積土を兩岸に残して、惜まず、烟吐く幾多の舟舶を來往せしめて、恐れず、兀として巨人の活歩するにも似たらんかし。

此原や、此水と共に、是れ我國第一のもの、蓋し我國本土の形容は、能く島國の特性を發露し、山嶽起伏、蜿蜒々として東西に彌り、地を別つて、各特殊の一寰區を造る、河流又頗る短、岩石に激し、斷崖を下り、奔湍岩を噛むの壯觀あるも、斷へて悠々洋々宇内を

吞吐するの慨なし、益田川の百泉亂注、水勢遒壯、倒射石角、零珠碎玉、的礫灑空、宛如飛瀑なる、岐蘇川の譎詭變幻、中帶清秀、深穩之態、波激舟舞、飛沫撲人なる、豈に是れ島國峻激の特性を發揮するものに非ずや、誠に之を以て、北海原頭の大體觀に對照し來らば、焉んぞ知らんや、天特に此土を此人に下し、度量廣く、識見遠き、偉人を輩出するに意ありしことを。

山國は思想の生産場にして、自由は常に此裏より來れり、平原は思想の實行場にして、宏遠なる事業は既に此裏に營まれたり、山國の地理的限界が、如何に自由思想の胚胎に影響する所ありしや、而して平原の廣濶が如何に事業の雄渾を齎せしやは云はずもあれ、余輩は他の觀點よりして、山國と平原と人物陶冶の上に及ぼせる影感の大差あるを認めずんば、非ざるなり、蓋し山國の民は、其自然的觀望の狹隘なると共に、其氣宇も亦狹隘なり、故に彼等は、媚疾嫉惡の念に富み、他を陥擠して己の利に走らむとするなり、其思ふ所は小局にして、大局に非ざるなり、彼等は眞理を愛す、然れども其愛や、局奇的にして、世界の爲めに之を愛せんとはせざるなり、之を要するに、山國の民は世界の爲めに之を愛せんとはせざるなり、山國の民は世界大



札幌農學校

の事業に適せざる品性を陶冶されつゝあるなり、更に翻て之を平原に觀んか、平原は往々にして壓制の舍る所、罪惡の伏在する所として稱せらる、然れども平原豈に獨り此くの如くにして止まんや、其限りなき平面の開展は、實に寛裕の宿る所なり、其地理的視線の廣きは、以て其民の氣宇を恢弘にする所以なり、其民は矯逸ならざるも頗る悠宏なり、能く人を容れ世界の爲めに事を爲し、眞理を愛せんとを願ふ。石狩の平原や、實に是れ平原の好標本、其中央に位する札幌、豈に平原の感化を受けずして止まんや、札幌は天地弘達の氣を鍾め、蔚然として茲に一大寰區を樹立せるものに非ずや、茲に學び其偉大なる影感に沐浴するもの、如何ぞ其志氣を、天地の深遠に走せ、翕然として宇宙の爲めに、眞理の愛者たらんことを期せざる可き、余輩は確信を以て揚言せんことを期するに於て、決して人後に落ちざるなりと、嗚呼是れ此景の大、此觀の偉、實に之を誘致したるものに非ずや。

然りと雖も、平原の大は、單調にして、簡單なり、其弊や往々にして無爲に走りて、氣骨を欠き、實際に走りて、理想を缺かんとす、是れ關東の民と關西の民と相異なる所以

札幌農學校

に非ずや、又彼の支那南北の人種か其傾向する所の同じからざる所以に非ずや、地を相して、茲に札幌の都を擬建したりしもの、又這個の思想ありしものに庶幾し、市の西端一帯の山脈、蛇々として走り、笑柯嶽、手稻岳、兀として其中に聳立する處、俊拔の氣、颯として人に逼るの概あり、直立數千尺、試に絶頂に立ちて、四周を睥睨すれば、漫々たる平野、知らず幾萬頃、そ森々たる太洋、白帆影鮮なり、宇宙の大と壯と美と相駢んで、咫尺の間に活動す、單調は是に至つて、破られ、完美なる偉大觀は、澎湃として、潮の如くに到る、札幌や、洵に天の愛子なり。

更に札幌の風物を説かんか、札幌の特趣は、其清楚にあり、其閑寂にあり、其跌宕にあり。「ティモシー」オーチャードの牧草、萎々として、滋り、鮮かなる苜蓿草、翠綠滴らんとするの所、數幹の榆樹、蔚として、清蔭を爲すこと、幾尺徑、其下に憩ふ牛羊、此所に一群、彼處に一群、宛として、是れ一幅畫中の美景なり、蓋し樹の多くして、草の繁れるは、是れ札幌の特色なり、札幌や、開拓後年を閱する未だ久しからず、動植物生存の競争未だ激甚ならず、街衢の中、猶巨幹喬木、巍然として、天を突くものあり、蒲公英街と云ふも



のあり、春陽の候全衢黃英爛熳として黄金の褥を布きたらんが如し、之を彼の黃蘗萬丈と比し來らば其清楚と其渾濁と、豈に雷に月鼈の差にのみと云はんや、楚々たる清風の中に書を讀み倦めば則ち去つて郊外に散策す、秀麗の氣氤氳として正に胸中に蟠らんとす。

ゲーテは曾て閑靜は智慧を生ずと云へり、喧噪なる包圍にありて健全なる思想の生ぜんことを望むは木に縁て魚を求むるよりも難かるべし、是れ當今世界の大學が都會を離れて僻地にある所以なり、是れ自由の思想か獨逸の深林に起りし理なり、是故を以て、余輩は札幌の靜寂を愛す、札幌は四周に限りなきの廣野を抱けり、何處に行ひてか靜寂を求むべからざらん、況んや人間生存競争の緩なると、土地の廣袤と、人口との割合の廣きとは、此地をして、車轡々人羣々の喧噪中より免れしむ、彼の且に槌聲に長夜の眠を破られ、夕に俗音の紛々を避くる能はざるもの、知らず其頭腦をして竟に騷擾、墓中に葬らしむるとなきか。

跌宕豪逸の景は、冬間にあり、朔風一陣樹梢を衝いて颯然響をなし、平和を破るの合圖をなすや、忽ちにして、大風轟然として起り、往々にして、一秒二十三米突の速度を

以て走る、其高く走るや、勁枝を動かし、家屋を震盪す、其低く走るや、巨幹を發き、積雪を吹盪す、雪に亂射せられたる彈丸の如く、水平に電射し、破壊せざれば止まざらんとするの意氣を示す、須臾にして風收まり、亂雪跡を收め、白日熙々として、古戦場の跡を照すを見るのみ、其起るや、既に倏忽たり、其收まるや、更に忽諸たり、其時は短かしと雖ども、其活動は瞬時にして、能く大機を制し、宇宙も震撼す、蓋し學に志すものは、又這般の氣概なかるべからず、而して世之を憂ふ、因循風をなし、姑息俗をなす、札幌あり、希はくは、此雄渾絕偉の風氣を享け、萬里長風に駕し、能く世界の上に進歩の旗幟を翻すを得ん。

#### 第四節 札幌の人士と學問

羅典の古語に曰く、人と人と相對するや、猶狼の如しと、然り、彼等の立つて社會にあるや、狼の如くに貧婪に、狼の如くに搏噬す、然れども、狼に猶多少の社會的本能あり、其集まるや、互に相匡救するの義あり、況んや人の社會的本能の發達せるや、其相互の相關聯する所、最も近し、人や素と生れなからにして、社會的の動物、其組織の複雑



札幌農學校

なると共に、社會と相于るところ最も深きなり、人間と人間との關係其研究を忽諸にすべきものならんや、余輩は乃ち札幌の人間と學問との關係を説かんとす。少なくとも之を我國輓近の歴史に攷ふるに、智識の開展は偉大なる力を以て、進捗し來れり、寺小屋時代の智識は、今や一躍して泰西の學叢を凌かんとするなり、然れども、翻つて之を道德の側より見るときは、余輩は其趨歩が智識の開展と逆行するものあるを疑はずんばあらず、タルドは曾て、高等教育なるものは、人をして犯罪の觀念を生ぜざらしむと云へり、犯罪者の中に、高等教育を受けたるもの、少なきは確かなり、然れども、試に之を彼の寺小屋時代の學徒が如何に純潔なる志想を有し、義務を愛し、道德を重ぜしかに比せば、余輩は必ずしも高等教育の、道德に及ぼす力に謳歌すると能はざるなり、蓋し智は德の基、高等智育を受けたるものは、之を受けざるものに比して、高尚なる道德を有せざる可らずして、而して其實なき所以のものは何ぞや、余輩は之を社會其者の之を馴致するものと信ぜんとす、蓋し方今教育の大勢は專一的智育の上に立てるなり、倫理的涵養の如きは、其二段に位するものは、是を以て學徒の道德は、恰も野に放たれたる虎の如く、縱横に奔馳して、其究極する

札幌農學校

所を知らざらんとす、社會は須らく、之を控製するの任あるべき者にして、却つて之を助長するの勢あるは、歎ず可らずや、嗚呼、現今學徒の道德を支配すべきものは社會にあり、社會豈に竟に無爲にして止む可けんや。

余輩は、社會の道德の由來する所以の理を解説するの勞を取らざる可し、然れども、欺騙盛に行はれ、誑詐横行し、利は利と戦ひ、慾は慾と戦ひ、或は淫靡風となし、紅氈途に横はり、姓的徳性、全く破壊せられ、魑魅魍魎の跋扈に委する換言すれば、社會的徳の水平頗る低きの地に在つて、到底學徒の品性を涵養すべからざることを確信す、大都の學生が往々にして其抱負を抛ち、其希望を棄て、胥率ひて恐るべき深淵に進み入る所以のもの、豈之が爲めに非ずや。

余輩をして、札幌の眞個學問修練の地たるを知らしむる所以のものは、又實に其社會的徳の崇高なるにあり、之を歴史の上より窺ふるに、札幌や半世紀の古に於ては、荆棘榛蕪として限りなきの平原を占領し、巨幹大樹蔚として、天日を遮りし之地、而かも今や斧鉞漸く入り、人煙日に滋殖し、麋の鹿鳴の呦々たるは、則ち化して讀書の聲琅々たるを致す、其文明的更新の倏忽たるや、殆んど他の社會的組織の進捗



札幌農學學校

を忘却せしものに似たり、蓋し進歩の漸を以てするものは、其罪惡の發達も又漸を以てし、初めは則ち些細にして特に顧みるに足らざるものも、漸く其勢を助長して、其の根や堅く、其葉や繁に、終に宛として、一大勢力をなす、而して恬として、其病の既に膏肓に入れるを悟る能はざるなり、若し夫れ其進歩の急激、濤然たるものに至つては、即ち然らず、進歩的エネルギーの消費は一方に偏倚して、而して其罪惡發達の爲めに、貢獻する所最も少なし、之を例ふるに、夏雨一掃して、渾濁の氣、俄に散じ、清鮮の氣、郊野に周ねきも、春雨の纖々、濛々たるは、陰闇として、其中に微を醸し、菌を養ふが如し、余輩は、平生好んで、札幌の社會を觀る、而して常に其社會的罪惡の發達か、其文明進歩の度と、相並行せざるものあるを見、是を以て、札幌が有する特殊の歴史に歸するあるを信ぜんとす、彼の都會に於ける社會的制規の、萎縮振はざるは、實に是れ札幌社會の美を照すの、反映影也、之を要するに、札幌は其文明に於ては都會的にして、其道徳に於ては田舎的なり。

更に札幌の人間を觀んか、札幌の人間は最も治力に富めるものなり、最も進取の氣象に饒なるものなり、彼等は攻撃の民にして、防禦の民に非ず、彼等は機會を俟つの

札幌農學學校

民に非ずして、機會を造るの民なり、彼等は眠れる羊に非ずして、起てる獅子なり、彼等の四圍は等しく、彼等の來りて、其抱負を行はんことを待てり、彼等の來るや、又洵に其颯程萬里の事業を企てんとするにあり。

新開の地進取の氣象、勃として抑ゆべからざるものあるは、敢て怪むに足らずとす、此氣が如何にして、學徒の品性の上に、影感する所あるやを思は、誰か之を以て、札幌の有する一偉觀たるを疑はんや、進取とは確かに、札幌青年の腦中に畫かれたる一の玉條なり。

今や青年の墮落を論ずるもの、朝野に周ねし、意氣空しく沈落して、颯程萬里の大志を抱くもの、殆んど罕に滔々として無氣力、無節操の渦中に、蠢くのみ、寔に是れ專一的智育の然らしむるに由るとは云へ、其社會が又志氣を鼓吹するの力に缺けるに由らずんば、あらず、札幌あり、嶄然光を渾濁の中に放ち、屹として天下を睥睨す、腐れたる腸を癒し、なへたる足を回さんことは、札幌の帶ぶる神聖なる使命なり。



## 第五節 結 論

以上は札幌の自然か學問の爲めに貢獻する主なるものに就て云ふのみ、又以て造化が之に賦與するの厚き所以を解するに足らざらんや。

蓋し地に一種の氣あり、流々轉々暫らくも止まらず、歴史は即ち地氣變遷の記述なり、政氣の流轉する所、世界の文明を指導す、春秋戰國は是れ政氣の變轉、最も甚だしかりしの時、南歐の文明は學氣流轉の著しき例を示す、更に之を一國に見んか、我國の政氣は、初め山陰の一角に萌し、漸く流轉して、九州に入り、京畿に入り、遂に關東の平野に移る、學氣の流轉や、又政氣と略ぼ其軌を一にするもの、如く、今や即ち關東の平野に止まる、然りと雖も、政氣と學氣とは必ずしも相隨伴するものに非ず、要は之をして隔離せしむるにあり、蓋し歐洲の政氣は、英露に瀰りて、結ばれり、學氣は即ち獨に於て、氤氳たり、或る程度迄は學氣と政氣と其流轉の勢を均ふすべきも、之を過ぎなは、到底兩々相並行す可きに非るなり、關東の平野は實に我國の中樞、政氣の茲に鬱葱たる、實に自然の勢の趨く所に屬す、然れども、此地の自然や既に學の爲め

に忠ならず、學氣は宜しく北漸して、直ちに一葦水を度り、終に札幌に止まらざる可らざるなり、地氣變遷の理を悟るもの、誰か札幌が他日學問の淵藪たるべきを疑ふものぞ。

學をなさんとするもの希はくは來れ、來り來つて此自然の清泉に浴せよ。



## 第二章 札幌農學校の過去

### 第一節 明治維新と北海道の開拓

今上天皇陛下聖明一視同仁、夙に王化の蝦夷地に及ばざるを嘆かせ賜ひ、深く其御統治に叡慮を惱ませられぬ、是を以て蝦夷地の拓殖は、維新早々の廟議となり、明治元年三月、主上は親しく太政官代に御せられ、蝦夷地開拓の事を問はせらる、其結果として函館府を開き、清水谷公考知府事に任せらる、後ち徳川氏脱落の徒、函館を侵し此に據りし爲め、一時閉府の厄に遭ひたるも、越えて二年五月函館の平ぐと共に、其六月中納言議定鍋島直正を、蝦夷開拓總督となし、陛下勅を垂れての玉はく、蝦夷開拓ハ皇威隆替ノ關スル所一日モ忽ニスベカラズ汝直正深ク國家ノ重キヲ荷ヒ身ヲ以テ之ニ任スルヲ請フ其憂國濟民ノ至情朕嘉納ニ堪エズ猶恐ル汝高年遽ニ殊方ニ赴クヲ然レモ朕之ヲ汝ニ委シテ始テ北顧ノ憂ナシ仍テ督務ヲ命ズ他日皇威ヲ北疆ニ宣ル汝ガ方寸ノ間ニ在ルノミ汝直正懋ヨ哉

嗚呼何ぞ夫れ優渥なる、次で七月開拓使を置き、同時函館府廢さる、從二位鍋島直正

開拓長官たり、清水谷公考次官たり、是年蝦夷地を改めて北海道と稱し、十一國に分つ、東久世通禧、鍋島氏に代て長官たり、陛下復た勅を垂れて、北海道開拓の至重急務たるを諭さる。

當時の兵部大丞、黒田清隆は同二年五月を以て、開拓次官に任じ、専ら樺太の事を掌りしが、後上書して石狩に鎮府を置き、北門の鎮と爲さんとせり、實に四年五月に及び、札幌に開拓使廳を置くの議は、全く此に胚胎すと云ふ、是より先き黒田清隆は官命を帯びて、渡米の途に上り、大に蝦夷開拓の策を書せんとす。

黒田氏既に米國に官遊するや、開拓の歩武大に進み、耳目を一洗する所あり、由て以て北海道拓殖の摸範となすべしと、則ち米國政府に請ふて、農務局長クブロン(Horace Capron)外三名を聘して歸朝す、外人等吹上離宮に謁を賜はる、外人の榮や至大なり、既にして伴ひ來れるライマン(B. S. Lyman)マンロー(H. S. Munroe)をして、地質及礦物の調査をなさしめ、ワッソン(J. R. Wasson)キー(M. S. Day)ノーフィールド(A. G. Warfield)をして、全道の測量に従事せしめ、ボーメル(Boelmer)をして、植物調査をなさしめ、ダン(Dunn)をして、畜産の業に當らしむ、斯の如くにして、開拓費年額百萬圓、十年間一千



萬圓を定額とす、北海拓殖の事之より刮目して觀るべく、我札幌農學校なるもの、萌芽、蓋し亦此に在る也。

### 第一節 札幌農學校の萌芽時代

北海道の開拓は、明治政府の大事業なり、局に當るものは、其人を精選するを要す、即ち英斷果決清廉潔白の士にして、始めて之を克くすへし、黒田清隆は蓋し其人なるか。

當時の陸軍中將參議黒田氏の好箇新開地經營者たるの器量は、早く既に泰西學術の力に依據せざるべからざるを覺悟し、其開拓次官に任せられたるの翌年、陛下の御下問に奉答するに、將來學を興し皇化を布くの必用なるを以てす、後米國拓殖事業の實況を查察するに及んで、彌々其素志を貫くに急なり。

黒田氏の米國に入る時、既に右大臣三條實美の許を得て、留學生三名を伴ひて、他日開拓有用の才たらしめんとす、四年歸朝すると共に深く米國拓殖地教育の普及に感發する所あり、再び女學校の設立と女子留學の必用なるを上言して曰く、夫れ

開拓の要は山川の形勢を察して往來を通じ、土地の美惡を檢し培畜を盛にして、以て生を厚くし、俗を美にするに在り、然り而して之を爲すは、人才を生ずるに在り、人材を生ずるは、子弟を教育するに在り、今や歐米諸國能く子弟を教育する者と謂ふべし、何となれば、兒子猶ほ襁褓に在り、能く菽麥を辨ず、是れ他なし、其母既に學術あり、造次顛沛是に於てすればなり云々。

乃ち少女數名撰ばれて、米國に留學せり、去に臨て畏くも、皇后陛下の召見あり、物を賜はる、豈に絶大の榮譽と云はざるべけんや。

既にして内に在りては、農工諸科の學を東京に設け、後ち北海道に移さんとして、允許を得、化學、器械、博物、畫學、教師、各一名、醫二名を米國に聘し、芝増上寺を以て校舍に充て、假學校と命け、學課を分ちて、普通専門となし、普通科には英語、漢學、數學、習字、圖畫、地理、物理、歴史、化學、重學、測量、博物、鑛山、農學あり、専門科には理學、重學、鑛山學、地質學、建築學、測量術、植物學、農學、等あり。

當時本邦幼稚なる學術を以て、斯かる復雜なる教育を授けんと欲す、亦難しと云ふべし、蓋し是れ後年純粹なる農學校を發生するの小孩兒にありしなり。



開拓使假學校は、官費私費各五十名を定員とし、卒業後は北海道開拓の業務に服するものにして、開拓使五等出仕荒井郁之助、其校長を拜命し、明治五年四月を以て開校せり。

曩に黒田氏は女學校の必要を陳ぶる所ありしに、果して其九月を以て、假學校内に女學校を併置するに決し、生徒五十名を容る、是れ亦卒業の後は、北海道の家庭に入らしめんとしたるなり、蓋し斯の如く、男女二部を併置する所以のものは、黒田氏以爲らく、其卒業後兩者相配偶せしめ、拓殖の功を全うするに足らんと、女學生も後、假學校と共に、札幌に移されたるも、故ありて廢せられたり。

假學校の公費生制度は、當時官邊の問題となり、廢止の議ありしも、黒田氏固く執て聽かず、米國の農藝を建て、佛國の諸科學を設くる、皆學資を貧者に支給し、遂に無前の大功を奏したる例證を引き諄々として説く所ありたる爲め、議中る止む更に大に學則を改定し、校務を整理し、姑らく専門科を止め、閉校すると一ヶ月、英佛語外國教師及び數學、漢學の教師を増置し、六年四月には再び増上寺内、呬唔の聲を聞くに至りぬ。

## 札幌農學校

## 札幌農學校

東京假學校は其後、天皇皇后兩陛下前後駕を枉けさせらるゝの榮を蒙り、剩さへ

兩陛下は生徒の課業を御覽せられ、親しく優等者に賞を賜ふ、其光榮や至大なりと謂つべし、余輩此に於て願ふに、今日の東都にて大小の痒序到る所に讒え、其數、百を以て算すべしと雖も、今より三十年前の東都は未だ學事見るべき者なし、況んや高等専門の學をや、今我札幌農學校の萌芽時代に於て斯くの如く至尊の殊遇を辱くしたる所以のもの、其當時都下少數の學校中に伍したるに依ると雖も、抑至尊か北邊の治を重せられたるに由らざんば、あらず、明治十四年、車駕北海道御巡幸の砌、復々我札幌農學校に臨御あらせられ、學生の學術實驗を御覽するの事あり、之を思ひ、彼れを願ふ、彌々其恩眷の厚きに感せずんば、あらざるなり。

札幌の地四面豁如、水氣清冷、風土良好、好箇學門の地にして、人才の養成所なり、是より先き、明治四年五月、既に開拓使廳は札幌に置かれ、大判官岩村通俊等、銳意札幌の經營をなし、區劃成て人口漸く滋殖し、稍市街の觀を呈す、乃ち東京假學校を擧げて此地に移さる、實に明治八年八月となす、名稱を改めて札幌學校とす、更に専門科を設けて、學生研鑽の便利を圖り、大に校務を擴張せんと期せり。



第三節 札幌農學校の成立

初め黒田長官の開拓使學校を興すや、次を以て専門學の大學校となし、開拓須要の人才を得んとするにあり偶々雇開拓使顧問、米人陸軍少將クプロン、農業大學校設立の必要を説く。クプロンは嚮に北米合衆國の農務局長として、學識と經驗に富むの人、其建議長官豈此を容るゝに吝なるべき、即時長官は華盛頓駐劄帝國公使に知照し、農業大學を組織するに足るの人物を雇聘せしむ、公使其旨を華盛頓政府に通す、彼の政府は幕末開國以來、我國に對する厚意を以て、特に此命をマサチューセツ州アマスト農業大學校長ウィリアム・スミス・クラーク (William Smith Clark) に下す、蓋し其開校の事情、彼我太だ酷似するものあればなり。

クラーク命に接して、大に悦び、東亞の美帝國に、其姉妹校を興すの一大榮譽なるを以て、快よく我請ひを容れ、一年間服務の約をなし、部下二名の教授ウィリアム・ホイーラー (William Wheeler) 及デービッド・ペーパー (David P. Penhallow) を伴ひ、萬里の波濤を越へ、我北海道に來れり、是れ明治九年七月の事となす。

クラークの札幌に入るや、黒田長官の命を承け、直ちに教則を編み、學科を作り、修學年限を四ヶ年とし、卒業生には學位を授くることとなせり、學生はクラーク自ら、舊札幌學校の生徒を試験し、其合格者十二名と更に東京より新に募集せるもの十一名と、併せて廿三名を以て、官費本科生となす、但し卒業後開拓事業に従事するは、舊慣に仍れり、本科官費生は定員亦舊に依り五十名と定め、別に豫備科を設け、普通學を授け、生徒には通學を許したり、其課程を三年とす。

職員は當時の開拓小判官調所廣丈を校長として、クラーク教頭たり、又ホイーラーは農場管督長、數學及び工學の教授を兼ね、ペンハローは植物學化學の教授たり。既にして、百般の準備全く整ふや、假に原語の Agricultural College を譯して、農學校となし、在來の札幌學校を閉ぢて、更に札幌農學校開校の式典を舉行す、實に明治九年八月十四日なり。

開拓長官、黒田清隆諸員を率ゐて、之に臨み、式盛大を極む、卷首に載する所の黒田長官の開校式辭は、此時朗讀せられたる所のものとす、斯の如くして、札幌農學校全く成立せり、而して之と共に、讀者は記憶せざるべからず、即ち我、日東帝國農學校の設



立せられたるは同じく明治九年八月十四日なることを、實に我札幌農學校は帝國に於ける農學校設立の濫觴となす、既にして又開校の當年は、鳳輦東北諸縣の野を巡り函館に幸せらるゝあり、陛下忝くも三條太政大臣を以て、御名代とし、山縣參議以下、高官を率ゐられ、斯校を來觀し、學生の勉勵を賞し、優等者に金若干を賜ふ、嗚呼札幌農學校の歴史、概ね斯の如し。

第四節 札幌農學校教養の方針

札幌農學校は斯の如くして成立せり、既に成立を告ぐ、隨て一定不變の教養方針備はらざるべからず、而して一校教養の方針は、之を要するに其設立の由來と、其職員の意嚮によつて、現出すべきのみ、我農學校の設立は、既に述ぶるが如く、拓殖協賛の重責を盡すに在り、設立當時の覺書の要に曰く、我農學校の設けたるや、其學生を養成して、拓殖行政の衝路に當らしめ、殖産興業の實を擧げしむるにあり、即ち泰西新進の學術技藝を巧に應用せしめ、進んでは一國をして學術の效果顯著なるを知らしむるに在り、是を以て學生には、自修の精神を重ぜしめ、將來社會に立脚の地歩を

鞏固ならしむるものとす云々、是に由て之を觀れば、固より斯校に、單に農學校を以て命じたるは、名實相適ふものと云ふべからざるや明瞭なり。

農學校の據て模範とせし者は、直接には、マサチューセツツ農業大學校に在りと雖も、亦往時獨逸の「カメラル學」(Kameral Wissenschaft)の學校と自然似る所あり、斯の「カンラハ」の學校は、十八世紀の末葉十九世紀の始めに當り、獨逸に於て隆盛を極めたるものにして、經濟王の綽名あるフリードリッヒ、ウヰルヘルム一世が、ハレ及フランクフルトに於て、王國の經濟的統御をなすに必要な才器を養成せんと、の意志を以て、盛に斯種の學校を設立したり、蓋し今黒田長官の我農學校を興すの意志も、フリードリッヒ、ウヰルヘルムの意志に外ならざるべし。

當時斯學校に教頭として、校政の調理を負擔せんとするものは、博士ウイリアム、クラークなりとす、余輩はクラークの人品に就ては、後節に説く所あるべし、要するに彼は學識に富み、義勇に富み、德行に富み、米國の一偉人として、又マサチューセツツ農業大學校校長として、彼が今より二十年前の昔に、遠く我日東帝國に來り、東洋に於ける最初の農業大學校設立の榮譽を荷ふの、偶然にあらざるを知るなり。



第四節 札幌農學校教養の方針

彼れは能く、黒田氏の意を承けて、其開校の精神に兜據して、校政を見ると最も親切にして、且つ周到なり、開校早々にして彼の編みたる學課は、實に能く設立の主旨に適ふ所のものとす、其學課の大畧に曰く。

農學、無機及有機化學、分析化學、博物學、解剖學、生理學、獸醫學、地質學、數學、物理學、天文學、土木學、測量術、經濟學、英文學及辯舌法、英文學史、歷史、哲學史、心理學、簿記學、練兵、實業、

而してクラークか、尤も教養方針の第一義として、重要視したるは、自修心にして、獨立獨行不撓不屈の精神を涵養するは、彼れの一學課なりしが如し、是を以て他の外來二教師の如き、皆クラークの心を以て心とし、始より本校教授の職に在り、拓殖有用の才器を養成するの一方針に向て進みたるなり。

然れとも札幌農學校には、管轄上夥多の變遷あり、隨て其時々當局者の意見と共に學科に更革を來すは、免かれざる所にして、本校の教養方針も、設立當初のものを一貫すること能はず、蓋し彼の獨逸の「カメラル」學なる者が、其後永續せずして、時世の推移に連れ、農學、林學、行政學及び經濟學に分離したるが如く、我札幌農學校にても

年月の變遷と共に其舊觀を存せざるは、數の自然と謂つべし、果せる哉、我札幌に於ては、農學及び工學の二科に歸結するに至れり。

第五節 札幌農學校職員の変動

札幌農學校設立當初の教頭「ドクトル、フロンフヒエー」ドクトル、オア、ロース、陸軍大佐ウイリアム、スミス、クラークは、一千八百廿六年米國「マサチューセツツ州アマスト」に呱呱の聲を擧ぐ、幼にして大志あり、歳二十三にして、アマスト大學を卒へ、獨國「ゲッテ」ンゲン大學に遊び、鐵血宰相ビスマルク等と共に同窓の友たり、後ち本國に歸り、アマスト大學に教授たりしに、間もなく一千八百六十年の南北戦争の破裂を見るに至りしが、北軍の起る、元來其名正し、博愛仁義を楯とし、不幸兵馬の間に輪靡を争ふに至る、天下誰か同情を表せざらん、是に於てか、クラーク等も、奮然厥起干戈を操て、義勇兵に投ず、既にして推されて隊長となり、陸軍少佐に任せらる、義勇軍各所に轉戦し、大に敵軍を敗る、是に於て、クラークの武名遐邇に轟く、後大佐に進み、又少將に推されたるも、彼れ固辭して受けず、既にして戦止み、郷關に歸臥す、偶々各州に農校



を興すの議あり、則ち自ら進んで創立の衝に當り、遂に能く一農大學を完成す、マサチューセツ農業大學校即ち是なり。

クラークは斯かる經歷を有し、夙に米人の尊重する所たりしが、米國駐劄本邦公使吉田清成其盛名を耳にし、我農營を設立者たらしむ又偶然ならずと云ふべし。

クラークが當時伴ひたる職員は、前節に於て述べたる如く、共にマサチューセツ農業大學校卒業學士ホイラー及ペンハローとなす、後ち一ケ年にしてクラーク雇聘の期満ち、開拓使之を止めんとしたるも、彼れは本國に於て、依然大學校長の職務あるを以て、竟に歸米の途に上れり、是を明治十年の春となす、氏も心中我校を去るを恨まず、學生も亦其德に懷き、別を惜むと雖も、如何ともする能はず、札幌を距る約七里の地なる島松驛に於て、師弟別を告ぐ、彼れ胸中萬斛の涙を湛へ、低回顧盼之を久うし、忽ち高く一鞭を揚げて、其影を失ふと云ふ、實に卷首載する所の *Boys be ambitious* なる語は彼れが最後の遺訓にして、今日の札幌農學校學生の相與に、永く念誦する所のものなり。

我校は不幸にして速に其教頭を失ひたるも、教師ホイラーあり、温厚の士なりしを

以て、校務弛廢せず、又此年を以て學士ウィリアム・ピーブルックス(William P. Brooks)米國より雇聘するを得て、乃ち一教師を増せり、氏は農學専門の教師にして、着任以來農園の監理に勵精し、學生を率ゐて共に耒耜を把り、耕耨をなす、札幌農學校舊時の農園は、氏の手を煩はして、面目を一新したりと云ふ、則ち農園はクラーク創めて、其端緒を啓き、廣大なる模範家畜房を營み、泰西進歩の農具を輸入し、北海道農業改良の先導者たらんとせり、而してブルックスに至り、一層見るべきものあり、當時札幌農學校所屬農園地積五町一反二畝、牛馬の數合せて十六頭とす、今之を今日の六千二百六十六町五反六畝、耕牛馬數百三十餘頭に比すれば、固より小規模たるを免れざりしと雖、適々以て本校の基礎此に定りたるを賀するの資たらしむるに足らん。

教頭ホイラーは、本校の教務を見ると共に、開拓使の委任を受けて、爲したるの事業至て多く、小樽札幌間鐵道線路の測量の如き、氣象觀測の如き、君の手を煩はしたり、ペンハロー亦拓殖の事業に熱心に、北海道主要栽培植物たる亞麻纖維の研究をなしたり、蓋し此等の論文及事業の詳細は、當時刊行の札幌農學校年報にあるを以て



今此に贅せず。

教師ペンハロー時に暇あれば、即ち學生と相携へて、山野を跋渉し、諸種の標本を蒐集し、博物標品室の基を作れり、明治十年夏期休業に當り、學生を伴ひ空知川上流榛の裡を跋渉し、深く人跡未到の地に達す、此間學生の見聞に裨益する所少からざりし。

今明治十二年三月、札幌農學校第三年報に由るに、明治十一年に於ては既に第三回の入學生を入れ、五十名の定員に滿ち、加ふるに諸級の課程も漸く高尚の位地に進み、生理學比較解剖學及英文學科の爲に、一名の教師と兵學科に一名の教員、又數學化學の兩科に、各一名の助教兼豫科教員を採用せざるべからざるに至り、ドクトル、カッター (John C. Cutler) を招雇す、勤續する八年。

カッターは、マサチューセツ農業大學校及びハーバード大學醫學部に於て、其業を卒へ、ボストン府病院の醫官として、刀圭社會に名聲あり、當時學生の氏に親炙したるもの幸福想ふべし。

理學士宮崎道正は、化學助教兼豫科教員として、此時來校され、陸軍少尉加藤重任、兵

學の教員に補せられたり。

之と相前後して、マサチューセツ工業大學校卒業生學士ピーボデー (Cecil H. Peabody) を聘し、數學及土木工學の擔任となせり。

明治十四年二月、調所廣丈學校長の職を退く、始め東京假學校の時代より、本校の設立上、功勞の頌すべく、且關係の淺からざる當時の開拓少書記官森源三其後を襲へり、此年教頭ホーラーベンハロー任期滿ち、相次で去る、ブルックス、教頭となり、更に、マスター、テブ、アーツ、工藤精一來りて地質學教授たり、又英文學教師としては、英國キンクス大學前教授ゼイムス、サンマース (James Summers) を招聘し、ピーボデー歸國して工學士橋協之に代る。

翌明治十五年宮崎氏去りて、豊原百太郎來る、恰も此年開拓使廢せられ、北海道事業管理局の管理に歸し、十九年再び北海道廳の所轄となり、北海道廳理事官佐藤秀顯校長事務取扱を命ぜらる、井上毅文郡大臣となり、札幌農學校の規模に就て、大に畫策する所あり、明治廿八年文部省の直轄となれり、斯の如く、屢其管轄を變へたる爲め、校務に多少の阻礙ありしと雖、甚しきには至らず、是より先き明治十八年ホーラー



ス、イー、ストッフ、フリッチを招きて地質學及び化學の教授を擔當せしめ同二十二年に至れり翌十九年カッター去りたるを以て其後任として獸醫學士須藤義右衛門來れり同年森源三退きて橋口文藏校長に任ぜらる明治廿四年八月佐藤昌介校長心得となり明治廿七年四月本官に進む佐藤氏は札幌農學校第一期(明治十三年)の出身にして北海道廳及農商務省に歷任したりしが、後米國に笈を負ひチヨンス、ホッフ、フキンス大學に遊び、純ら經濟學農業經濟學土地制度等を修め、大に得る所あり、其業を卒へ、「ドクトル、オブ、フロンフェー」の學位を得たるは明治十九年にして、後又獨逸に遊び歸朝す。

北海開拓の進捗と共に、土木工學に精通するの士を要すると、彌々切なるを以て、當局者其筋に稟議する處あり、我札幌農學校内更に工學科を新設し、學生を教養し、卒業の後は、工學士と稱するに定まりたる爲め、トロント大學出身學士ミルトン、ヘート(Milton Haight)來り、其教授に任じ、明治廿年より、工學士橋協に代りて、明治廿四年迄勤績したり、工學科は其後本校第二期卒業生廣井勇の、米國に遊學し、刻苦砥勵具さに辛酸を嘗め、實地修學すると七八年後、獨逸國スツットガート大學に於て、土木

## 札幌農學校

## 札幌農學校

工學を修め、其業を卒へて、チヒル、インギニールの學位を擔ひて、歸りたるを以て、本校教授となり、次て明治二十三年米國コーネル大學出身、シヒル、エンシニヤ、杉文三教授となり、共に純ら工學科に教鞭を執れり、明治三十年故あり、工學科を廢す、教頭アルックス在職最も永く、十數年の久しき勤勉至らざるはなし、今や歸米するに際し、其後任者として、マサチューセツ州農業大學卒業學士アーサー、エー、ブリガム Arthur A. Brigham)來着せり、之を明治二十年となす、農學士宮部金吾は、明治十四年札幌農學校の業を卒ると共に、農商務省の命を受けて、東京大學に於て、更に潛心植物學を專修する年あり、後ち一時我校に助教たりしが、明治十九年を以て、北米遊學を命ぜられ、ハイバード大學に植物學を修むると、滿三ヶ年、ドクトル、オブ、サイアンスの學位を得て歸朝し、直に教授に任ぜらる、之に次て新渡戸稻造の海外より歸朝するあり、全じく教授に任ぜらる、新渡戸氏は、我校第二期の出身にして、後ち米國に渡航し、チヨンス、ホッフ、フキンス大學に遊び、經濟學、歴史等を研究中、官偶氏に獨逸留學を命ず、氏即ちボン、伯林、及、ハレ、三大學に於て、農政、農史、統計の學を學び、ドクトル、フロンフェー、エー、マキステル、アル、テウム」の學位を得、乃ち米國を経て歸朝せり、其海外に在



る、前後九年之と前後して、農學士南鷹次郎は多年學術實驗を研鑽し、又米國を遍歴し農學に精通する所あり、農藝化學士吉井豐造の斯學に熟達せるものあるを聘し、共に本校の教授に叙任せらるゝあり、但し吉井氏は化學教師「ドクトル、フロッツフェー」ストックブリッジ(H. E. Stockbridge)の後を襲ひたるものとす、理學士原十太、工學士平野多喜松は明治卅年を以て、農學士尾泉良太郎は翌三十一年に、林學士新島善直、工學士内田富吉は三十二年を以て共に教授に任せらるゝ、而して三十四年に於て農學士橋本左五郎、工學士川江秀夫は將に獨逸より歸り、橋本氏は蕃産學、細菌學の講座を開き、川江氏はスツットガルト工科大学に業を卒へ「シビル、エンジャー」の學位を得たるものにして、本校土木工學科の主任たり、是に至りて稍々舊觀を改め、往時我校の職員は外人を以て網羅したるに、今は乃ち多く碩學を以て聞ゆる邦人を以て其職を充すもの、亦本邦學術進歩の一端にあらざや。

### 第六節 札幌農學校過去時代の學課

札幌農學校の始めて興るや、上來述ぶる如く、開拓有用の才を養ふに在りたるを以

て、農學校としての其學課なるものが、恐らくは讀者の意表に出づるものあらんを知るなり、而して又學級を分ちて、四學年となすが如き、皆「マサチューセツツ農業大學校」に則るものたるや、明かなりと雖、寧ろ是れ、一般米國の大學制度に則るものと云ふべく、總ての點に於て、札幌農學校が、米國風の大學としての紀念を今日に繼承するものと云ふべし。

今次に開校當初よりの、學課變遷を示さんとす。

#### 明治九年學課表

(當時全國の學校に練兵なる課目なかりしに、本校率先して、米風に習ひて之を入れたり、實に本邦學校に兵式練習を授くるに至りたるもの、本校を以て權輿となす)

#### 第一年級

第一期 代數學、物理學、化學及無機化學、練兵、英文學、實習  
 第二期 幾何學及解析幾何、有機化學及實習、農學、英文學及辯舌法、自在畫及幾何畫法、練兵、實習

#### 第二年級



第六節 札幌農學校過去時代の學課

第一期 農藝化學及分析、農學、植物學、人躰解剖及生理學、英文學及辯舌法、練兵、實習

第二期 三角術及測量、定量分析、植物學、農學、英文學、書法重學、練兵、實習

第三年級

第一期 重學、植物學、動物學、果樹栽培、英文學、練兵、實習

第二期 天文學、畜産學、英文學、築園法、英語作文及辯舌法、高低測量及製圖、練兵

第四年級

第一期 物理學、獸醫學及實習、地質學、簿記法、顯微鏡學、臨時討論、練兵

第二期 土木學、心理學、經濟學、英語演說、練兵

此課程を見るもの唯一驚せざらん當時固より學術進歩の幼稚なる折柄敢て其學課の難易輕重を問はざれ共、英文學及辯舌等が、各學年主要の部分をお占むるは奇

異の感なき能はず、蓋し當時の札幌農學校出身者に、英學に巧みなるもの多きは此に基因す。

然れども學問の進歩と世間の評論は、札幌農學校の課程をして、永く斯かる狀況にあらしめず、爾來明治十三年十四年と次第に、其形而上の學問減じ來りて遂に農學校をして其名實相適ふに近からしむるに至りたり、次に、明治廿年頃の學課の大體を示し、現今の純粹農學課程に進みたる過渡時代として、讀者の参考に資せんとす。

第一年級

農學、無機化學、生理學及健全學、英語、測量三角術、農業實習、分析化學、書法製圖、練兵

第二年級

農學、日本農學、有機化學及動物化學、星學、重學、地誌學高底測量學、簿記學、農業實習、練兵、農用化學、植物學、歷史、物理學

第三年級

農學、植物學、動物學、應用化學、經濟學、物理學、氣象學、顯微鏡使用法



水産學、地質學、農業經濟學、山林學、農業實習、練兵、

第四年級

農學、獸醫學、昆蟲學、農政學、地方制度、學術講談、農業實習、練兵、  
殖民策、卒業論文、

又學課に伴ひて、其課程の日割を見るに、學校開校の當時は、毎日午前午後之あり水曜及土曜日の午後のみは、之を舒暢休養の時となし、其他は専ら野業武藝學術上の研究、若くは校長の許可を受けて、教授の命する事業に午後時間を費消したり、蓋し斯かる習慣は米國風大學の常にして、現時の札幌農學校尙其形影を存せり、今又次に去る三十一年五月の改正規則發布前の學課程度を示す。

第一年級

農學總論、農學通論、分析化學、植物組織學及實驗、岩石學及地質學、測量、  
物理學、獨逸語、農業實習、農具論、植物營養論、隱花植物學及實驗、

第二年級

土地改良論、土壤論、植物生理學、動物學實驗、農用工學及物理學、農業史、

普通作物論、植物病理學、農用工學、經濟原論、農業實習、獨逸語、

第三年級

園藝學、動物飼養論、動物生理學、水産論、農業經濟學、養蠶論、特用作物論、  
農産製造論、昆蟲學、森林學、普通作物論、農藝化學實驗、植物病理學實驗、  
農業經濟演習、農業實習、

第四年級

牧畜論、獸醫學、殖民史、農政、卒業論文、農業實習、農業經濟演習、農藝化學實驗、  
植物病理學實驗、

第三年級已上農藝化學實驗及植物實驗並ニ農業經濟演習ハ特ニ篤志ノ學生ニ其志望一科ヲ課ス、

過去時代の學課を結ぶに臨み、明治二十年に起り、後明治廿九年三月の規則改正と共に廢せられたる本校の工學科(卒業後は工學士と稱するを得)及明治二十二年一月一時屯田兵士官志願のものを養成するか爲に置かれ後廢せられたる兵學科、此二科の學課表を次に示す。



工學科

第一年級

解析幾何學、書法幾何學及實習、岩石學及地質學、無機化學及分析、英文學、微分、測量術、測量及製圖、獨逸語、

第二年級

積分、測量術、測量及製圖、物理學、應用重學、書法重學及實習、建築用材、經濟原論、獨逸語、

第三年級

測地學、應用重學、道路及鐵道、道路及鐵道製圖、運輸及交通論、橋梁計畫及製圖、石工計畫及製圖、家屋計畫及製圖、器械學、造家、橋梁、石工及基礎、獨逸語、

第四年級

橋梁計畫及製圖、水利工事計畫及製圖、河港改良及運河、橋梁、衛生工事、工業史、工事計畫及製圖、電氣工學大意、卒業意匠、

兵學科

第一年前期

農學、農業實習、數學、兵學、地理圖學、築城圖、地理圖、野外要務草案、師兵規例圖上戰術、諸勤務訓誡、教練、

第一年後期

農學、農業實習、數學、兵學、地理圖學、軍路學、圖上戰術、衛生學、砲兵學、射擊教範、兵基、地理圖、築城圖、教練、

第七節 札幌農學校過去時代の學生と其學風

明治九年に於て初めて學校の開かるゝや、學生の數は二十四名に過ぎず、僅に一學級をなすのみ、此二十四名の者は最幸福兒にして、又余輩今日の學生の最も多く景仰する所のものとす、是れ他なし、彼等は我校の創立者たる米の一偉人ウイリアム、クラークに親炙して、最も多く其感化を受けたるものにして、彼等の多くは今日以後社會に頭角を現はさんとするに抵れるもの、遠く此時に胚胎すと云はざるべからず、



らず、而して彼等の學校に在るの日、勤勉朴直業を勵み、學を習ひ、後新に入門せる學生に其美風を移し、順次繼承して今は牢乎として抜くべからざる、我札幌農學校の學風を作るものと謂ふべし。

余輩は此條に於て、ウィリヤム、クラーク及他の職員が學生に對して、なせる一二美行を縷述して、我校の前途を戒め、且つは江湖學校行政者諸君子の鑑とせん。

クラークは既に説述したるが如く、米國の軍人として、又一偉人として、衆の崇拜する所なるにも拘はらず、毫も嚴峻に失せず、彼れの平常學生に接するや、言語應對の間、更に隔壁を設けず、學生を呼て、常に Boys と云ひ、學生平素の所行に留意し、親しく寄宿舎を巡視し、學生勤學の状態を察して、其の黽勉を獎め、彼れ夙に日本學生の飲酒喫煙に耽くるとを好まず、着札早々にして、己の携へし、數打の葡萄酒壺を破棄し、先づ己の禁酒を宣言し、學生に摸範を示せり、噫乎何ぞ其行の壯快にして切實なるや。

彼は又學生を細密なる規矩準繩の下に、窘束するを好まず、終始法三章の主義を以て、學生を御し、殆ど規則なるものは、其當時之なかりしものと云ふべく、いかに彼が

學生の自由を貴ひ、其自修を重んじたるかは此等の事を以て知るべし。

周公曰平易近民必歸之、豈に獨り君主のみならずや、師弟の關係亦此言に漏れざるべし、クラークは、即ち自ら學生に師表たらんとし、又摸範たらんとしたる爲め、一舉一動平易を旨とし、服裝の如きも、至て質朴にして、靴は壞れ帽は汚れ、學生と撰ぶなきも平然として、更に意に介せず、學生を鼓して、冬は氷雪を蹴り、夏は暑熱を犯して郊外の馳騁を促がし、氣象を養ひ、士風を鍛ふに専らなり。

余輩は最早クラークの美行を頌する餘白を有せず、是に只彼が、在校の一日學生と相携へて、雪を踏で、札幌の巽位に聳ゆる手稻山に遊び、植物標本を得んとして、偶、珍奇の地衣、高く古梢に懸るを認め、自ら樹下に葡伏して、踏臺となり、學生を促して之に登らしむ、學生某乃ち靴を脱して、之に乗らんとしたるに、彼れ大に叱責して云く、曷ぞ斯の如く、遠慮するを須るんと、是に於て我年少の一學生は、米國の一偉人を土足もて踏み、地衣を取るとを得たりと云ふの一事、以て彼が性行の全豹を窺ふに足らんのみ、蓋し獨りクラークのみならず、職員相率て、徳を樹てたるを以て、學生靡然として之に懷き、今は結て我札幌農學校の好學風をなせり、余輩の平素得々として、



人に語るを喜ぶも、實に此學風にあり。

明治十年新入學生廿名を入れ、稍盛大に向へり、當時學生等は毎學年の終に於て、優等の成績を得ると共に、賞品を享け、無上の名譽としたり、賞與は現金一百二十八圓にして、之を各學課に分ち、一級の上席者常に其恩賞に浴したり、又農場に出で、實業をなす場合に、教師ブルツクスは勞働の報酬を知らしめざるべからずとして、勞働の時間に應じて、賃銀を與へたり、當時の教頭ホイラーが、黒田長官に宛たる報告によりて知るべきなり。

こゝに、又明治十一年に於て、特筆大書すべきとは、札幌農學校報告書なる、學生及職員の研究報告なりとす、是れブルツクスの主任にして、當時の北海道に未だ農業の思想發達せず、新移民の農事に暗きの時、此報告書を刊行し、幾千の利益を施したるかけ、今喋々の限にあらざ、該報告は第六七號迄發行し、故ありて中絶したるを遺憾とするのみ、然れども、當時の學生の事業として、賞するに足るを以て、今左に其發行主意書を載す。

札幌農學校の此報告を發兌するや、其意北海道の農家及百工を利せんと欲する

に在り、蓋し本校開業以來茲に二年の日月を經過すと雖ども、教育の結果は尙ほ更に二年の後に非ざれば之を見ると能はず、且其北海道農家を益するの事業に於ても、之を知るもの甚だ鮮なきが如し、故に今本校に於て講究する所にして、農業博物獸醫の諸科を首とし、凡そ民間に裨益あるの條件は、逐號之を採録し、或は之を外國新報より抄譯し、毎月之を刊行して、本道人民に公告し、以て其智識を開達するの一端と爲し、其本校との關係をして、倍、親密ならしめ、建校の舉、實に民益を謀るに出づるを知らしめんと欲すと云爾。

是より明治十二年十三年と豫科生徒順次入り來る者多く、遂に全員六十名に達せり、當時復た學課賞典の法も競争者多く一科目に就て、一等賞金五圓、二等賞金二圓五十錢の定めとなれり、中にも演説法にて最高の點數を得て、過分の賞與に當れる者あるは、一奇と云はざるを得ず、當時は外國教師なりし爲、其講義は凡て英語なるを以て學生の苦學は一方ならず、往々寢食を廢する者あり、斯くして相制して酒煙草を用ひず、偶之あれば相彈指して容れず、學風の清潔なる概ね斯の如し。

明治十三年に至り、開校の當初入學せる學生は所定の課業を卒へ、芽出度農學士の



第七節 札幌農學校過去時代の學生と其學風  
 學位を得て、社會に旅立てり、其數十三名是れ蓋し日本帝國に於ける農學士の嚆矢にして要するに斯かるとは、世人の記憶すべきとなるべく、我校の名譽たるは勿論亦卒業生諸子の名譽なり。  
 明治十三年以來卒業業者左表の如し

工學科	農學科	
	明治廿四年	明治十三年
七	一三	同十四
二	八	同十五
二	一五	同十六
二	七	同十七
一	二	同十八
三	一四	同十九
四	一五	同二十
一	一七	同廿一
一	六	同廿二
一	三九	同廿三
一	四	同廿四
一六	二九八	合計

明治二十年三月北海道廳令第八號を以て、札幌農學校々則を改定せられ從來の官費生を廢し、學業優等の者を撰びて、校費生となし、卒業後北海道廳の採用を受くる時は、滿四ヶ年間奉職し、八ヶ年間は其身分進退に就きては、道廳長官の認可を受くるととなりたり、之に次で明治廿二年、札幌農學校官制第一條及六條を改定し、農工

に關する、學術技藝を教授する外、更に生徒中より屯田兵士官志願のものを撰定し、軍事に關する、學術を教授する所とせられたりしが、進んで、九月更に兵學科を置かれ、農學科二ヶ年の課程を卒へたるものを抜て、兵學を授け、卒業の後屯田兵士官に採用せらるゝの制を設けたる爲め、學生の之に入るものありたり、是れ札幌農學校過去の學生に關する、主要の記録となす。

### 第八節 札幌農學校各科の小歴史

敢て各科と云ふ、吾人は我が札幌農學校には種々の分科を併置して、縱令其程度に於ては一様の列にあらずと雖も、隱然「ユニヴァーシティ」を形成せるが爲に爾かせらるゝ所なるを以て、更に之より他の低き程度にある所の、則ち呼て生徒となす所の、各科の歴史に就て、少しく其れ討ぬるあらんかな。

#### 第一、豫科

豫科は本科に入るの階梯にして、農學の蘊奥を極むるに於て、其素養をなすの必要



あるが爲め、豫め完全なる普通學を修めしむるを目的とす、故に人倫道德の要旨、國語、漢文、英語、歴史、地理、地文の諸學科より、數學、物理學、化學に至る迄、一切を授業す、其年期は五、六年にして、尋常中學以上の程度に準せしものなり。

今豫科の沿革を討ぬるに、全く我農學校の孩兒たる、芝増上寺内の假學校より一轉して、其札幌に移さるゝとともに、札幌學校と改稱し、更に札幌農學校として、専門農學を攻めしむるととなりたるが、依然普通學科を存置し、専門に入るの階梯となりたりき、是れ即ち豫科なり。

明治十二年、教師ペンハロー豫科主任となりたり、後教授大島正健、同主任となり、銳職務に勉勵し、大に擴張する處ありたり。

吾校出身者にして、往々英學に熟達せる原因、全く豫科に胚胎せしものにて、其事實は普通學を教授する豫科助教をして、教場に於ては、凡て英語を普通の川語たらしめ、又教科書には能ふ丈け原書を用ひしめんとしたるに在るなり。

明治廿五、六年の交に及び、北海道教育機關擴充の聲高く、札幌の地に尋常中學校の設立近からんとするに際會しけるを以て、本校豫科年限縮少の議あり、乃ち最下第

一年級を刪除し翌年に至りて復次級を刪除して、廿七年に及んで、更に一級を減じ、是に於て豫科は四年及五年の二級より組織せらるゝに至り、之を二級一級と改稱するととなりしが、明治廿九年を以て、文部省は豫科全廢の訓令を發し、是に於て豫科は一時全く消失せり。

元來豫科の一二級への入學者は、尋常中學卒業生又は之と同等以上の學力あるものにて、試験の上入學を許したるとなるが、今豫科の全廢に臨み尋常中學卒業生をして直に本科に進ませしむるに於ては、充分専門學を攻むるに於て遺憾あり加ふるに、又從來の出身者と學力に逕庭を生ぜざるや、一箇の問題にして、現校の職員諸子も、是に思ふる所あり、再三豫科設置の儀に付き、文部省に稟請する所ありしが、文部省も亦事情審査の末、更に明治三十一年五月を以て、札幌農學校豫科二學年を設置する旨の訓令を發せらるゝに至り、年の七月、直ちに一二學年を募集して、以來年々應募者の數を増加して、常に員に溢る。

## 第二、土木工學科

曩きに明治廿九年六月、本校校則改正の結果として、豫科と共に廢止の宣告を蒙り



たる工學科は、其餘廢として、翌三十年五月に於て、更に土木工學科なる簡易科を萌出せしめたり、蓋し農工相俟つにあらざれば、其實を全ふする能はざるの自然に出でしものなり。

該科は其名の示すが如く、土木工學に關する學理及技藝の一般を授くるものにして、修業年限を三ヶ年とす、明治三十二年五月其程度を高め、高等小學校(四學年)又は尋常中學校二學年と、同等程度以上にあらしめたり、貸費生なるもの、規定を設け、會社或は私人の委託によれる資金を貸與して以て學資の支辨に差支ふる者に脩學の道を開けり。

斯の如くにして、教養怠りなしと雖も、如何せん固と工學なるものは、深遠なる數理の上に立てられたるの科學なるを以て、職員諸氏も其餘りに低度なるが爲に、反て授業上に困難を來す少なからず、常に陽春曲高ふして俚耳に好らざるの憾ある久し、茲に明治三十四年八月程度を高め、尋常中學校卒業生にして、初めて入學するを得るに至らしめたり。

### 第三、森林科

札幌農學校

林業に關する教育を授けんの目的を以て、明治三十二年五月、此の設置を文部省に稟請して同年九月より實施せる一新分科なり、教授林學士新島善直をして此が主任者たらしむ、而して此科も土木工學科を伯仲にして、頗る簡易科たるを免れざりしが、共に昨三十四年八月を以て規則を改め、入學者は中學校卒業生同等以上たらしめたり、是より先き明治三十三年九月、給費生三十人を置くの規定を設け、北海道廳の給與金を受け、以て勉學の資となさしむ。

### 第四、農藝傳習科

明治廿年三月、教授佐藤昌介幹事に兼任し、校長の職務を代理するの時に當て、農藝傳習科なるものを設け、本道農家の子弟及本道に於て開墾起業の目的確實なる者を募集して、學資を給し、修學せしめたり、蓋し實地に付模範農業を習得せしめんか爲なり。

明治廿九年六月、本校々則の大改正は、本校に向て多大の打撃を與へたるものにして、僅に本科と此の農藝傳習科とのみ存立を全からしめたりしなり、而して陽暉は來復し來れり、明治三十二年三月、從來の農藝傳習科なる名稱を改めて、單に農藝科

札幌農學校



と稱せしめ、修業年限二ヶ年を三ヶ年に増加し以て中等教育を授くるの所とせり且つ冬期講習規程を廢止し、更に現業生規程を定めて本校農場に於て、實地に馬耕種藝、牧畜、農産製造の一科若くは數科を修業せしむ、翌三十三年三月、農藝科生徒農場實習規程を定めたり。

斯の如く設置以來連綿として墮ちず衰へず、明治二十二年三月第一期卒業生を出せし以來、十二期二百四十三人の多きに達し、海の内外に亘りて各其業に樂めり、嗚呼又壯なる哉。

第五、兵學科別課

兵學科を置き、農學科二年の課程を卒へたるものを拔て、之に充てたるは既に述べたる所なり、此を外にして明治二十二年十月、屯田兵曹長免官の者を入學せしめ、卒業期を一ヶ年として、普通農學及軍事學を教授せり、此れ則ち兵學科別課なり、而して同廿五年三月、現在生徒の卒業を以て終焉を告ぐ、今是等の各科に於ける卒業生を見んか。

科 目	明治廿一年	明治廿二年	明治廿三年	明治廿四年	明治廿五年	明治廿六年	明治廿七年	明治廿八年	明治廿九年	明治三十年	明治三十一年	明治三十二年	明治三十三年	合 計
農 學 科			四七	二四	二二	二二	一八	一六	一三	一九	二〇	二二	一七	一七
農 藝 科														
土 木 工 學 科														
修 修 科														
兵 學 科														
別 課 科														
合 計			四七	二四	二二	一八	一六	一三	一九	二〇	二二	一七	一七	二四三

吾人は完璧を望む、而も時に完璧を望むに違あらざる事をも知る、我札幌農學校が其時と處とに由りて緩急を辨じ、能く各方面に向て、人材を輩出せしめたるを感謝せざるべからざるなり。

第九節 札幌農學校創立廿五年紀念祝賀會

讀て此處に至るの士は既に記念せらるゝあるべし、八月十四日を、明治九年の其日を。

千と云ひ萬と云ふ、吾人は口之を唱へ筆之を識す、只に一言一點の勞のみ、等しく是れ數ふればなり、記號に過ぎざればなり、吾人は亦建國二千五百年と呼ぶ之を口に



する易々たるのみ、而も此間に興亡隆替せる歴史の跡を尋ねて能く明晰に能く完全に顯はし得べき人果して何處にかある、吾人は再び二千五百年の古に復りて、此を反復するの外に道なかるべきを知る、然り而して進歩は事物發展の常徑なりとせば、吾人は今更に復古を唱ふるの愚を爲さざるべし、而して幾多の迅雷風烈と健闘して、其位置其名譽當時の匹儔を抜くに至りし幸運の寵兒、若し顧みて同舟の士か波上波底に轉回するの状を見れば、轉た顯晦の情に堪へざる者あり、乃ち先きの同舟の士を憐むと同時に、自己今日の祝福を賀し、併せて坦々たる前途の計を講せずんばならず、是に於てか燭は裁られ、艦は飛ぶ。

明治五年芝山内に呱呱の聲を擧げたるの嬰兒は、全九年八月十四日、札幌農學校と改名してより以來、茲に五五の齡を得、吾人は之を遠く第十二世紀に於て其基を開きたるオックスフォード、ケンブリッジの諸大學に比し、又二百年祭を舉行せるエール大學に對し來らば、慙怍たるもの多し、而も之を忍んで吾人をして少しく我が小妹の阿嬌を語るの愚をなすを許せ、抑も東洋に國せる少なからずと雖も、夙に日新の文物を講究して終始一貫、愈々其精華を煥發せるもの之を我が日東帝國に

於て見る、而して又我が札幌農學校の此が貢獻せる多きを認めざんば、あらざるなり、且つ又我が札幌農學校が幾多の難苦と憤闘して、多年孤節を全ふせるの今日、基礎益々確固に位置益々高明に、霸を帝國に唱ふるに至りて、前途洋々春海の如し、此に於てか一片慰藉する所なからざるべからず、即ち本校創立廿五年紀念祭執行の議起る。

明治三十四年三月、札幌農學校創立廿五年紀念祝賀會は組織せられ、五月十四日を期して祭典舉行の議成る、高岡直吉を推して會頭とし、幹事には南鷹次郎、原十太、尾泉良太郎、赤羽雄一、朽内壬五郎を選定し、學生よりは星野勇三、早川萬一、佐藤政次郎、主任委員として此が補佐たらしめたり。

春は樹梢に催し、草野に下り、高山に延べり、萬象は宏快として、梢頭の嫩き手は血温に天に向て捧げ、野には百鳥和偕して、天樂を奏し、谿川水充ちて、少年の心溢るゝか如し、此の陽春の五月十四日は、實に是れ本會の開かるべきの日にして、從て亦札幌農學校の聲價を一層天下に重からしむべきの日なり。

正門には第一綠門あり、蓋し凱旋門にして、斯界に於ける凱旋者を迎へんとの意な



り、稻を以て星を圍繞し、校章に擬したるものを頂上に聳へしめ、正面には巾上に綿を以て祝創立廿五年と記せる扁額を掲げて、兩翼には星を中心として豫工林農の字を彫れば、是れ各科の徽章を顯はしたるなり。門の後面富國なる二大字あり、是れ隱に農學校の抱負を言明せるにあらざるか。非か、門を過て徑に沿て進む、徑側埒あり飾るに悉く綠葉を以てす。

演武場は當日の式場に宛てたる者にして、先づ入らんとして第二綠門あり、國旗風に搖曳す、大時計の周圍及屋廂を裝飾するに綠葉と電燈を以て、晝夜の觀あらんか爲なり、正面の中央に雜穀を以て書せる大額面を掲げられたり、Welcomeを鏤めたる階段を攀ちて上に綠門を出づれば、是れ實に式場なり、場の正面に演壇あり、黒天鵞絨上に白綿を以て祝賀の二字を後壁に見て、前の卓上に松竹の盆栽を据へ、白鶴高く上に舞ひ、靈龜靜に下に遊ぶ、四壁綠葉を挿み、櫻花を刻みて以て色彩を施し、頭上には國旗搖き花彩垂る、物皆祝意を表せざるなし、"Boys be ambitious"の語は故黒田故クラーク教頭の肖像と共に壁間に掲ぐ、若し此二人にして今此世にあらしめしならば、當日の主なる賓客たらんものを、十八期間に於ける卒業生の小肖は亦掛

けられたり、精を凝し慮を勞して配置至らざるなく、脩裝極らざるなし、さすがの宏潤なる式場も、爲に狹隘を覺へしむ。

北講堂は來賓の控所に供したるものにして、玄關には柱と云はず、天井と云はず、葉蔓を纏ひ棚を架して、時ならざる葡萄は果實累累として連り、室内各又滿裝せられにき、午前九時紀念式は舉行せられんとす、學生生徒及出身者先づ場に入り、次に佐藤校長の先導にて來賓は來れり、絶へざる奏樂は肅々として畏敬の念を起さしむ、席定まるや、囑囑の音は衆をして、君が代を嘯歌せしめたり、校長は恭しく勅語を奉讀せり、校長再び壇に上り、襟を正ふして、本校創立の當時より説き起して、現今に至る迄の變遷を陳べ、本校の特色は學徳并進の大主義を一貫するにありて、益奮勵學校の發達を謀り、社會を益せんを期すと説けり、滔々數百言、次て商議員森源三、教官總代博士宮部金吾を初め、其他内外人の祝辭祝電を陳ふ、終るに先ち學生生徒は校歌を合唱す、塵落ち戸障飛ばんの慨あり、勇壯にして而も清新なり、校長起て式を終る旨を告げ、奏樂の裡に紀念式は閉ぢられたり。

來賓及出身者は導かれて食堂に入る、堂は土木工學科生徒の建設せるものにして、



入るに縁門あり、内は生草を籍て茵床となし、四壁圍らすに紅白の幔幕を以てす、場の中央に山櫻數樹を植え、滿花正に開き、天幕の下に蜿蜒として垂吊せる緑の花彩と相映對せり、整然并列せる食卓の上、花卉盆栽を置き、又一層の雅趣あり、席既に斯美斯雅を鍾む、而して杯中盛るに札幌麥酒あり、懷中啜るに北海牛乳あり、他醉車上に臥す、誰か復た之を笑はん。

午後一時遊戯會は開催せられたり、蓋し遊戯會は本校と其運命を等ふするものにして、其初めて組織せられたるは今を距る二十有三年の昔にありて、本邦運動會なるもの、濫觴に屬す、毎春踰蕩の候を期し舉行せられて、實に幾多北海健兒の競技會たり、而して偶廿五年紀念祝賀會のあるに遇ひ、兩會合同して同日に行ひて、大に時間を制限し、例年の終日を減して半日にしたりしなり、場は既に衣香帽影に滿ち、嚙々として人波は打てり、號砲三發開會を報じ、勇壯なる奏樂と共に競技は始められぬ、競技の數は演じ盡されたり、而して最後の撰手競走は此時なり、觀者の手には汗を握れり、忽にして拍手は四方より起れり、場の南北より東西より、將た樓上より、而して遂に優勝旗は轟然迅走電の如きの一人に向て下れり、勝鬨は響せん許り

## 札幌農學校

## 札幌農學校

に起り、帽飛び手巾舞ふ、先きの電は場の中央に於て掌中の珠となりて、空中に投げ上げらるゝ、五回又八回、此時既に敵味方の偏意なし、況んや又彼我の別あらんや、一齊に當日の名譽の士として肥臆せらるゝなり。

遊戯會終を告ぐるや、黒衣白胸は招かれて豊平館に祝杯を舉ぐ、蓋し館は 陛下巡狩し賜ひし時、假りに行在所に充てたるものなり、日既に暮れ凱旋門を始め、演武場時計臺を飾れる電燈は皎々として光耀目を奪ひ、幾千の紅燈は長竿に倚りて、天空に聳へ、明宛然畫を欺けり、灯燈行列は將に行はれんとす、衆を排し人を避け隊を組み部を別ち、手に球燈を撐げ、樂隊を配し、祝ひに行進歌を唱て、整正として市中を廻る、一隊凡そ五百有餘名と稱せらる、廻り終りて隊を解く、時に午後十時、再び演武場に集合して、此處に夜會は開かれにき、赫奕たる燈光は燦爛たる裝飾と相映照し、樂鳴り興來り美觀快感亦言ふべからず。

紀念祭は既に完了せり、而も勝て兜の纓をべるは志士の夢寐且つ忽にせざる故、教授理學博士宮部金吾氏の祝詞に曰く。

明治三十四年、我札幌農學校創立二十五年に當る、歳の五月十四日をトし、紀念祝



賀の典を舉行せらる、金吾衆教官に代り一言祝意を表して曰く、農理農藝の進歩普及を圖り、開拓の事業を贊助し、人材の輩出を企望するは、本校の主旨にあらずや、金吾等孜孜事に茲に従ふ、而して歲月流るゝ如く、校齡五五の星霜を積み業を卒ふ者六百八十九名、而して有爲の士に乏しからず、金吾等上下の隆恩に報ゆる能はざるも、心竊かに慰藉する所なしとせず、夫れ萬頃を調すの雨は一點の雲より起り、河海に濺くの流は涓滴の水より生ずと、本校の國家に盡くす、尙ほ一點の雲涓滴の水に過ぎずと雖も、衆教官力を協せ阻勉止まざれば、他日萬頃の波となり、河海の流となり、國の發達を裨益する豈に難とせんや、而して本校設置の意始めて完と云ふべし、

貴賓の來臨を辱ふし、金吾等の所信を陳べ、敢て此目的を遂行せんことを誓ふ、茲に所感を記して祝詞に代ふ、

嗚呼常に此心ありて渝らず、以て廿五年の短日月、能く今日の進運を致し、益々規模を擴大せんとする所以、又以て近き將來に於て北海大學たらんの望ある所以にして、希くは北海道廳長官園田安賢男の、

羊蹄の山巍々として聳へ、石狩の水洋洋々として窮りなし、是れ豈に天の北海に與るに雄大の地氣を以てし、而して深高の學を養はしむるにあらざる歟、札幌農學校は初め明治五年開拓使假學校の名を以て起り、明治九年其面目を一新して札幌農學校と改めしより、于此二十有五年、朝旨夙に範を泰西に取り、師を海外に聘す、今や育英漸く成り、彬々たる偉才已に蔚興せり、而して其用特に北海開拓に止らざらんとす、況んや校運日に盛にして規模更に進む、其効果洵に測る可らざるものあり、蓋し學を養ふこと愈深く、徳を顯すこと益高くして、羊蹄の山石狩の水遂に其美を專にする能はざるなり、茲に本日を下して、本校創立廿五年紀念祝賀式を舉げらる、時方は清和に値ひ、韶光山川に充つ、嗚呼樂哉、乃ち以て祝す、

に副ふ所あるを得べし、



第三章 札幌農學校の現今

第一學期													第二學期													第三學期																										
第一學期													第二學期													第三學期																										
第一學期													第二學期													第三學期																										
農學總論	分析化學	植物營養論	土壤學	農具論	植物組織學	植物學實驗	植物學實驗	動物比較解剖學	動物學實驗	農藝物理學	英文學	國語	農業實習	肥料論	土地改良論	普通作物論	植物生理學	植物病理學	動物生理學	動物學實驗	昆蟲學	農用工業	農學	經濟學	法學	農業實習	肥料論	土地改良論	普通作物論	植物生理學	植物病理學	動物生理學	動物學實驗	昆蟲學	農用工業	農學	經濟學	法學	農業實習	肥料論	土地改良論	普通作物論	植物生理學	植物病理學	動物生理學	動物學實驗	昆蟲學	農用工業	農學	經濟學	法學	農業實習
二	六	四	一	一	三	四	四	三	四	一	三	三	不定	三	三	四	一	一	三	四	四	二	二	一	三	三	不定	三	三	四	一	一	三	四	四	二	二	一	三	三	不定											
二	六	四	一	一	三	四	四	三	四	一	三	三	不定	三	三	四	一	一	三	四	四	二	二	一	三	三	不定	三	三	四	一	一	三	四	四	二	二	一	三	三	不定											

六

第一節 校則 (摘要)

### 第三章 札幌農學校の現今

#### 第一節 校則 (摘要)

札幌農學校は文部省の直轄に屬し、農理、農藝及び拓殖に關する高等教育を授くる所とし、本科の外豫修科、土木工學科、森林科及び農藝科を設く。

#### 本科

修業年限は四ヶ年とし、之に入學することを得る者は、本校豫修科を卒業したる者とす。期定の學課を考究し其業を卒へたる者は、農學士と稱するを得。

本科の學年は九月十一日に始まり、翌年七月十日に終る、之を分て三學期となし、第一學期は九月十一日より十二月廿四日に至り、第二學期は一月八日より三月卅一日に至り、第三學期は四月八日より七月十日に至る、本科に於て修學すべき課程は左の如し。

六



札 幌 農 學 校

	第三年級			第四年級		
	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
特有作物論	三	三	三			
園藝論	五	三	三			
畜産學		三	三	畜産學	五	五
家畜生理學及衛生學	三	三	五	獸醫學大意	三	三
家畜飼養論		三	三	農産製造論	三	三
養蠶論		三	三	農政學	三	三
農藥經濟學	四	三	四	卒業論文	三	三
殖民論	三					
森林學大意		三	三	農學實科演習	不定	不定
水産學大意	三			農業經濟學演習	不定	不定
細菌學	三			農藝化學實驗	不定	不定
農學實科演習	不定	不定	不定	農用動物學實驗	不定	不定
農業經濟學演習	不定	不定	不定			
農藝化學實驗	不定	不定	不定			

札 幌 農 學 校

卒業論文 卒業論文は學生が各自専攻せる學科に就き、其研究の結果を論述するものにして、論題は第三學年の終り迄に撰定し、主管教官の指導の下に其研究に従ふものとす、卒業論文の採否は教官會議に於て之を決し、若し否定せられたる時は卒業を延期せしむべし。

實科 實科は第二年級の課程を修得したる學生に課するものにして、其課目は學生各自に之を撰擇せしめ、第三及び第四學年の午後の時間を以て之に充つ、現今は其課目を別つて左の六科となす。

- 一 農學、甲科、
  - 種子學、農業簿記學、農場實習、農産製造實習、手工實習、園藝論、特用作物論、農場管理、
- 一 農學、乙科、
  - 畜産製造實習、畜舎實習、家畜解剖學及生理學演習、家畜衛生學演習、



第一節 校則(摘要)

七

蹄鐵學演習、家畜解剖學實習、病論大意演習、農場實習、

一 農業經濟學

應用經濟學、日本農史、田制、農業統計學、農業評價學、殖民制度、農法、

一 農藝化學

單純化合物、肥料、土壤、動物飼料等の定量分析及實地研究、

一 農用動物學、昆蟲學及養蠶學實習、

一 植物病理學、寄生菌學及無機原因より起る植物病理學實習、並に實地研究、

校費生及び特待生 學生中、學業優等品行端正なる者を選び、校費生又は特待生と

なす。

校費生は十二人を以て定員とし、授業料を免し、學費として月額金七圓を給與す

るものとす、卒業後滿五ヶ年間其身分進退に關しては、校長の許可を受くべき者

とす、特待生は十五人を以て定員となし、一學年間授業料を免するものとす、

校費生及び特待生は毎學年末に於て、教官會議を経て、校長之を定む。

研究生 研究生は本科卒業生にして、既修の一學科を更に攻究せんと欲するもの

の爲めに設けられ、主管教官之が指導教育の任に當り、其攻究期限は二ヶ年以内とす、學費は自辨に屬し、授業料は免除す。  
授業料 本科授業料は一學年金二拾圓にして、之を三分し、毎學期の始めに納むるものとす。

豫修科

豫修科は本科の學科を修むるに必要な普通學科を授くる所にして、其修業年限を二ヶ年とす、之に入學することを得るものは

(一) 中學校を卒業したるもの

(二) 第一號の志願者定員に満たさるときは之と同等の學力を有し品行方正、年齢十七歳以上にして入學試験に合格したるもの

(三) 第一號志願者定員を超過するときは漢文、英語、數學の特別試験に合格したるもの

學年及び學期は本科に同じ。

特待生 豫修科生徒中、學業優等品行方正なる者を選び、特待生とし、十人を以て定



第一節 校則 (摘要)

員とす、其細規に至つては本科特待生と異るとなし。  
 授業料 一學年金十二圓にして、之を三分し毎學期の始めに納むるものとす。  
 豫修科に於て修學すべき課程は左の如し。

學科	第一級	第二級
倫理	人倫道德の要旨	同上
國語及漢文	講讀、文法、作文	同上
英語	講讀、翻譯、文法、作文	同上
獨語	講讀、翻譯、文法、作文	同上
歴史	近世史	同上
數學	代數三角法	方程式論、解析幾何
測量學		平面及高低測量實測圖
動物學		普通動物學
植物學		顯花植物學及分類學
礦物學及地質學		礦物學及地質學
物理學	力學、物性論、音響學、熱學	光學、電氣學、磁氣學

土木工學科

土木工學科は、土木工學に關する教育を授け、修業年限を三ヶ年とす、之に入學する  
 とを得るものは、豫修科に同じきものとす。

學年及び學期は本科に同じ。

授業料 一學年金十五圓にして之を三分し毎學年の始めに納むるものとす。

特待生 土木工學科生徒中、學業優等品行方正なるものを撰び特待生となし、十二  
 人を以て定員とす、而して其待遇は豫修科に同じ。

貸費生 土木工學科生徒中、學業優等品行方正にして、學費支辨の途なきものを貸  
 費生となすことあるべし、貸費額は一學年金八十四圓已内とす、資金は會社又は  
 一私人の委託に應じたる金額を以て之に充つ、貸費生は其貸費者の示命に従ひ、  
 貸費を受けたる年數に均き期限内某事業に従事すべく、又卒業後其貸費を受け

化學	學	體操
無機化學	有機化學	
自在講、用器講		
兵式體操		



















研究生

本科卒業にして、既修の一學科を更に攻究せんと欲するものは、攻究の學科を選定し、校長の認可を受け、二ヶ年以内を限りて、研究生たるを得、而して研究生は學費を自辨し、且つ毎學年の終に於て攻究したる事項を主管教官の手を経て校長に報告するものとす。

現業生

本校農場に於て實地に馬耕、種藝、牧畜及び農産製造等を修得せんと欲し、品行方正、年齢十八歳以上にして六ヶ月以上修業の見込ある者は、現業生として之を許す事あるべし。

製	製	製	製	製
藍	粉	麵	麵	味
造	製	造	造	噌
法	造	法	法	油、
	法	法	法	酢
	法	法	法	製
	法	法	法	造
	法	法	法	法

第二節 商議委員、職員及學生々徒

商議委員會

商議委員は北海道廳高等官二名及び實業上經歷あるもの三名以上七名以下を以て之に充つ、商議委員會は本校の學科課程重要な諸規則其他學校長に於て必要と認むる事項を審議する爲め又文部大臣の諮問に對し意見を陳述する爲めに設く

商議委員

- 北海道廳事務官 武井才次郎
- 北海道廳事務官 高岡直吉
- 貴族院議員正四位 湯地定基
- 從六位 森源三
- 札幌區長 對馬嘉三郎

職員



學校長

農學博士農學士 佐藤昌介

教授

ドクトル、オフ、フロンツィー(米國デヨンス、ホツプキンス大學)

經濟原論、農業經濟學、農政學、殖民史、農史 農學博士農學士 佐藤昌介

ドクトル、オフ、サイエンス(米國ハーバード大學)

植物學、植物病理學 理學博士農學士 宮部金吾

農學、園藝學 農學博士農學士 南 鷹次郎

農藝化學、化學 農藝化學士 吉井豐造

動物學、地質學 理學士 原 十太

農學 農學士 尾泉良太郎

數學、物理學 工學士 平野他喜松

畜産學、細菌學 農學士 橋本左五郎

森林學、昆蟲學 林學士 新島善直

シビル、エンジニア(獨逸國スツットガルト工科大学)

土木工學 工學士 川江秀雄

土木工學 北海道廳技師工學士 内田富吉

助教授

農藝化學、化學 北海道廳技師農學士 神田勝亥

農政學 農學士(獨逸國留學中) 高岡熊雄

農學 田中芳四郎

養蠶學、英語 農學士 鈴木武良

農學、農藝物理學 農學士(獨逸國留學中) 須田金之助

植物學、植物病理學、動物學 農學士 時任一彦

農藝化學 農學士(米國及獨逸留學中) 山田玄太郎

昆蟲學 農學士(獨逸國留學中) 大島金太郎

經濟學、農業經濟學、近世史、獨逸語 農學士 松村松年

經濟學、農業經濟學、近世史、獨逸語 農學士 伊藤清藏



第二節 商議委員職員及學生々徒

公

數學

小々高 文三郎

畜産學、英語

農學士 長嶺林三郎

農學

農學士 星野勇三

漢文

進 龍男

農學

石川 金平

獸醫學、畜産學

上田半二郎

動物學

村田莊次郎

講 師

土木工學

休職北海道廳技師工學士 岡崎 文吉

土木工學

休職北海道廳技師工學士 坂岡末太郎

森林學

御料局技師林學士 佐々木和策

土木工學

北海道廳技師工學士 鵜飼 賢一

バチエロル、オフ、フヒロソフイ、バチエロル、オフ、セクレッド  
セオロヂー(米國デポ一大學)

バチエロル、オフ、アーツ(米國マオント、ユニオン、カレッジ)  
ドクトル、オフ、フヒロソフイ(米國ホストン大學)

英文學

獨逸語

書學

森林學

農學

授業囑託

兵式體操

陸軍歩兵中尉 山本 鶴一

兵式體操

陸軍歩兵特務曹長 吉田 郡治

劍術指南

北海道廳屬 津田 竹馬

教務部長

教授理學博士農學士 宮部 金吾



第二節 商職委員職員學生々徒

舍監部長

教授農學博士農學士

南 鷹次郎

農事部長

教授農學博士農學士

南 鷹次郎

圖書館長

教授理學士

原 十太

博物館長

教授理學士

原 十太

植物園長

教授理學博士農學士

宮部 金吾

研究生三人

(明治三十四年十月調)

本科學生四十六人

第三年級四人  
第二年級九人  
第一年級三十三人

豫修科生徒七十九人

第二年級三十二人  
第一年級四十七人

計三百三人

土木工學科生徒四十九人

第三年級十二人  
第二年級十七人  
第一年級二十七人

森林科生徒三十三人

第三年級四人  
第二年級二十四人  
第一年級二十四人

農藝科生徒九十四人

第三年級十五人  
第二年級二十七人  
第一年級五十二人

第三節 校堂

校堂は中央講堂、北講堂、南講堂よりなる。中央講堂の樓上は演武場、森林科第三年級教室及び植物病理學實驗室に、樓下は植物學教室、動物學教室、農學教室、植物標品室、農具及び種子標品室、教授室に充て、北講堂の樓上は土木工學科教室、製圖室に、樓下は動物學實驗室、物理學器械室、農業經濟學演習室、豫修科教室、森林科教室及び教官室に充て、南講堂の樓上を農藝化學教室、農藝化學研究室、藥品及び器械室、教授室に、樓下を學生化學實驗室、農藝化學專修生實習室、蒸溜室、秤量室に充つ、其他農藝科教室、畜産學實驗室及び昆蟲學實驗室は札幌農學校農事部と軒を并べて第一農場に建てり、然れども各年を閱すると多く、漸く舊來の觀を抹却せんとす



今や新に地を清閑の境にトして以來、茲に三星霜工既に成るもの左の如し  
農學教室

農學講義室、同實驗室、農藝物理學講義室、同實驗室、標本室、教授室、助教室、廣間、其  
他以上階上園藝學講義室、同實驗室、同標本室、畜産學講義室、同實驗室、同標本室、細  
菌學實驗室、バランス室、教授室、助教室、廣間、其他以上階下及び作物試驗玻璃室、  
園藝學附屬温室、  
生物學教室

植物學實驗室、同特別實驗室、動物學實驗室、同特別實驗室、細菌培養室、圖書室、教授  
控室以上階上植物學講義室、同標本室、同燭葉室、動物學講義室、同標本室、用意室、助  
教授室(以上階下)  
養蠶及び昆蟲學教室

養蠶實驗室、同特別實驗室、昆蟲學實驗室、同標本室、講義室、教授室、助教室及其他、  
農業經濟學教室  
講義室、農業經濟學演習室、農政學演習室、普通教室、教官會議室、教授室、助教室及

其他

而して未だ完成せざるもの左の如し

理化學教室

化學講義室、同實驗室、同標本室、バランス室、顯微鏡室、特別研究室、脂肪及土壤定量  
室、蒸溜室、用意室、農藝化學及び地質學講義室、同標本室、暗室、病理機械室、同講義室、  
教授室、助教室及び其他

大講堂

圖書館

普通學教室

寄宿舎

種子標本室

本道所産のものは勿論遠く歐米より蒐集したるもの亦尠ならず其數合せて二  
千五百餘種に及ぶ

植物標本室



本室は専ら本道所産植物の標品を蒐集保存し、以て教授上の参考及び本道植物調査の料に供す。本校植物學主任教官多年採集に従事し、現に貯藏する標品數は貳萬二千五百三十點(明治三十四年九月末日調)にして、主任教官の貯藏標品を合する時は、其數四萬とす、殊に隱花植物の標品に富む。

#### 昆蟲標本室

本室も亦植物標本室の如く、専ら本邦産及び本道の昆蟲類を蒐集し、教授上の参考は勿論、本道昆蟲調査の料とす、其得たる標本は實に一萬七千八百點(明治三十四年九月末日調)に至る。

#### 解剖室

本室は本科學生及び農藝傳習科生徒をして、家畜の解剖及び治療法を實習せしむる所とす、室内を二區に分ち、一を解剖室、一を生理學及び動物學教授用の材料を藏置する所とす。

#### 圖書館

圖書館を分ちて書庫、閱覽室、事務室の三區となす、現今所藏の圖書は、和漢洋、合計壹

萬九千九百四十九冊並に圖類七百〇九十八枚あり、明治三十四年九月末日調)又毎年購入と寄贈等に由り、内外より得る圖書其數少なしとせず、閱覽室は常に辭書、百般科學書の類を備へ、且つ博く内外の新聞雜誌を集め、學生の攷究に資す。

#### 博物館

本館は本道所産の動植礦物、及本道アイヌ人の製造に關する、各種の諸器物を蒐集し、以て學生研究上の用に供するを目的とすれども、又本道物産の概況を窺知せしめんが爲めに、日時を限りて衆庶の縦覽を許せり、現今貯藏標本數を合計するときは一萬一千七百八十八點(三十四年九月末日調)なり、之れを大別して天産部、勸業部、史傳部及圖書寫眞の四門とす、然れども館内稍々狹隘なるを以て新たに事務所を建て館内の庶務を管理す、本館は札幌市中最も幽邃閑雅の位置を占むる、植物園内にあるを以て盛夏の候、衆庶競ふて縦覽す、今、昨三十四年四月二十八日より九月三十日に至る參觀人數を擧ぐれば、實に三萬〇百四十七人の多きに至る、又以て本道唯一の大公園たるを證するに足るなり。

本園は札幌區北二條より北五條に跨り、西八丁目より西十一丁目に至り、其面積三



萬四千八百二坪餘を有す、本園は専ら本道所産の植物及内外の種類を汎く蒐集栽培し、其分類所屬を明にし、植物學實地教授用並に研究の料に供するのみならず、本道の風土に對する適否を試験し、以て本道の園藝、又は造林上に裨益せんとするにあり、園内を自然分科園、樹木園、灌木園、試験園及び温室附屬の五區に分割す。温室は専ら暖國産の植物を培養し、冬期間植物學研究の材料に供し、又植物生理の實驗場となす、而して亦衆庶の縦覽を許すか故に、杖を園に曳くもの必ず此處に至る、殊に嚴冬の候に際し、一度之を訪はんか、唯々皚々たる北海の天地を忘れ、恰も駘蕩微薰の春風に弄ばるゝが如し。現今本園内に蒐集培養する植物の種類は、内外の産を合計し、大凡二千有餘種なりとす。

### 農場

本校の農場は之を八個所に區畫す、而して其の第一農場(札幌にあり)は専ら學生生徒の實習並に各種の試験場に充つ、第二農場(札幌にあり)は歐米の農業法に則り、牧畜耕作の業を専らとし、北海道に於ける大農の適否如何を極め、以て本道農界の模

範となせり、第三(札幌郡札幌村字レツレツにあり)第四(札幌郡平岸村字ミンマツにあり)第五(夕張郡角田村字ウエンベツにあり)第六(夕張郡登川村字アノロにあり)第七(龜田郡大中山村にあり)第八(空知郡字フラス)農場は、専ら本校土地貸下規程により、小作農場となすを以て目的とせり。

第一農場は、本校學生生徒の演習場となすを以て之を分つて十一區となす。

(一)水田 水田は普通及試験の二とし、試験田は種類、肥料、距離、本數、直播、移植、季節等を試験するに供し、普通田は學生生徒をして實地耕作法を演習せしむる所とす。

(二)試験園 試験園は穀菽、蔬菜等を栽培し、各種の試験を行ひ、其結果を公にし、以て本道農業の進歩を計るを期す。

(三)特有作物園 特有作物園は大麻、亞麻、苧麻、苧麻、甜菜、薯蕷等の耕作に關する、試験を行ふ所とす。

(四)蔬菜園 蔬菜園は主として蔬菜類を栽培し、傍ら穀菽類を播種し、専ら農藝傳習科生徒をして之れが栽培に従事せしめ、小農的栽培を練習し、且つ播種の方法を併習せしむる所とす。



- (五) 生徒試作園 生徒試作園は耕地五町歩を區畫し、農藝科第二年生及び第三年生をして之を擔當せしめ、耕作收納の方法より收支の決算に至るまで、該生徒をして之を掌らしめ、農場經營上の方法を實地に練習し、他日就業の地を爲す所とす。
- (六) 果樹園 果樹園は本道に適する各種の果樹類を栽培し、學生々徒に之れが栽培蕃殖の方法を實習し、且つ各種の試験を行ひ、其結果を公にし、以て北海道果樹栽培業の發達進歩を計るを期す。
- (七) 牧草試作園 牧草試作園は、内外各種の牧草を栽培し、而して其適否收量等を實驗するにあり。
- (八) 作物標本園 作物標本園は、本道普通の作物を栽培し、學生生徒をして之が性質及び栽培の方法を實習せしむ。
- (九) 普通耕作園 普通耕作園は、本道普通の作物を栽培し、學生生徒をして其栽培收穫の方法及び馬力農具等の運用を練習せしむる所とす。
- (十) 普通牧草地 普通牧草地は、家畜の飼料に供する乾草を收むるを以て目的とす。
- (十一) 放牧地 放牧地は、夏期牛馬及綿羊を牧養し、而して其放牧方法を學生生徒に實

せしむる所とす。

### 演習林

本林は學生及び森林科生徒實地演習の爲めに置かれたるものにして、本校基本林に屬す分ちて二となす。

第一は石狩國雨龍郡にあり、深川村を去る北方十七里雨龍河に沿ひ、全積三分の一は蝦夷松を始め針葉樹にして、他は種々の闊葉樹なり。

第二は天鹽國中川郡界より天鹽川に沿ふてトイカンベツに至るの地にして、クンネリと稱する俗稱天鹽松の純林多く、本林は本年夏季より、諸般の事業に着手するものなり。

### 寄宿舍

中央講堂の南方に寄宿舍あり、學生五十人を入舎定員とす、規模狹隘にして學生全員を容るゝに足らずと雖も、二十有餘の室の外に縦覽室及び復習講堂あり、前者は日本風に疊を敷き十數種の新聞雜誌を備へ、舍生縦覽の便に供し、後者は食堂の階上に在り、南方に演壇を設く之れを開識社、史學會、英學協會の例會場となす、自治制



の下にある舎生は流石に先進の餘風を享けて、風氣肅自ら持する頗る嚴一同の決議せる廿二項より成るの規約あり、此規約を執行せんが爲めに委員長外三名の委員を置く。

第四節 學生と四季

讀者は知らん、吾か札幌農學校は、由來其の學風の卓逸にして、校規肅然其間に横はり、教官の薰陶、學生の自治、他校の得て摸すべからざるの英風は、嚴然として存するあるを。然り是れ同校の全國に錚々たる所以にして、時に或は世潮澎湃として襲ふも、時魔悍然として侵すも、決して撓まざるなり、靡せざるなり。寧ろ益々其の美粹を練磨し、漸々として之を發揮せり。曾て東都芝公園の下、僅に双葉を擧げし嫩芽、今や根柢深く石狩原野の中央を占め、蓓蕾一綻、燦然たる抱星の櫻花は、其の梢上に咲ひて、正に學生の羅針盤を以て任ずるに非ずや。讀者若し津輕海峡を渡り、歩を石狩の地に枉げんか、夫のリボン巻篇圓形の校帽に、其花章を附し、黒羅紗の立襟、脊廣に同色の洋袴を穿ち、沈實寡言朴然として、札幌市街を逍遙するの人士、實に此校の

學生なり。知らずや、其の炯々たる眼一と度之を注かば、能く紛亂錯雜の條理を正たし、其の一文字に結ひたる口一と度之を開けば、演壇上光彩を添ふるを。況んや故山の月を捨て、郷里の父母を辭し、笈を遠く北海孤島の野に負ひ、堅氷と闘ひ、坦然書を懷にして、兀々として學ぶに於ては、已に堅腸剛膽犯すべからざるの概あり。此を夫の遊惰三昧學資を貪り、華美を競ひ、義務的學業を取るものと孰れ。今や校生百七十有餘名、彼等此校にありて、四時生活の狀や如何、其の特性や如何、是れ余輩の主として讀者に報道せんと欲する所なり。

**春** 協風正に至り、農祥晨に中し、皚雪今焉くにかある。唯見る豊平河流漸漫々とし、赤楊樹白玉を鑲め、臨眺山邊烟霞、蝶躐として、側金盞花春信を傳へり。正に是れ四月の候、風和き日暄に、茫々たる石狩の平原は、其の面目を一新して、牧草の翠漸く加はり、宛轉として空枝に轉るの小禽、撲爾として地上に爬ふ幼蟲、皆以て半歲蟄居の鬱屈を洩し、見る者として活如たらざるはなし。

此時に當り吾等か學生は、時正に第二期定期試験を終て、春季休業に遇するなり。此



休暇や日數僅に七、倏然忽ち逝くと雖も、十有餘旬北風を耳にし、浙瀝たる氷雪の裡に紅爐を圍みて苦吟せし青年の、如何に滿腔の快絶を以て之を迎ふや。見よ彼等は參々伍々袂を連ねて郊外に鬱を遣れり、或は採集器を負ひて逸早く新生の植物を獲んとするもの、或は玻璃壺を提げて小樽港面に魚介の採集を試みるもの、或は泉水涓々たる定山の溪、熱湯沸々たる登別の山、實に彼等の雄神を遣り精氣を鍛ふる好地たらざるはなし。況んや農場土柔かにして耕耘播種の期已に來れるをや。實習の學生等か相携て此に赴く、見渡せば園圃涯りなき第一農園、馬嘶牛吠微かに聞ゆるの處、一群の青年馬を督して耕耘するあり。サルキープラウ先つ進みて沃土波浪の如く起り、幾百の壟條忽然として成り、ハロー乃ち進む、馬蹄縱横土塊此に於てか壟碎して粉の如く飛ぶ。播種機之れに次ぎ其の兩輪を回轉して進み、粒を量り時を定めて下種するや、秩々として天巧を奪ふ。蓋し此等農具機械は、札幌農學校創立以來夙に米國に需めて北海農民に其模範を示すものなり。已にして五月、春色治く華意此に發し、辛夷先つ綻んで櫻之に次ぎ、梅桃、杏、梨、相繼て競咲し、紅なるもの、黄なるもの、或は紫、或は白、或は橙黄、或は淡紅、杏として雲の如く、苑として霞の如し、

吾校有名なる遊戯會は此時を期して開かる。斯の會や其の源を明治十一年に起し、遊戯の趣向會費の周旋、戲場の整理、裝飾、役員悉く學生生徒の任する所にして、彼等の想を凝らす者此時にあり。由來十數星霜、今尚ほ連綿として盛大を致せり。余會て之を見る、時恰かも五月十八日、場は校の後庭にあり、競走場裏約四百ヤード、西に門あり題して遊戯會と云ふ、綠門を入りて左に來賓席あり、右に來觀席あり、授賞席其間に介在して、喫茶店其北隅に設けらる、而して戲場を隔て、學生扣場及び諸學校生徒席あり、審判席は決勝線の下にありて音楽隊席其傍にあり、今や自鳴鐘八點を告げて開會の國旗は高く演武樓上、大時計の頂上に掲げられぬ。唯だ見る白紫の幔幕は浪の如く四面を覆ふの處、長旌細旗紅紫を醜えし、風鳥の天に舞ふが如く、金龍の地に躍るが如く、壯絶麗絶謂ん方なし。札幌市人の呼んで旗祭りとなすもの故あるかな、已にして開技の警鐘は鏘々として響けり、十數名の輕装せし青年は整然として起點に立てり、雲霞の如き來觀人、花の如き紳士貴婦人、一齊に其の舉動を注視して、合圖者は銃を肩にして此に赴く。吁此瞬間如何に競技者の胸を鼓せしめ、其の腕を扼せしむるや、審判官は冷然たり、四隣は沈々たり、注意一介



驀然合圖者の空砲響くや、忽ちにして疾風一陣地を捲くが如く、競技者は身を躍らして進む。先んずる者、後るもの、疾走又疾走、健脚飛ぶが如く、双腿猶ほ撓まず、須臾にして一人あり、流星の如く身を挺して躍然決勝線に入るや、雌雄此に決し、喝采の聲、拍手の音、此に於てか起り、殷々天地を震動して、萬雷の轟くが如く、音楽隊は洋々として凱歌を唱へ、燦爛たる金牌は優勝者の胸に輝く、正に之れ一颯の驟雨治まり、皎々たる明月天空に懸るが如しと謂んや、何んとなれば、彼等の此競場に出る筈に、一夕の練習にあらざるなり、風霜月夜、勉めて其の健脚を鍛え、其の呼吸を練り、經營辛苦到らざるなきなり。今や賞を佩びて、扣場に還る、其の快果して幾干ぞや。是れ四百ヤード電奔の景況なりとす。殊に其の競走技中、撰手競走、半英里及び一英里競走の如きは、皆以て壯絶の遊戯と云ふべく、撰手競走は月桂冠及び婦人財囊の賞ある所、優勝者の腕を振ふ此時に、あるべく、各學校撰手競走は、彼等同窓をして狂起せしめ、半英里及び一英里の競走の如きは、農校獨得の技と謂ふべく、特に同窓會及び時事新報社等より賞を寄する所なりとす。

技中最も快哉を叫ばしむるを、障害物、棒高飛、薯拾、牧草負等の遊戯にして、甲は一躍

校 學 農 幌 札

疾走するや、張繩あり、高架あり、袋あり、網あり、輪あり、此を以て彼等は電光の如く飛び、魚の如く潜り、脱兎の如く走り、蝸牛の如く匍し、躓く者倒るもの、千態萬狀得て形容すべからざるの奇觀を呈し、乙は一竿を肩にし、身を翻して能く一丈數尺の高を飛び、觀者をして手に汗を握らしめ、薯拾、牧草負の如きは、農事者適當の遊戯と謂んか、殊に後者は疾走コースを拾ひ、草鞋を穿ち、轉回して牧草の束を擔ひて行く、農藝科生徒の尤も其妙を示すものとす。

校 學 農 幌 札

其最も喧騒を極むるものは、各科撰手競争なり、三百の野次馬は各紅、白、青と呼んで、其撰手を勵ます聲援の盛んなる天地爲めに碎けむとす、既にして號砲鳴る一群の先に立ちて、場内を廻るものは、即ち優勝旗を肩にしたる當年のナポレオンなりとす。

其諧謔に富むは、提燈競走、菓子喰競走、及び來賓の二百ヤード電奔にして、後者は尤も抱腹、其狀を記すれば、斑白の老人あり、元頭の紳士あり、美髯嚴かめしき軍人あり、赤髮碧眼の洋人あり、或は骨立竹の如き、法官、便腹布袋の如き、豪商、何れも紅襟綠袴の遊戯服を纏ひて、先を争ひて疾走す、宛然之れボンチの活畫、夫人處女は袖を掩て



笑ひを忍び、童兒は打手して高笑し、四隣哄然、雌雄決するや、其の賞も亦た奇、幣木を携て來たる者、磨鉢を負ひて歸るもの、亦た一場の奇觀とす。此技や特に來賓諸士のため設くる所にして、諸士も亦此日を期して樂むものなり。

其他餘興の如きは、來觀人、半英里競走、竹登、機械、躰操、ベイスボール、幼童競走等ありて、喫茶店の優勝者景物の如きも、頗る愛嬌中の一なり。

此會は、實に學生獨立の組織にして、此盛會を舉ぐ是れ同校の一種特絶なる校風の致す處にして、獨り同校の遊戯會に止まらず、廣く札幌市人の祭日として見るべきものなり、宜なる哉、其の寄附物品の豊富なる、贊助金員の饒多なる、全國稀に見る所なり。

之を要するに、北海の春は、百事活動の時機にして、北海青年の鬱勃たる元氣、此に見るべく、能く半歳の屈を伸して、沈實なる青年をして、火の如く躍如たらしむ、今や彼等此回復せし元氣を以て如何に盛夏を迎ふるや、乞ふ次章を見よ。

## 夏

紅紫褪め、雨濛々として、牧草延びて數寸、正に是れ花落江隄、簇暖烟、雨餘草色遠

相連なるもの、加ふるに、白苜蓿の花、街路田園到る處に簇生し、瓊を散し、翠を延べ、石狩の平原恍として、大彩畫を敷けるが如し。

此は之れ、籐布の徑路、蜿々蛇の如く、豊平の清流は、嘈蕪として、白布斜めに樹林の間に隱見し、仰けば、紅躑躅、蝦夷松、紅綠相間りて、岩角を點綴し、山鳩之に鳴き、俯せば、山脚深く陥りて、溪水潺湲たり、一群の青年あり、輕裝短褐、採集器斜めに肩を擁し、縱横奔走して、密林の裡に入るを見る、問はずして、是れ吾が校の植物修學旅行なるを知る。夫の原人時代の風物、厚朴高く立つて、凝露風と共に散じ、菩提樹横に走りて、藤纏毬之に拉し、幾百の苔類は、岩石を彩し、藻類は水面に參差たり、奇草珍花、宛ながら其の採集を待つに似たり。此に於てか、彼等は、奮然勇進、岩に攀ち、蔓に拉し、未知未見の草木を採集して、欣々として、旅宿に還る。師が喜んで之を迎へ、具さに其の種屬を辨別して、諄々として、教授す。天然の美、宇宙の妙、欣懷何んぞ耐へん、況んや夜深ふして、膳に上り、或は月下微妙の音曲を一笛に寄するもの、或は西詩を幽溪に沈吟するもの、神澄み氣伸ひて、晝間の疲れを忘る。



此間近きは忍路海岸に遠きは噴火灣に動物學修學旅行あり、夕張方面には地質學の修學旅行あり、漫々たる水面一艇を浮べて海中の奇觀を探る亦快なるべく、激流奔湍噴珠迸しるの神居古潭、漆黒の如き岩石を叩て地球の變遷を語る亦趣あるべく、要するに修學旅行の目的に於て、其趣く所一ならずと雖も、研究の未だ及ばざるものを探るに至ては、特に趣味津津々として生じ、進んで止る所を知らず。今や吾學生は遊戯會に積鬱を散し、修學旅行に心神を洗ひ、一轉して其得たる者を精注せしむべき奮勉多忙の時に遭遇せり、何んぞや、修業大試験之なり。其の勵精の狀況、普く讀者の知る處、余輩必ずしも之を記さず、唯特に一言を要する者は、其自主的精神にあり、彼等の多くは獨立獨行、夫の普通に見るか如き捕盜探緝の愚を學ばず、其の勉學をなすや、各々規矩あり順序あり、此を以て不合格者常に少數にして、而して身神亦健全綽々として餘裕あり、之れ此校教育の法其の宜しきを得、體育の獎勵與つて力ある所なりと雖も、亦以て學生の自治的精神に因らすんばあらず。此に於て余輩は勵聲一番、内地忙殺に苦しむの青年に此地に遊學するを勸めずんばあらず。墨堤爛熳の花、嵐山春宵の月、美且つ艶なり、然りと雖も我が漫々たる大平野に、

皎潔の風月を侶とし、滿腔の抱負を放つて宇宙の大觀を察する者と孰れ、彼の校舍巍然白聖玉を欺く、宏且つ壯なり、然りと雖も、彼の顔色青白、呼吸切迫、只管パチルスに苦しめらるるにあらざや、此の強壯勇健、元氣勃勃、平然として艱難に耐ふるものと孰れ。由來大鯨は江湖に産せず、活學は死體に宿らず、世の學生豈に顧みる所なるべけんや。

警枕刺股、勉學の苦夢の如くに去り、成績表は校内に掲示され、一年の及落爰に判して學生は新年を迎ふる者の如く、日ならずして卒業式は演武場に擧げらる。場は農學校創立以來の式場なり、證書を授くるの人、其の式場に列するの人、皆曾て紅顔花を翳して之を受けたる者、旋り又巡りて今や此場に後進の兄弟を迎ふ、豈に今昔の感なからんや。中央の大卓朱甌燃えんとし、松竹の翠婆娑として舞ふ、庭前幾千年の大榆樹は亦た蒼翳として窓に映して此を壽くか如し、北海道長官は臨席せり、文武高等官は來れり、須臾にして校長立て卒業の式を擧ぐるを告ぐ、主任教授は進みて校務の報告をなし、卒業論文の批評を始む、公明正大苟も假借せず、評終りて校長卒業證書を授與す。此の一瞬時如何に卒業諸士の沈着なる胸を動かさしむるや、回顧



すれば、曉色漸く動き、四隣寂莫として、残月梢端に懸り、蟲聲微かに聞えて、滴露袂を濕ふすの村郊、彼れ當時萬斛の涙を揮ふて其愛すべき父母、慕ふべき兄妹に別れを告げて遊學の途に上りしなり、仰けば前途遼遠、學海無限、省みれば才短く學薄し、知らず何れの日か故郷錦衣の榮を示す者ぞ、奮然鞍を叩て郷關の詩を朗吟すれば、故山既に遠靄に没して復見るべからざりき、嗚呼指を屈すれば、爰に八星霜、石狩の野に冰雪を噛み、辛酸奮勵到らざる無く、今や螢雪の功成り光榮ある學位を得、遠からずして故郷に父母を拜せんとす、其の快其の愉、其れ幾干ぞや、懇篤なる長官の告辭、愛慈なる校長の演舌、皆以て彼等の社會に入るの首途を祝し、衷情を吐露して將來實行の心得を諭さざるなし、式終れば、同窓會の歡迎會、校生の送別會、右に誘はれ左に伴はれ、或は同縣人の特に此名譽ある學生の爲に祝費會を開く等、此數日間は實に卒業諸士の祝宴招待のため忙殺せられんとするなり、芽出度き卒業式を終へて、在學生は爰に二ヶ月餘の暑中休暇を得て、或は故山に父母を省みるものあらん、或は北海内部を跋涉して親しく原人的風物に接するものあらん、或は測量手となりて一學年の學資を得んとするもの、或は自ら牛乳を搾して勞働社會の狀態を探る

者而して夏<sup>〇</sup>季<sup>〇</sup>修<sup>〇</sup>學<sup>〇</sup>旅<sup>〇</sup>行<sup>〇</sup>亦此時に於て擧げらる、此旅行や特に學校より旅費を給して三年級諸生の専門科業を調査せしむ、卒業論文の材料主として此に出づる者なり、要するに彼等は勉めて有益に之を利用せんとするなり、決して夫の花に浮れ月に耽り、休暇を利用して情慾を遣らんとする愚を學はざるなり、亦以て學生の自治的精神を見るべきなり。

余輩は今夏季生活の記を終らんとするに際し、札幌間の二大<sup>〇</sup>會<sup>〇</sup>を紹介せんとす、何ぞや、則ち一は夏季講話會、他は端艇競漕會とす、甲は智育修養を主とし、乙は体育奨勵を主とし、甲は靜肅、乙は活躍、一は札幌に開かれ、他は小樽に開かれ、一は博識の學者より成り、他は活潑なる青年より成る、而して此二者も亦た吾校學生の發起する所、豈に社會に少補なしとせんや。

秋

大試験已に終り、七旬の暑中休暇に、吾か學生は歸省に、旅行に、一年の苦學を散して再び集ふ演武の樓上、校長の告辭、教官の演舌、授業爰に更たまり、新學期は爰に始まり、彼等は孜孜として勉學の途に就きぬ。



本科進入生は來れり。歡迎會は二年生の周旋にて復習講堂に開かる。歡迎の辭、報告の辭、相提携して共に斯道に會通せん事を契り、兄弟の約此に成り、手を握り襟を啓て談じ友情滴たるが如し。

己にして白露、凄其として、千歳の鶴夢を驚かし、秋色石狩の原野に滿ち、石狩川の鮭、潑測として躍り、葡萄正に熟して、苹果累累として園林に紅實を結ふ、乃ち漫々秋夜長。烈々北風涼。展轉不能寢。披衣起彷徨。彷徨忽已久。白露霑我裳。俯視清水波。仰見明月光。天漢迥西流。三五正縱橫。草蟲鳴何悲。孤雁獨南翔。鬱々多愁思。綿々思故鄉(下略)

吁秋の氣たる能く人をして感傷せしむ、剛膽悍勇曹操の如きも尙ほ槩を横たへ月明星稀を長嘯せしにあらずや、況んや北海の孤島に遊學するの清貧孤獨の學生に於てをや、仰き見れば月明に萬戸砧聲高し、顧みれば衣破れ靴綻ふ、知らず故郷の父母弟妹如何に此の暮秋を送るや、想ふて此に至れば誰れか血涙の滂沱たらざるを得ん、然りと雖も、吾か學生は確かに皆一個の理想を有せり、此の精神的修養は實に農學校開設以來因襲の校風にして、彼等は暇あれば乃ち聖書を誦き、釋奠の經を講

し、或は古史を繙きて日本固有の神教を研究する者、或はゲーテ、カーライルの高俊の理想に思想を練る者、各々其の好む所に於て學ぶ一ならずと雖も、長夜兀々として理想を練り、膽略を鍛え、安心立命の礎、信仰悟道の念を得んとするや一なり、此れ同校學生の概して品行方正にして、志想純潔、事に當り物に應じ、能く事理を窮極して、忍耐不撓、他校に絶尤なる所以なり。

嗚呼、彼等の精神的修養既に斯の如し、而して之に伴ふ、體育練習は如何、見よ、汪漫たる狩江、鮭魚潑測として躍り、幾千の漁夫、舷を叩て綱を曳く、一隊の青年あり、小舟をにし、其の間に入り、具さに其の收穫を調査し、勞働資本の分率を考ふ、之れ豈に我校の水産經濟實習に非ずや、又見よ、童然たる臨眺山頂、石狩の野に下瞰し、滾々たる石狩の長江、秩々たる屯田の兵屋、開墾蕃殖の元氣、鬱然として上るの所、己れ將來の責任如何に重大なるかを想し、胸を叩て慷慨する者、是れ豈に秋季登山の狀に非ずや、況んや夫れ綿蟲飛んで夕張、諸山漸く白きを見るに至りてや、樹葉紅變苑として錦繡を懸くるか如く、厚別、輕川の風景、紅於二月花に、麗絶例ふべからず。時こそ來たれと吾校には一、大遠足會を近郊に擧ぐ、唯た見る本科生あり、豫修科生あり、工學科



生あり、森林科生あり、農藝科生あり、上は校長教授の一群より、下は給仕小使の面々に至るまで、各々隊を組み列を整へ肅々として聲なく唯履聲を聴くのみ。忽ち一人あり、小丘の上にて起つて斷層を指し、地質の狀を語る。是れ地質學の教授某氏と知られたり。忽ち一人あり、諄々として肥料實地試験の説明を試む。即ち化學講座主任某氏なり。或は蔬菜栽培を説く者、或は移住民の近狀を説く者、其の行く所進む所に觸れ時に應じて實地の講義をなす。乃ち之れ司令將校の其部下に訓示するが如し、而して到る處の村落農家や渴仰して邀迎し、鶏を屠り瓜哇薯を煮優待到らざるなく、且つ曰く吾等卿あり以て今日の安きを得たり、願はくは羞膳を勸めて其勞に報ひんと、淳朴至誠の情、眉宇に溢るを見る。斯の如くにして其目的地に達するや、重隊此に於てか豚を屠り晝餐を饗す、美味到らん方なく、師弟相與に味ふ、亦瀟然たる和氣あり。此行や僅かに一日時長しとせざるも欣懷に耐へざる者多し、特に師弟親密、隔壁を置かざるか如き、其一なり。斯の美風吾か農學校を措て何處に求めん。

### 冬

既にして十月下旬、亞細亞大陸の西北風は浙瀝として北海中央大山脈と撞突

し、凍雲暗澹として寒威爰に萌し、手稻山白帽の戴くを見るや、忽ちにして六花霏々として間々霰霰を交え、枝叫ひ樹震えて北海道の冬は来る。北海の冬や、豪放なり、猛烈なり、其の體々として千里際涯を見ざるの所、一陣の北風藻岩山嶺を摩し來り、瓊を碎き珠を亂たし、氷雪煙の如く空中に躍て、天地晦冥、澎湃として千軍萬馬の一時に襲ふが如き者、殆んと五ヶ月、此長日月吾か青年は如何に其の生活を送る。

彼等は讀書に耽れり、學術に身を委ねり、集會に辯を彰せり。若し其れ寒月玻窓に映して一燈の幽なる所、紅爐を擁して其の愛好する所の書を展べ、來れば興味津々春風懷に和ぐが如く、心頓かに更たまり、情致油然として涌き、亦た夜の更くるを知らざるなり。況んや友あり雪を衝て來り會するをや、正に是れ鹽煎餅の一枚は大牢の一盤に當り、澁茶一椀は渴を醫して談柄とするに餘ある者、嚴寒、夜話の情味、吾が北海道に於て之を見る。

余輩は今此冬間吾か慈師訪問の狀を記載するに當り、特に讀者に一言せざるを得ず、何ぞや、曰く師弟の關係之なり。夫れ我國官私學校多からずとせず、然れども吾農



學校の如き、由來幾多の歴史を有し、校長教官悉く之れ曾て此校を出てたるの名士を戴き、驟然として學ぶの學校何れにか之を見ん。東都幾多の校舎華は華なり、美は美なり、然りと雖も其の師弟の關係に至りては果して美なりや、新聞紙上屢々吾人をして醜聞に驚かしむるに非ずや、師は傭銀を貪ほる日雇人夫の如く、弟や亦傲慢不羈好て其の醜を發きて本懐となす者の如く、倫理紊亂、徳義爰に衰へ、此惡風引て全國に及ぼさんとする者の如し、豈に慷慨に耐ゆべけんや、獨り我農學校や毅然として此毒風に染まず、益々其の美粹を發揮して世を戒むる者の如し、是れ斯校の北斗極星として學校の羅針盤たる所以なり。若し夫れ寒夜月を踏み雪を分けて師を訪んか直に書齋明窓の下に引て、茗を煎じ菓を出して温乎として語る恰も春風和氣の間に在るが如く、恩愛の情眉宇に溢れ、欣慕の念起さざらんとして欲するも得ざるなり。唯た是れ夫の教場に在りて威嚴堂々犯すべからざるの教授なるを疑ふのみ。此を以て若し或は學校の施政上不満の點あれば、生等遠慮無く其胸中を明かして其意見を問ひ、師亦た喜んで之を聞きて其取捨を告げ、綽然として崖岸なし、此を以て上は本科生より下は農藝科生に至るまで、宛として兄弟の如し、彼の同盟休校の

校 學 農 幌 札

校 學 農 幌 札

如きは、未だ嘗て本校に見ざる所なり、吁世の教育家が豈に鑑みずして可ならんや。此間各種集會は相繼て開かる、曰く文武會、曰くカメラ會、曰く冬期講話會、曰く開職社、曰く史學會、曰く農學會、曰く博物學會、曰く何、曰く何、是等素より四季時日を定めて開會する者なれ共、特に冬季を以て盛大なりとす、或は演壇上デモステスを壓倒する者、或は探微精理ダーツ、フン、を走らす者、北海大學生の元氣學識、此に於て見るべし、其詳は本校に於ける諸會の部を参照すべし。

冬期學生の娛樂は、雪、戰、スケ、ー、チ、ン、グ、及、び、山、滑、り、と、す、ス、ケ、ー、チ、ン、グ、は、吾、か、學生の初めて之を行ひし者、其の鏡の如く凍結せし中島遊園の池、彼等は、スケ、ー、ト、を、穿、ち、て、電、光、の、如、く、滑、り、て、或、は、球、取、り、鬼、遊、ひ、旗、奪、等、の、技、何、れ、も、壯、絶、な、ら、ざ、る、は、な、し、後、此に倣ひて、體育會遊戯部等相繼て起り、吾學生を師として之を學べり。

雪中、手稻、登山は、最も雄壯快絶を極むるものなり、今其の景況を記さん、時正に二月の候、氷雪漸く弛みて夜間の寒に凍り、翌朝尙ほ錯々として僅かに足跡を没す、此の時、方に彼等は、蓆を負ひ、金剛杖を提けて上る、山は札幌を去る三里、手稻村の南にあり、海面上を抜く、四千有餘尺、皎潔玲瓏、旭日之に映し、眩然として老仙の如し、彼等



は今や其半腹にあり、忽ちにして山風一颯、山角を摩して來たる、其勢奔馬の如し、乃ち彼等は雪面に俯して之を避く、斯くの如くすると數度、恰かも之れ亞爾布の險崖を攀づるが如し、富岳の峰劔に上るか如く、勇壯豪放、北海の特絶以て味ふべし、己にして頂上に達す、首を回らして四顧すれば、南部石狩の山脈、巒々として白龍の尾を振ふが如く、臨眺、圓山の諸山は、玉筍を并るが如く、風物一變、勝景更に奇なり、而して白皚々其際涯を見ざる者は、石狩の平原にして紺碧一湛、其西に現はるる者を日本海となす、乃ち負ふ所の蓆を敷き、而して滑下す、倏然雪碎け、瞬息四千尺夢寐の如く麓に達す、恰も之れ翛然として翰羽を生し、風に御し、虛を躡み、企然下界に下たる者、其の捷快何ぞ耐えん、是れ北海に來りて初めて見るべきなり。

### 第五節 諸入費

余輩は已に吾校學生四時生活の狀を記し、併せて吾校特有の學風、体育、精神的修養及び師弟の關係を報せり、今や終りに臨んで學生生活の費用を告示するの必要を感じぬ、夫れ警枕刺股に半夜を徹し、精神一到、何事か不成の句を吟じて、青年を喝破

する田間の聖人は知らず、苟も高等なる科學を學び完全なる教育を得んとせば、無資無給、以て學海の怒濤を凌ぐべからず、蓋し學資や學生の流通資本なり、勤學命脈の係はる所なり、故を以て、天下幾多の俊秀傑士、半途屢々學資の困阨を告げ、血涙を吞んで廢學の不幸を嘆ずるもの多々、豈に顧みざるべけんや、況んや今や經濟上の變動は端なくも物價暴騰を告げて、學生の財政や日に益々緊縮を訴ふるに於てをや、是を東都西京遊學の士に需む、曰く最低度十五圓、多きは三十圓に至り、平均二十圓強なりと、大學寄宿。而して之を本校に比較するに、頗ぶる其の差を見る、今茲に本校寄宿學生の費用を概算するに、授業料を除き十四圓ありて、以て中等の生活を送るを得べし、但し冬季は薪炭料として一圓を加ふ、蓋し食費及び石油代は七圓を以て足るべく、筆墨紙の如き諸會費の如き書籍雜誌の如き、其の他の雜費の如きも亦七圓を以て足れり、即ち東都遊學費の最低額にして、本校學生は毫も不足を感ずるとなし、而して其最低額に至りては、十圓を以て自活するもの多し、蓋し此少額を見るもの、一は授業料の低廉と、一は北海道の物價比較的に高價ならざるとに起因すると雖も、抑も亦北海道の地、他に誘惡の途乏しく、而して吾校々風たる質朴勤儉



の徳、與つて大に力あるものと謂はざるを得ず。吁此の僅々たる學資を以て、大學程度の科學を學ぶ、天下何れの地にか之れを見ん、加ふるに、我校には品行の方正、學術優等の輩を擧げて校費生となし、特待生となし、以て一學年の學資を給し、或は授業料を免じて特に恩典を加ふ、又新開の地たるを以て、薄資者は爲めに、各餘暇に業務の道を得て、一學年の學資を得べし、來れ、來れ、世の學資に苦むの俊秀青年、何ぞ勇進一超、此真相を味はざる。今此節を終るに、至り被服に要する費用を掲げんに

制帽	一ヶ	金	二	圓	制服(冬)	一組	金	十三	圓
外套	一枚	金	十三	圓	靴	一足	(二圓より四圓迄)		

而して本校在學年限は多きは六年に至るが故に、制帽外套の如きは各一を以て足るべきも、制服は少くも上衣二枚を要し、袴三枚を要す、而して靴の如きは殆んど一少年に一足を要するが如し。

### 第六節 本校に於ける諸會 文武會

本校の機關たる文武會の目的とする所、會員の智徳を研修し、體育を奨励し、一致結合を謀るにあり、其會務は第一、第二の兩部を置き、分掌し、第一部に於ては専ら智徳を研修し、第二部に於ては主として體育奨励に關する事務を執るにありて、會員を分ちて四種となす、即ち本校卒業生及び同校に關係ある者にして本會の目的を賛同する者を賛助會員とし、本校職員を特別會員とし、本校學生生徒を通常會員となす、文に於ては毎月第一土曜日を期して、例會を開き、互に智識を交換し、辯論を練り、隔月一回機關雜誌を發刊して、文材養成に汲々し、又武に於ては各種の武術遊戯を盛にして、平素の體育を奨励し、且つ春季の遊戯會、冬、秋、二季の遠足旅行を催す等、所謂文武の兩道を研磨し、着々校風の發揮を勉めつゝあり、本會は在來本校内に設置せられたりし、學藝會、遊戯會の兩者が經濟上所屬上體育上の諸點より、兩會合併の必要を認め、明治三十四年七月に於て兩會協議の上合同したるものにて、將來益本校學徒の三育涵養に資益貢獻する所大ならざんばあらず、今嗣て過去の學藝會、遊戯會兩者の歴史を尋ねるに、學藝會は明治廿四年始めて豫科の有志者相謀り、文友尙志の二會を合し、學藝會と稱して豫科の機關たらしめ、智を磨き、辯舌を練磨し



且つ風紀を匡正し、志氣を鼓舞するを以て目的とせり、爾來演說會に、雜誌「惠林」に、其目的を貫徹するを勉めたり、後東京に支部を設けぬ、尋で明治廿八年に至るに及び、豫科の修業年限減縮せしと共に、全校の機關たるべき會の必要を感じ、茲に本校學生生徒の合同の會として見るに至れり、此に於て「惠林」を更めて「學藝會雜誌」と稱し、春秋二期に大會を開き、月次に小會を催し、會運一層の隆盛を致せり、而して雜誌號を重ねること三十四、總會を開きしもの三十有餘、實に本校に於ける唯一の大會なりき。

遊藝會は本校學生生徒の體格を強壯にし、活潑の氣風を發達するの目的を以て設立せられし所にして、會員を三種に別ち、本校の學生生徒を以て通常會員となし、本校卒業生を以て賛助會員となし、本校教官及び本校に關係ある者を以て特別會員となせり、而して會頭幹事は皆通常會員より互撰する所に係る、歲次五月を以て開會す、當會の創立は實に明治十一年の春にして、爾後綿々として二十回の開會を爲せり、恐くは國內の諸學校遊藝會あるの嚆矢ならんか、其盛んなる語を、遊藝と轉譯して、方今一般の通語たらしめしが如きは、以て聊か當會が本邦の運動に貢獻する

所ありしを誇るに足らん、斯の如き特殊の歴史を有する二有力團體が共に合同して、改進畫策、茲に一律不搖の根柢を固め、益々學校教育と經緯をなし、圓滿なる發達を求め得べきなり。

### 札幌學藝會

學藝會は出版事業并に學術的公開演說等に關する一切の事務を司掌し、已に出版せる所の著述は三十有餘に及び、如何に本邦著述界に歓迎せられつゝあるかは、敢て記者の贅言を俟たず。

### 札幌農學會

札幌農學會は農學に關する智識を交換するの目的を以て起り、會員は農學士、農藝化學士及び本校在學生にして、外に本校農藝科卒業生を會友となし、亦會旨を翼賛し、會員の紹介ある者を客員となす、本會の創立は明治卅一年十一月にして、爾來三回の總會と二十回の例會を重ね、益々闡明開發深奥に進歩しつゝあり、毎年二百餘頁の會報を發刊し、正に専門學術的團體中有力なるものの一なり。

### 札幌博物學會



未開地の拓殖をなさんとせば先づ博物學研究を忽にすべからず、四圍の狀態判明して始めて完全に開拓の効を奏するものなり、在札幌農學校職員學生々徒並に殊志者茲に見るあり、明治廿四年札幌博物學會を創立せり、其主意とする所は、本道の人類學、地質學、動植物學を深く研究して、本道拓殖の上に大に資せんとするにあり、年を閲すること十有一年、月次會を開くこと百回、其間研究せるの事實は本道拓殖の上に、將た各専門雜誌上に光彩を放てり、會場は本校植物學講義室にして、七八兩月を除くの外、毎月第三土曜日開催し、會員各自の研究と共に博物學一般に關する通俗的の講演あり、亦時に本會の公開演説をなすことあり。

#### 札幌史學會

我校有志者史學の必要を認め、之が研究の機關として札幌史學會を起し、廣く同好の士を募りたるは明治廿五年の春にして、爾來幾多の會員と幾多の基礎とを得、普く東西の史を鑽研考察し、殊に本道諸般の事跡を推理探究し、荒漠たる北海の原野に、一明光を輝かしたるの効亦大なりといふべし。

#### あかる會

本校農學甲科專攻生及び之に關係する教官出身者か其實科に従ひ組織する所に於て、内外の新研究を紹介し、又各自修得せる諸問題を研究討議談論して、以て斯學進歩を相伴はんとを勉むるを以て目的となし、明治廿三年の創立に係るものなり、今斯會か命名の歴史を尋ぬるに、農界の風雲暗濤として真正に其所生を明かにし、鮮明の旗色を以て北海の天地に雄視せんとするに由ると、亦以て本會か其意の那邊に存するかを知るに足らん、集合は毎月第三土曜日とす。

#### 畜産會

本校に於ける農學乙科專攻生及び其主管教官出身者に依て組織せられ、毎月一回集會を開き、學理的に實際的に諸種の方面より畜産界に横はる所の問題を考究し、各自の研究を紹介するにあり。

#### かめら會

同じく本校に於ける農業經濟學實科專攻の學生卒業生及び之に關係ある教官より成り、農業經濟學、農政學及び各國殖民制度を理論的に研究攻學すると共に、當今に於ける實際的問題に關しても討議し、以て學と實とを併せて修得せんことを期す。



す、會日は毎土曜日なり。

### 舍密會

本校農藝化學實科專攻の學生卒業生及び之に關係ある教官を以て組織する所に於て、毎月二回第一及び第三金曜日を以て會日となし、一般化學并に農藝化學に關する海外雜誌、及び著作の新説に就きて紹介を爲し、又自家研究の報告を爲す。

### 植物學新著講讀會

一般植物學殊に植物病理に關する新著を分擔講讀し、之れを會員一般に紹介するものにして、會員は本校植物病理學實科專攻の先輩及び學生より成り、主任教官之れを督し、毎木曜日を以て集會す。

### 工學會

工學會は本校土木工學科卒業生及び在學生徒が、互に工學上の學理を研究し、併せて交誼を厚ふするの目的を以て、明治卅二年發會し、既に機關雜誌は其號を重ねるに至れり。

### 豫修科會

豫修科會は豫修科全員の親睦を計り、且つ豫修科としての維持發揮を以て目的となし、明治卅四年十一月の創立に係り、一學期一回の集合をなし、精神的修養辯論養成を勉めつゝあり。

### 札幌農學校同窓會

同窓會は本校本科卒業生より成立し、本校の隆盛を謀り、北海道拓地殖民の事業を翼賛するとを以て其目的となす、毎年二回發行する其報告を見る時は、其會員は多方面に渡り、或は官界に、或は實業界に、或は又た政治界に、教育界に、其の職を俸し、廣義に於ける農界の爲めに貢献する大なるを知るべし、而して本校に取つては其盡す處や大にして先きに巨萬の財産を悉く寄附し、更らに惜しむ所なく實に同窓會は本校の進歩と共に益發達し、科學界及び實業界に一大勢力となるべきや必せり、本會は又た其機能を活動せしめん爲めに廣大なる家宅を購入し、俱樂部となし、各種の集會に用ゐる、東都には其支部を設けて、兩々氣脈を通ず、進んで本道農業の改良進歩を圖るを以て目的とし、舊き歴史を有する本會が時運に伴ふて其基礎益々鞏固を加え、今や毎年一回開會の本會總會は茲に十回を重ね、毎月、農友なる雜誌を發



刊するに至り、本道拓殖上に貢献する所、些少なりとせず。

### 開識社

智識交換、相互親睦の目的の下に、明治十年本校學生(第一期卒業生)の組織する所なり、毎月好日を期して一堂に相會し、自家の意見を吐露し、或は是を批評して智識開發に資す、加ふるに英語練習に重きを置き、毎回英語演説、又は英語暗誦を試む、當初三十三名の社員あり、勵精事に従ひしが、明治廿六年に至り殆んど休會の姿となれり、其後一二の學生大に盡瘁して復興せしも亦々或事情の爲め再び休會の姿となりしが、明治三十四年十月復た長き歴史を有する本社を復舊すると共に、現今社員は本科寄宿學生に限り、毎月第二、第四の兩金曜日を期して相會し、智識交換、私徳涵養、辯論養成に勉勵怠らざると共に、和氣霽々たる一家團樂的親睦を厚ふし、爾來會を重ねる三百餘回、蓋し本校の紀念とすべき團躰なりとす。

### 英學協會

明治廿四五年の交設立せられし所にして、斯學に得意なる内外人を聘して歐米諸大學の著書に就き研究する者なり。

其他文學研究を欲する者は無逸會を組織し、宗教研究を望む者は、基督教青年會、佛教青年會を組織し、亦海上に於て海國男子の心膽を練らんとする者は、北海道短艇會を組織し、半歲積雪の間室内讀書講習に飽く者は、スケートクラブ俱樂部を組織する等、各自種々の方面に於て奮勉せり。

### 第七節 札幌農學校々有財產

札幌農學校は既に前章に於て、創立の歴史を明らかにしたる如く、北海道開拓の草創に興り、一般移住者に拓殖事業の模範を示さるべからざるの職責を有するを以て、官之に給するに學田地を以てし、歐米の新學問を應用して、試験的農業を營ましむる所ありたり、爾來年月を経ると共に、資産漸次滋殖し、今日に於ては實に巨萬の額に達せり。

凡そ歐米の各國に於ては、學校は多く獨立の經濟を立て、悉く國庫の支辨に出づるが如きものは、甚だ罕なりとす、則ち多くは其校有財產によりて學校の維持をなす者とす、然るに本邦に於ては、這種の學校一も見ると能はず、是れ固より彼我其設立